

医家芸術 2019 年 前後期合併号

63 巻 通巻 637 号

目 次

第 67 回医家美術展 2

第 49 回医家写真展 5

第 57 回ドクターズファミリーコンサート 8

第 64 回邦楽祭 11

◇医家随想

新しいうち女房は沖の石

豊泉 清 13

皮膚が痒くて黄疸（おうだん）

かしら？－肝硬変の終末期

浜名 新 20

さかさまのオリオンを越えて

出来 尚史 31

お役御免

八潮 弘三郎 46

松原湖の想い出

小川 昭子 75

眞智子その愛その死

和田 秀敏 77

記備談語－13－

佐藤 玄祥 88

私の旅

白矢 勝一104

医芸俳壇112

医芸歌壇113

クラブ通信114

編集後記114

原稿募集のお知らせ114

第67回 医家美術展

2019年11月17日（日）～23日（土）

東京交通会館 B1 ゴールドサロンにて

【 17日 美術展懇談会 】

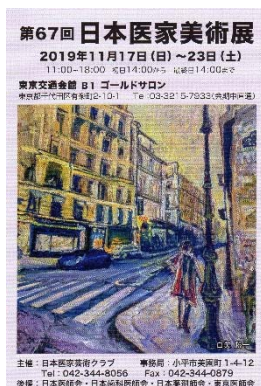
令和二年十一月十七日（日）～二十三日（土・祝）、東京交通会館・地下一階ゴールドサロンにて、第六十七回医家美術展が開催されました。会場である交通会館は、有楽町駅から

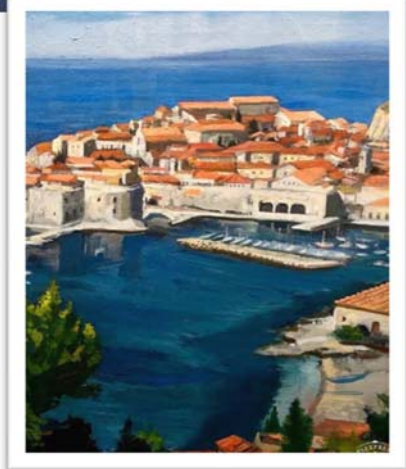
徒歩一分と交通の便がととてもよく、素敵なサロンでした。

今年は二十名による三十九作品が
出展され、力作ぞろいのすばらしい
美術展となりました。

懇親会では作品にかけた想いや近況などを話し合い有意義な時間をもにしました。また、プロ画家の方から美術展の好評を戴きました。参加された会員の方々もとても興味深く聞き入っていました。

会場の雰囲気を少しでも感じていただけたらと思います、一部の作品と会場の様子の写真を掲載させていただきます。







第67回医家美術展

2019年11月17日～23日

氏名	作品名	サイズ	種別	専門科目	
浅賀まきこ	ドブロブニク	F 2 0	油彩	耳鼻科	東京・杉並
	アドリア海	F 2 0			
	チェスキークルムロフ	F 1 0			
今井 均	武士の一分	S 1 0	水墨画	内科	東京・東村山市
	ぶどう				
榎本 貴夫	桂林朝景	F 3 0	油彩	脳神経外科	つくば市
	誠一兵馬俑	F 1 5			
木村 典子	小地蔵	F 1 0	油彩	内科	東京・杉並
齋藤 壽子	ハリネズミ 子年	F 8	油彩	眼科	東京・国分寺市
坂下 昇	山帰来と柿	F 3 0	油彩	外科	広島
	広島神楽	F 1 0			
	鎮魂の日	F 1 0			
白幡 雄一	裸婦	F 5 0	油彩	耳鼻科	東京・千代田区
白幡 裕子	令和によせて I	F 2 5	パステル	耳鼻科	東京・千代田区
	令和によせて II	F 2 5			
白矢 勝一	パリの街角	F 2 0	油彩	眼科	東京・小平市
	シャンソニエ I	F 2 0			
	シャンソニエ II	F 2 0			
清水 妙子	木立	20×20	フュージングガラス	甲状腺科	東京・花小金井
鈴木 博	懐しむ	F 1 0	油彩	耳鼻科	東京・板橋
	ベリーダンサー	F 1 0			
鈴木 啓之	縄文のしじま	F 1 0	油彩	皮膚科	川口市
		F 3 0			
		F 8			
長沼 弘三郎	河西回廊○連山	F 1 0	油彩	泌尿器科	宮崎
	河西回廊○滝	F 2 0			
	梅花	F 1 5			
野口 眞利	夜のレストラン	F 5 0	油彩	内科	東京・練馬
	モンマルトルの坂	F 1 2			
	教会への道	F 1 2			
橋本 英明	故郷				
矢ヶ崎 千良	K嬢マンドリン演奏	F 12	油彩	外科	
山崎 嘉弘	夕暮れのキリン	F 3 0	油彩	内科	静岡市
山下 婦美子	アンコールワット	F 2 0	油彩	内科	東京・杉並
山田 治	日の出の刻	F 30	油彩	精神神経科	東京・板橋
	日の出	F 2 0			
藤島 墨久	青田蛙鳴	F 2 0	油彩	画家	東京
	峡清閑	F 1 2			
	流雲清香	F 1 0			

第49回 医家写真展

2019年10月16日(水)～20日(日)

JCII フォトサロンクラブ25にて

昨年も千代田区にあるJCII Iフォトサロンにて、十月十六日から二十日に第四十九回医家写真展が開催されました。

会期中、最終日に行われた懇親会では、八名の会員が参加し、プロ写真家による好評を聞いたり、撮影秘話や近況報告などを語り合い、有意義な時間を過ごしました。

会場の雰囲気が少しでもお届けできればと思い、写真を掲載させていただきます。



医家写真展 表彰リスト

- | | | |
|----|------|-----------|
| 金賞 | 中野義宏 | 僕の居場所 |
| 銀賞 | 岩瀬 光 | 夕張湖の水没林 |
| 銀賞 | 押切 勝 | 竹林の小径 |
| 銅賞 | 竹中康雄 | 飛翔 |
| 銅賞 | 白矢勝一 | 夜の終り |
| 銅賞 | 佐々木正 | 倉敷美観地区の情景 |



僕の居場所
（小学4年生）
中野 義宏

金賞



夕張湖の水没林
（小学5年生）
岩瀬 光

銀賞



竹林の小径にて
（小学6年生）
押切 勝

銀賞

第49回 医家写真展 作品目録

2019年10月16日～20日

氏名	作品Ⅰ		作品Ⅱ		専門科目
石井 光子	夢の中へ(oslo郊外にて)	D	reflection (フンデルトヴァッサーの集合住宅)	D	品川区・歯科
岩瀬 光	夕張湖の水没林	D	夕日と干潟ー熊本御興来海岸	D	立川・眼科
大森 佐一郎	祭りーさんさ踊り	D	無人駅の桜	D	盛岡・整形外科
押切 勝	竹林の小径にて	D	春の賑わい	D	東大和市・眼科
木村 典子	十字架の丘 (リトアニア)	N	額縁の中の子供達 (エストニア)	N	杉並区・内科
佐々木 正	残雪の美しさ	D	倉敷美観地区の情景	D	新宿区・整形外科
白矢 勝一	夜の終り	D	都会の孤独	D	小平市・眼科
白矢 泰三	女神ご満悦	D	船上ロマンス	D	明石市・歯科
白矢 智靖	密室	D	誘惑	D	小平市・眼科
白矢 晃靖	私もポーズ	D	メトロ昏レタン	D	明石市・歯科
白矢 紗也佳	華火	D	窓からの眺め	D	明石市・家族
竹腰 昌明	赤い屋根	D	アメリカの自然	D	調布市・耳鼻科
竹中 康雄	毅然	D	飛翔	D	広島・眼科
中野 義宏	ひとりあそび	D	僕の居場所	D	小平市・産婦人科
藤枝 賢晴	銀猫鉄道の夜	D	so much for today	D	東村山・内科
本村 美雄	花筏	D	初秋	D	品川区・耳鼻科
本村 香都子	改元の歴史	D	コスモスとアゲハチョウ	D	品川区・耳鼻科
山本 健一	フラメンコ	D	闘牛	D	港区・精神科
吉元 勝彦	朝霧に眠る街	D	武蔵野夕窓	D	花小金井・内科

D(デジタル) P(ポジ) N(ネガ)

第 57 回ドクターズファミリーコンサート

2019 年 12 月 1 日(日)シラヤアートスペースにて開催

ドクターズファミリーコンサート 2019 プログラム

日時:2019 年 12 月 1 日 開演 14:00

<1部>

- ①歌唱:秀先生 キーボード:井上先生 ギター:藤枝先生 ベース:中野先生
・Yesterday
- ②歌唱:神津先生 ピアノ:萩野先生
・as time goes by ・Sentimental journey
- ③チェロ演奏:白柳先生 ピアノ:畑尾奈緒子さん
・バッハ作曲 無伴奏チェロソナタ 3 番より、フォーレ作曲夢のあとに
- ④フルート演奏:高野先生 ピアノ:竹内綾さん
- ⑤クラリネット演奏:飯塚先生 ピアノ:水口綾子さん
・クラリネットソナタ第三楽章 シモネッティ「マドリガル」
- ⑥ピアノ演奏:清水先生
・ベートーベン、ピアノソナタ 23 番 熱情 3 楽章

～休憩 15 分～

<2部>

- ⑦サクソ演奏:原先生 バンド:はぐどばん(萩野先生、多田文信さん、有吉拓さん)
・Killing me softly with this song ・Anti calypso
- ⑧フルート演奏:前田智美さん バンド:はぐどばん(萩野先生、多田文信さん、有吉拓さん)
・Irlandaise ・Coming home baby
- ⑨バンド演奏:はぐどばん(萩野先生、多田文信さん、有吉拓さん)
・Christmas memories ・Smoke gets in your eyes ・No more blues

～休憩 15 分～

<3部>

- ⑩歌唱:白矢先生 ギター:玉澤明人
・懐かしの昭和名曲メドレー
- ⑪歌唱:白矢先生 ギター:藤枝先生 ベース:中野先生 ドラム:井上先生
・All My Loving
- ⑫バンド演奏 ギター:藤枝先生 ベース:中野先生 ドラム:井上先生
・ペンチャーズメドレー
- ⑬サクソ演奏:小沢先生 ピアノ:長由美子さん
・Take Five ・黒い瞳 Dark eyes
- ⑭クラリネット演奏:萩原先生 ピアノ:長由美子さん
・いそぎ 作曲 Johnny Mandel ・朝日のごとくさわやかに 作曲 Sigmund Romberg
- ⑮バンド演奏 ベース:佐々木先生 ピアノ:萩野先生 ドラム:有吉拓さん
・Body and Soul ・Waltz for Debby
- ⑯クラリネット演奏:飯塚先生 演奏:はぐどばん
・ルパン 3 世のテーマ

昨年12月1日(日)に行われた洋楽部主催のドクターズファミリコンサートが、東京都小平市にある白矢眼科医院併設のシラヤアトスペースにて開催されました。

今回もたくさんの方にご参加いただき、賑やかな楽しいコンサートとなりました。

参加者のみなさんの演奏や歌声はもはやプロ並みで、年々腕を上げ、観覧のみの方も大勢お越し頂き、大盛況なコンサートとなりました。

一部ですが、写真を掲載しました。
楽しい雰囲気伝わればと思います。
今後も続けていきたいと思っておりますので、皆様のご参加お待ちしております。
観覧のみも大歓迎です。
詳しくは、日本医家芸術クラブのホームページなどでお知らせいたします。





日本医家芸術クラブ邦楽部

第六十四回 邦楽祭

日本医家芸術クラブ邦楽部の第六十四回《邦楽祭》は、令和元年十一月二十四日（日）、例年通り日本橋三越劇場（東京都中央区・日本橋三越本店）で開催。今回も十一名会員の先生方による意欲的な十二の番組が披露されました。

今、新型コロナウイルスで日本中が大変なこともあり、出演の先生方にアンケートをとった結果、今年の邦楽祭は延期しようとのことになりました。秋に少し落ち着くよう

でしたら、親睦会をしようという話もでています。邦楽部では、出演者は随時募集しております。観覧のみも大歓迎ですので、また次回、邦楽祭の開催が決まりましたらお知らせいたします。

昨年の出演者の先生の紹介と邦楽祭のパンフレットに載せたご挨拶分を掲載いたします。また、昨年六月に行われました親睦会の時に配りました親睦会の様子の写真も掲載させていただきます。



ご挨拶

第六十四回邦楽祭を今年も秋の佳い日に開催できることを心から嬉しく思います。

新しい年号を迎え、医家芸術クラブ邦楽祭は、昭和、平成、令和と三つの年号にかけて続くこととなりました。

春から夏、そして秋と、稽古の回数が次第に増え、舞台に上げるに相応しい物へとメンバー全員励んで参りました。

どうぞ本日のプログラム、最後までごゆっくり御楽しみ下さい。

出演者の紹介

嵐 裕浩(耳鼻咽喉科)調布市

川口 典子(看護師)江東区

小島 杏里(歯科)港区

佐々 英一(内科)世田谷区

鈴木 浩之(外科)練馬区

中島 信子(眼科)中央区

山田 新太郎(整形外科)練馬区

山崎 薫(小児科)台東区

山崎 律子(皮膚科)台東区

善平 朝昭(内科)台東区



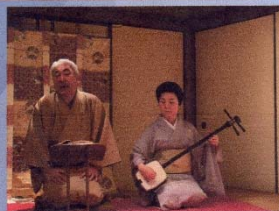
邦楽部 春の親睦会

令和一年六月十五日(土)

割烹 宮本(港区)にて



昨春の思い出



医家随想



新しいうち女房は沖の石

豊泉 清

ネタにして楽しめるといふ理屈になる。そこで遊び心が感じられる文芸作品を集めて我流の考察を試みてみた。

高校時代にHOMO SAPIENS（ホモ・サピエンス）という人間の学名を教わった。SAPIENSは「知恵のある」という意味の形容詞である。医学生時代にHOMO LUDENS（ホモ・ルーデンス）という言葉も習った。LUDENSは「遊ぶ」というラテン語に由来し、「遊び心のある動物」と解釈できる。遊び心がある動物は人間だけである。人間はまた言葉を喋る唯一の動物である。故に言葉を操る行為も遊びの

◆海の字を五つ並べた「海海海海海」をどう読むかという謎々を真つ先に披露してみたい。海女（あま）、海豚（いるか）、海胆（うに）、海老（えび）など、海の字を含む宛字読みがある。あまり馴染みがないが「海髪」と書いて「おご」と読む海藻の名前がある。宛字読みの「海」を順々に読んでいくと「あいうえお」と読める。平安時代の書物に載っているクイズだそうである。謎解きは代表的な言葉遊びで

ある。

子の字が十二文字並んだ「子子子子子子子子子子子子子子」をどう読むかという謎々がある。子には「こ」と「し」と、十二支の鼠の子（ね）という読み方がある。前掲の謎々は「猫の子は子猫、獅子の子は子獅子」と読むそうである。

百人一首に登場する小野篁という歌人が「紙に書いてある字なら何でも読める」と豪語し、嵯峨天皇が出題した十二文字の子の字の謎々を見事に解いてご褒美を頂いたという逸話がある。

四四八四四 七二八億十百 三九
二二三 四九十四万万四 二三四方
一十

漢数字だけで書いた和歌である。武蔵坊弁慶が群馬県と長野県の県境にある碓氷峠にこの歌碑を建て、読めない者は通さなかったという伝説がある。碓氷峠の旧道沿いに鎮座し

ている熊野権現の境内には今でもこの歌碑が建っている。

前掲の和歌は「よしやよし 何は置くとも 御国書(みくにふみ) よくと読ままし 書(ふみ) 読まん人」と読むそうである。

十五八二 九百一七四 三五八五二
「十五夜に 雲一つ無し 幸いに」
八六八零二 八八九四二七 五八七八

「病む我に 早く死になと 嫌な奴」
古典的手法を駆使した五七五である。
ある週刊誌で見かけた作品である。
日本人は昔から漢字クイズを楽しんでいたようである。

◆唐衣 着つつ慣れにし 妻しあれば はるばる来ぬる 旅をしぞ思ふ
在原業平の和歌である。五七五七七の各句の最初の文字を連ねると「かきつばた」という花の名前が折り込まれている。「折句」という技法であ

る。昔は濁点の表記があまり厳密ではなかったようである。

「花の色はうつりにけりな徒に我が身世に経る眺めせし間に」という小野小町の和歌がある。「長雨が降つて花の色が褪せてしまった」という意味と、「年老いて容貌が衰えてしまった」という二重の意味が込められている。雨が降(ふ)ると、世に経(ふ)るや、眺めと長雨など、同じ発音で異なる意味を表す「掛詞」という技法が駆使されている。

「月やあらぬ 春や昔の 春ならぬ我が身一つは 元の身にして」という和歌がある。「面影の かすめる月ぞ 宿りける 春や昔の 袖の涙に」という和歌もある。古歌の語句の一部を採り入れる技法を「本歌取り」と呼んでいる。和歌には「折句」「掛詞」「本歌取り」など様々な技法がある。

◆同じ五七五七七という音節数だが

「狂歌」と呼ばれるジャンルもある。いつまでも 有ると思うな 親と金 無いと思うな 運と災難

楽しみは 春の桜に 秋の月 夫婦 仲良く 三度食う飯

欲しがれど 宿らぬ人も あるものを 要らぬに出来る 我が子供かな 世の中は 月に叢雲 花に風 思うに別れ 思わぬに添う

八十や 九十や百は 若い者 鶴は 千年 亀は万年

めでたやな 下戸の建てたる 倉も 無し 上戸の倉も 建ちはせねども 世の中は 色と酒とが 敵(かたき)なり どうか敵に 巡り合いたし

金呉れる 亭主は丈夫で 留守がい い 朝寝ゆつくり 夜は火遊び

歌詠みは 下手こそよけれ 天地の 動き出されて たまるものかは

名歌で天地の神を感動させる……というある歌集の序文を下敷きにして

世の中に 寝るほど楽は なかりけり 知らぬうつけが 起きて働く
「うつけ」は愚か者を意味する古語である。

世の中に たえて女の 無かりせば 男の心 のどけからまし
「世の中に たえて桜の 無かりせば 春の心は のどけからまし」という在原業平の和歌の本歌取りである。

◆七七五という音節の都々逸というジャンルがある。
恋に焦がれて 鳴く蟬よりも 鳴かぬ蜚が 身を焦がす
諦めました どう諦めた 諦められぬと 諦めた
想い出すよじや 愚かでござる 想い出さずに 忘れずに
色の恋のと さて喧しい 人のせぬこと するじやなし
嫌なお方の 親切よりも 好いたお

方の 無理がよい
赤い顔して お酒を飲んで 勘定書き見て 青くなる

喧嘩したとき この子をご覧 仲の良いとき 出来た子だ
お酒飲みたい 酒屋は遠い 買いに行けるが ゼニがない

江戸時代に都々一坊扇歌（どどいつぼう・せんか）という三味線の名人がおり、七七五調の即興の歌を得意としていた。都々逸は人名に由来する。実は川柳も江戸時代の柄井川柳という詠み手の名前に由来する。

「草津よいとこ 一度はおいで お湯の中にも 花が咲く」

群馬県の草津節という民謡の歌詞である。各地に伝わる民謡の歌詞の大半は七七五調である。七七五調は三味線の伴奏で声を出して歌うのに適した音節数のようである。

◆トマト、八百屋、新聞紙などのよう

に、前から読んでも後ろから読んでも（縦書きならば上から読んでも下から読んでも）同じ言葉がある。一つの単語だけでなく、ある程度まとまった文章でも前後どちらから読んでも同じものがある。それを回文（かいぶん）と呼んでいる。

今朝の酒、僧の嘘、床の間の琴、関係無い喧嘩、田舎の家内、留守に何する、確かに貸した、夏まで待つな、悪い鉄柵が腐っているわ、佐藤池田総理嘘だけ言うとき、などを全て仮名文字で書いてみると、どちらから読んでも同じことが分かる。佐藤と池田という名前の総理大臣がいた。

草の名は 知らず珍し 花の咲く 啄木鳥が 鳴くぞ覗くな 垣続き世の中は むなく死なむ はかなの世

坂の名は 知らず越すらし 花の笠 松の木の 雪や早や消ゆ 軒の妻 五七五調の回文もある。

長き夜の 遠の寝ぶりの 皆目覚め
波乗り舟の 音の良きかな

三十一文字の回文である。江戸時代に七福神が乗った宝船の絵に、この回文を添えた色紙を枕の下に入れて寝ると、良い初夢が見られるという風習があったそうである。

回文は清音と濁音の違いや、「お」と「を」や「わ」と「は」の違いなどは問わないのが規則だそうである。

◆成句や慣用句のように広く親しまれている江戸川柳がある。

色男 金と力は 無かりけり

大男 総身に知恵が 回りかね

孝行を したい時分に 親はなし

女房の 妬くほど亭主 持てもせず

泥棒を 捕えてみれば 我が子なり

皮一枚 剥けば美人も 髑髏(され

こうべ)

町内で 知らぬは亭主 ばかりなり

女房が浮気をしているという噂が町

内中に広まったが、肝心の亭主だけは気付いていないという場面である。気があれば 目は口ほどに ものを言い「目は口ほどにものを言い」という慣用句はこの川柳が発点という説がある。

ではお気に入りの江戸川柳を何句か披露してみたい。

「昼からはちと陰もあり雲の峰」
この句の中に虫の名前がいくつ隠されているか。

「ひるからはちとかげもありくものみね」

全て仮名書きにしてみると、蛭、蚊、蜂、蜥蜴、蟻、蜘蛛、蚤と、驚く勿れ、僅か十七文字の中に七種類もの虫の名前が詠み込まれている。「隠し題」と呼ばれる技法である。

「道鏡は座ると膝が三つでき」

弓削道鏡という僧侶は稀に見る巨根の持ち主だったと、まことしやかに伝えられている。一物の先端が膝小

僧と同じくらいの大きさだという、白髪三千丈式の 誇張表現である。

「新しいうち女房は沖の石」

百人一首に「我が袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾く間もなし」という 和歌が載っている。新婚早々の女房は連日連夜の激戦で下の方が「乾く間もなし」である。百人一首の表現を踏まえており、本歌取りに似たような技法である。

「三人で一人魚食う秋の暮」

秋の夕暮れに三人の人が集まって、そのうちの一人だけが魚を食ったと字面からは解釈できる川柳である。新古今集に「三夕の歌」と呼ばれる和歌が載っている。

寂しさはその色としもなかりけり 横立つ山の秋の夕暮れ 寂連法師

心なき身にも哀れは知られけり 鴨立つ沢の秋の夕暮れ 西行法師

見渡せば花も紅葉もなかりけり 浦の苫屋の秋の夕暮れ 藤原定家

いずれも「秋の夕暮れ」で終わっている。寂連と西行は僧侶だから生臭いものは口にしない。魚が食べられるのは公家の定家だけである。前掲の川柳は三夕の歌を踏まえている。

三夕の歌の知識があり、尚且つ詠み手の職業も知っていてこそ、この川柳の面白さが味わえる。手の込んだクイズ風の川柳である。

「五右衛門は 生煮えのとき 一首詠み」

稀代の大盗賊として後世に名を残した石川五右衛門は釜茹での刑に処せられた。

「石川や 浜の真砂は 尽きるとも世に盗人の 種は尽きまじ」という辞世の歌を詠んだと伝えられているから、恐らく生煮えの時に読んだであろうという想像である。

「霞から 秋風までは 長い嘘」
能因法師という僧侶が東北地方の旅に出ると偽って自宅に引き籠もった。

旅先の白河の関で詠んだと称して「都をば霞と共に立ちしかど秋風の吹く白河の関」という和歌を披露したが、後にでっち上げであることが露見してしまった。

「玉虫は あぶない役を 言いつかり」

源平両軍が四国の屋島で戦った時、平家側から一般の小舟が源氏側に近づいてきた。舶先（へさき）に日の丸の扇子が掲げてあり、乗っている女官が「この扇子を射てみよ」と身振りで示した。源氏側の弓の名手、那須与一が見事に扇子を射抜いたという逸話がある。平家の女官の名前が「玉虫」である。もし与一が射損じれば玉虫は即死という場合もあり得る。確かにあぶない役割である。歴史に名を残した平家の女官は玉虫ただ一人だけだそうである。

「遠慮して ひんとは鳴かぬ 佐野の馬」

佐野源左衛門がある大雪の晩に旅の僧を泊めたが、薪がないので、大事にしていた盆栽の木を切って囲炉裏にくべた。謡曲「鉢の木」の元になっている故事である。源左衛門は極めて貧困だったので、飼われている馬も主人に遠慮して「ひん」とは鳴かない。馬の嘶（いなな）きの「ひん」と「貧」の掛詞である。

「実のならぬ 花で実のある 返事なり」

太田道灌が狩りをしている時に、夕立に見舞われたので、雨具を借りに近くの農家を訪れると、その農家の娘が山吹の枝を盆に載せて無言で道灌に差し出した。

「七重八重 花は咲けども 山吹の実の一つだに 無きぞ悲しき」という古歌に託して、お貸しできる雨具がないと断ったつもりだが、歌道の教養がない道灌には通じなかった……という逸話がある。「実の」と雨具

の「養」の掛詞である。

「四日目は 明智日陰の 守になり」
明智光秀は織田信長を倒した数日後に豊臣秀吉に倒されたので、「三日天下」という言葉もできた。光秀は日向守（ひゆうがのかみ）だから四日目には日陰守（ひかげのかみ）になった。日向（ひなた）と目陰が縁語で対にして使われている。江戸庶民は歴史上の人物の故事や逸話に精通していたことが分かる。

「腎虚にて 死んだを嫁は 苦労がり」

漢方医学ではセックスのエネルギーは腎臓から発すると説明している。性交過度は腎臓のエネルギーの消耗である。漢方では房事過度で憔悴した状態を腎虚（じんきょ）と呼んでいる。亭主の死因はナニのやり過ぎと主治医に言われて、「私の要求が強すぎたのかしら」と女房が恥じ入っている場面である。

「湯灌場の 笑い腎虚で 死んだ奴」
湯灌とは遺体を棺に納める前に湯で浄める儀式である。厳粛な湯灌の席で「あいつはナニのやり過ぎで死んだ」と列席した親類縁者から笑い声が漏れている場面である。

「入り婿の 腎虚は余りに 律儀すぎ」

入り婿とは家付き娘と結婚した男性である。嫁の方が優位だから、毎夜挑戦されても婿は拒絶できず、精力を搾り取られてしまった。「律義者の子沢山」という表現はこのような状況から生まれたものと思われる。
江戸川柳の表現から、漢方医学の「腎虚」という専門用語が房事過度という意味で一般庶民の間でごく普通に使われていたことが理解できる。

◆「長い詩のそばに空き樽空き徳利」
李白という詩人は酒豪で知られている。詩を一編作るたびに徳利を傾け

るから、書斎には足の踏み場もないほど空き樽や空き徳利がごろごろ転がっている。

「春秋を読む灯火（ともしび）は夏と冬」

「螢雪の功」という故事がある。貧しくて灯火に使う油も買えない青年が螢の光や窓の雪明りを頼りにして勉学に励み、難関の試験を突破して出世した。卒業式で「螢の光、窓の……」という歌を歌った。春秋は中国古典の書籍の名前である。

春夏秋冬の四文字が全て詠み込まれている。

「美しい 顔で楊貴妃 豚を食い」

豚は中国人にとって最高のご馳走である。昔の日本には豚を食べる習慣がなかったから、江戸時代の日本人は奇異な印象を受けたに違いない。

歴史上最最高の美人と称えられる楊貴妃とブタという不釣り合いな組み合わせが面白い。

「始皇帝 無学な奴を 出世させ」

秦の始皇帝の焚書坑儒という政策がある。書物を全て焼き払い、儒学者を片端から生き埋めにしたから、始皇帝の取り巻き連中は文字も満足に読めない無学者ばかりである。

「薙医者の 友は遠方 より来たる」
論語の学而篇に有朋自遠方来、不亦楽乎（朋あり遠方より来たる、また楽しからずや）という一節がある。近所の人は腕の悪い薙医者には診てもらわない。薙医者を訪れる患者はみな遠方から来る。漢文の一節を巧みに折り込んでいる。

「人同じからず花見の仲間割れ」
年年歳歳花相似、歳歳年年人不同という漢詩の一節を折り込んでいます。花見の酒宴の席で喧嘩が始まった。同じ桜の木の下だが、顔ぶれは毎年変わっている。

「迷子札 孟母は三度 書き直し」
孟子の母は子供の教育に相応しい場

所を求めて三度引つ越しをしたという「孟母三遷」の故事に基づいている。孟母は住所が変わるたびに息子の胸に付ける迷子札を書き換えた。

「月落ち烏鳴いて女房腹を立て」
楓橋夜泊と題する漢詩に「月落ち烏鳴いて霜天に満つ」という一節がある。亭主が遊びに行つて夜が更けても帰つて来ないので女房が怒っている場面である。

「足音が すると論語の 下に入れ」
エロ本を読んでいると、人が来る気配を感じたので、慌てて漢文の本の下に隠して、真面目に勉強しているような振りをしている。

「兵書だに まごこと読んで 笑われる」
孫子（そんし）という兵法の古典がある。孫子を「まごこ」と読む粗忽者もいる。

江戸時代の教育は漢文の暗記を重視していたから、江戸庶民は難解な

漢文や中国の故事まで笑いのネタにして楽しめたようである。

ユーモア、ジョーク、ウィット、エスプリなどに富んだ漢字クイズ、和歌、狂歌、都々逸、川柳などを雑記帳のメモの中から選んで列挙してみた。遊び心を精神の栄養剤と見なして、これからも江戸時代の短詩型の文学作品の鑑賞を趣味として楽しんでいきたいと願っている。

◆最後の段落で、日本人には馴染みのない中国の成句や慣用句を、中国語辞典の中から探して列挙してみた。樹欲静而風不止、子欲養而親不待木が静かにしていきたいと思います風が止まない。子供が親を養おうと思っても親は待たないと訳せる。「孝行をしたい時分に親は無し」に相当するという解説が辞書に載っている。

行要好伴、住要好隣
旅をするには良い伴侶が必要。暮ら

すには良い隣人が必要。

説明無しでも「旅は道連れ、世は情け」とそつくりの表現と理解できる。

良機難得、良友難逢

良い機会は得難い。良い友には巡り逢い難い。

大敵不愼、小敵不侮

大敵といえども恐れず、小敵といえども侮らず。

智者千慮必有一失、愚者千慮必有一得

智者でも時には失敗し、愚者でも時には気の利いたことを言う。

花美在外、人実在心

花の美しさは外にあり、人の美しさは心の中にある。

天上無雲不下雨、天上無風不起浪

空に雲が無ければ雨が降らない。風が吹かなければ浪が起こらない。

「火の無い所に煙は立たず」に相当する。

有縁千里来相逢、無縁对面不相識

縁があれば千里離れた人とも知り合える。縁が無ければ目の前の人とも知り合えない。人と人の出会いには縁あつてこそ成り立つ。

中国語の成句には大敵と小敵、智者と愚者、有縁と無縁など、反対語を一對にして使う表現が多い。これが中国語の特徴である。

百万家財不如一技在身

子供に莫大な財産を残すよりも、一つの技術を身に付けさせる方が賢明である。

知者不言、言者不知

知っている者は喋らない。喋る者は知識が無い。

辞書には「能ある鷹は爪を隠す」に相当するという解説が載っている。

銭能通神

金さえ有れば神様でさえも思い通りに動かせる。金が万能の世の中である。「地獄の沙汰も金次第」に相当する。

樹高招風、大高惹禍

高い木は風当たりが強い。目立つ人は禍を起し易い。「出る杭は打たれる」に相当する。

中国語も独学で細々と齧ってきたので、呆け防止の目的で今後も江戸川柳と併せて勉強を続けていきたいと願っている。

皮膚が痒くて黄疽

(おうだん) かしら？

——肝硬変の終末期

浜名 新

多摩モノレールは、多摩センター駅と上北台駅との間を、運行している。この沿線には数校の大学と高校などが開校されており、朝の通学(通勤)時間には、学生と通勤客で混雑し

ている。特に4月、新規に入学する学生たちで一層混雑する。

冬の、晴れた、空気が澄んだ日に、西南方向に冠雪した見事な富士の霊峰が、周辺の峰の上にあたかも鎮座しているような遠景が見られる。夕陽が山の端にかかる頃、赤富士に染められているのも、いいものである。この借景は何ものにも代えがたく、思わず見とれて、癒される人はあまたいるに違いない。

多摩モノレール沿線には、療養型病院で実績のある、オリエンタル病院が営業している。6階建、のっぺりした直方体のビルで、一見すると、マンション風ではあるが、窓には、常に、白いカーテンが引かれ、外側に戸別毎の仕切りや、洗濯物などを干すベランダは設置されていない。屋上にはガーデンが設えられていて、病人やその家族を癒す役目をしている。

2006(平成18)年10月医療法

の改正がおこなわれた。

慢性期型の療養病院(床)に、医療区分(3・2・1、数値が大きいほど医療処置を要し診療報酬点数が高い)とADL(日常生活動作)を運動させた、診療報酬制度が新たに導入された。区分の数値が大きいほど、医療費の一括した請求点数が高く、区分3・2の割合が7割以上占めないと、経営上苦しいといわれている。この制度では、いくら検査や治療をしても出来高払いとして、請求できないのが特徴である。

療養病床への入院の患者供給源として一番多いのは、急性期型の一般病院が圧倒的に多い。その他、特養、老健、在宅などとなる。

一般病院では入院期間が1か月を過ぎると、医字管理料は大幅に減る。そのため、在院日数短縮化を目指している一般病院の医師は、特に高齢者患者の入院・治療終了後、なお、治

療・ケアの必要な患者に対して、水分・栄養補給が確保されている場合、転院先として療養型病院を選ぶ流れが、一般的となった。

つまり、医療法の改正で、療養型病院は、急性期型主病院での治療後の患者の受け皿としての機能が定着し、以前にも増して、高齢者の終末期医療の治療と処置に明け暮れる実態が顕著になってきた。

病気の末期では、生命の終末期(寿命)とリンクしていることが多い。

一般病院の入院患者で、病状が進行・悪化していても、転院日が決まっている場合、よほどの事情が発生しない限り、転院は実行される。そのような場合、病気の末期と、寿命の到来が重なると、転院当日の夜、1週間以内、あるいは短期間に亡くなることも珍しくない。

オリエンタル病院に転院した当日の夜、亡くなった事例を担当した。

70才台の男性患者は、癌末期で、胸水が貯留し、肺炎を併発して発熱し、呼吸は切迫し、肺喘鳴が聞かれ、生命徴候は右肩下がりに悪化し、気の毒な状況で転院してきた。

僕は、「もういけません。時間の問題でしょう。覚悟してください」と病状説明した。

すると、妻は、夫の、「予期しない終末期の到来」との病状説明に、心の動揺を必至にこらえ、娘たちは自制がきかず泣き出してしまった。

案の定、その夜、亡くなった。外勤の当直医が看取った。

翌日、僕は、「そうまでして転院させなくていいでしょう。まるで、死に場所を求めてきたようで、釈然としませんね」と居合わせたナースたちに不満をぶちまけた。

2006年3月、マスコミに、富山市の射水市民病院の、「人工呼吸器取り外し事件」は、大々的に報道された。

つまり、生命維持装置の象徴である人工呼吸器を取り外した医師が、「法的」に咎められるという、「人工呼吸器取り外し事件」である。その後、富山地検は、嫌疑不十分で、不起訴とした。理由を、「人工呼吸器の装着から取り外しまでの一連の行為は、延命処置の中止に過ぎず、殺人罪と認定するのは困難」と説明している。

この事件を契機に、終末期医療の論議が高まり、2007（平成19）年5月、厚生労働省は、「終末期医療の決定プロセスに関するガイドライン」を策定した。その要旨は、

＊「延命治療の開始・中止・変更などについては患者の自己決定を原則とする」

＊「医師の独断を避けるため複数の医療従事者によるチームで医学的妥当性・適正を判断する」

＊「患者本人の意思確認ができないとき家族と相談する」

骨子の中に「延命治療の開始・変更・中止に関して自己決定を原則とする」とある。このことは、患者が、意識清明時に、事前指示書などに記載しているか、あるいは治療の経過観察の場面で、意識が清明で物事の判断が可能で、意思表示することが出来ることが条件となるであろう。

しかし、臨床の現場では、患者の意識は、病気の末期になると、身体の諸条件が低下し、意識状態は不分明で混濁することがおおい。つまり、患者は、自ら意思表示できない場面が必然的におおくなる。仮に、生前意思の書面（事前指示書）の内容を実行するにしても、家族やキーパーソンの意思は無視できず、最終的には、それらの人たち、つまり、家族の意思に委ねられてしまうのではなからうか。

だから、臨床の場では、療養病床の医師は、延命処置の変更あるいは中止について、家族側と何回か相談し、

病人の意思を付度し、最終的に折り合って、変更あるいは中止を決めることになる。経験的には、延命処置の中止ではなく、変更に落ち着くのではないでしようか。

例えば、経管栄養患者の場合、流動食を変更して、手足の静脈から低カロリー輸液に変更し、自然の経過で見守ることが多いのではないでしようか。静脈確保が難しくなれば、皮下注射に移行する。つまり、自然死（平穏死、尊厳死）を目指すことになる。

体験した事例を紹介します。

104歳のアルツハイマー型認知症を患っていた女性患者は、認知症が進行・増悪して、広義の遷延性意識障害（睡眠覚醒のリズムを有し、目を開けていても意思の表示ができない）と屈曲性・拘縮性四肢麻痺の体位を呈し、気の毒な状況に移行し、当院に入院前の病院で留置された経鼻胃管による経管栄養で生き延びて、入院

期間が10年以上に及んだ。

キーパーソン（KP）は超高齢になり、2年前から入院費用の支払いに支障を来たして、医療費の少ない病院への転院を希望された。転院の交渉は不調に終わり、なんらかの対応について医事課に相談したそうだ。そこで、KP・医師・ナース・病院職員が一堂に集まり、ザックバランに意見交換をした。担当医の僕は、厚労省の「終末期医療のガイダンス」を披露して、「延命処置の変更が可能であること」を説明した。家族は興味津々であった。そこで、僕は書面で、延命処置の変更の説明、選択肢を提示し、KPにチョイスして貰うことにした。

KPが選んだ選択肢を、医療側は忠実に実行することになった。

最終的に、NGT（経鼻胃管）を意図的に抜去し、流動食と定期薬を中止し、その代わりに、静脈から、低カロリー輸液500mlを注入する選

択であった。

翌日から、低カロリー輸液500mlが24時間で静脈投与された。その1か月後、皮下注射に変更。最終的に、延命処置を変更してから約2か月後、大往生（平穏死・自然死）された。以上のいきさつから、患者の尊厳を損なうことは、無かったのではないかと僕は信じている。

延命処置のすべてを中止し、静かに見守り、自然死を俟つことも重要な選択肢ではあるが、頻度としては、「変更」よりも「より少ない」と推測される。説明と同意の場で、延命処置の変更・中止を、家族と医療側と、何回か相談を繰り返し、最終的に決めれば、家族側としても精神的負担は減ると思われる。

多くの医師は、医師のDNAから、たとえ終末期医療といえども、延命治療との認識で努力している。生命末期と考えられる場合でも、最低で

も、水分補給を行っている。家族・本人が終末期医療（処置）を拒否する場合を除いて。

病院経営の理事団は、2008（平成20）年4月、アメリカで長年臨床教授を勤められ、古希を過ぎてもなお向上心旺盛な、老練な医師を、院長に招聘した。彼は日本に帰国して何年にもなるそうで、いくつかの病院に招聘され、独自の方針を打ち出し、精力的に仕事をされ、仕事師のニツクネームがあるようだ。

専門は胃腸系の内科専門医で、老人医療に長年携わり、老人の栄養問題にも精通している。彼の第一番の仕事は、日本病院評価機構の審査で、オリエンタル病院を認定病院として、「認定される」ことが、当面の重要な仕事、とうわさされている。

彼は、病院にはびこっている旧態の風習を、スクラップ&ビルドし、新しい病院内改革と充実に向けて、職

員の意識改革を迫り、陣頭指揮を執っている。新しい風になじめない職員との間に生じる、多少の軋轢を意に介さない、自信と信念と、押しの強さがある。留学先のアメリカで、教授に上り詰める過程で、努力を重ね、切磋琢磨して競争原理の思想と風習を身につけ、止揚させる強靱な意志が必要であつたにちがいない。

彼は、新たに院内報を発行し、巻頭言と論点を書き、問題点を提起し、職員の意識改革を求めた。そのひとつが、挨拶の励行を奨励し、自らも率先して実行し、職場を明るくさせた。

病院は多職種の専門集団で構成されている。医師、看護師、管理栄養士、介護士、薬剤師、検査技師、リハビリ療養士などからリーダーを選び、事故防止、感染症対策、褥瘡管理、栄養管理、介護管理、事例報告（死亡報告）などの委員会を次々と立ち上げた。そして、カンファランスの滲透、病院

の質の充実を図ってきた。やや独善的な短兵急な実践と改革ではあつたが、職員は院長の路線を大方承認し、参加し、実践してきた。

比較的若手の医師に対しても、卒後研修と称して、受け持ちの症例を選び、週1回の病状報告を課して、個別に討議をし、研修の実をあげていた。他の年季の入った医師たちは安閑としておれなくなり、いい意味の緊張関係をかもし出した。

その結果、病院内の雰囲気ははつきり変化し、風とうしがよくなった。一方、対応しきれない職員との間に摩擦が生じ、永年勤続の何人かの職員は、急に姿を見えなくなった。

終末期医療に対して、患者側と医療側との共通認識を持つ手段として、事前指示書が流布されているが、オリエンタル病院では、DNR、つまり蘇生術拒否の書面を活用している。病院は、患者側に、蘇生術をしないこ

とを選択してもらうことを希望している。そして、入院期間中、疼痛コントロール、点滴、酸素吸入、抗生剤使用、輸血、経管栄養など行うか否かを訊いて、参考にしていく。

療養病床であるオリエンタル病院では、心肺蘇生をしない(DNR)で看取る。近年、高齢者医療において、大多数の病院では、医療側の努力で、家族は、「DNR」を受動的あるいは積極的に容認している、と推測される。

療養病床に入院中の患者は、主に70-80歳代以上の(超後期)高齢者が多い。中には、神経難病患者、脳卒中患者では、50歳代とか、60歳代の人もいる。

療養病床では、管栄養とか経静脈栄養で生かされて、自分の意思を相手に伝えられず、全介助の人たちは半数以上を占めている。そして、時々感染症、なんらかのトラブルをク

リアすれば、家族の思惑もおかまになしに、何年間も生き続ける。過剰医療対応の異様な光景といえなくもない。

現時点で、延命対応の変更、あるいは、中止を要請する家族は、まだまだ少数派である。

新院長が就任されて何年も経たない頃の事例を、鎮魂の意味合いで、綴らせていただきました。虚実があることをお含みください。

ある年の4月初め、市場冬子(いちばふゆこ、仮名、79歳)は都心の急性期型のT病院から、慢性期型の療養型病院へ、長期療養目的に転院してきた。病名は、難病の公費負担のある「原発性胆汁性肝硬変」で、門脈圧亢進で腹水・胸水貯留、肝臓性脳症を併発していた。今まで、吐血の既往歴は無い。10年前に皮膚の痒みと黄疸を自覚し、現在まで悩まされていた。

T病院の担当医は、難病で、肝硬変末期状態に移行した市場冬子に対して、長期療養の必要を認め、「診療情報提供書」を作成し、T病院の医事課を介して、オリエンタル病院の医事課あてにファックスさせた。

両病院の医事課の職員同士のやり取りから、市場の家族は指定された面談日に、オリエンタル病院の医事課の職員と面談した。

病院内部を見学し、入院コストと内訳、診療内容(入院・外来、内科、放射線科、薬局、栄養課、リハビリ科)の説明を受け、転院を了承した。難病のため「医療区分2」に相当する。病状の進展では、常時酸素吸入がなされ、あるいは24時間点滴管理になれば、「区分3」になる。

この病気は「慢性非化膿性破壊性胆管炎」で、自己抗体である抗ミトコンドリア抗体が検出される「慢性肝内胆汁うっ滞」を来とし、最終的に肝

硬変へ移行する。女性に多く50歳代にピークがあるらしい。

冬子は前年から急性期型のT病院で入院を繰り返している。全身の皮膚は痒く、目の色や皮膚の色は黄色になり、意識が時折混濁し、呼吸が苦しくなったりする。肝臓性脳症、腹水・胸水貯留による呼吸困難が主症状で、入院して、肝不全用アミノ酸製剤、利尿剤の点滴静脈注入を受け、改善すると退院し、在宅介護に移る。

無論、彼女は、高アンモニア血症改善剤のモニラック液や肝不全用のアミ酸製剤の内服をしている。意識状態が低下し、経口から食べられなくなると、薬も飲めなくなる。そうすると悪循環になり状態は悪化する。家族は心配になり、母親を入院させ、治療を受けさせて、回復を願う。胸腔穿刺して多量の胸水を排液したこともあったそうだ。

翌年の2月に状態が悪化してT病

院へ入院。肝不全用アミノ酸製剤と利尿剤の点滴で、小康状態になったので、担当医は同年の4月、肝硬変の終末期医療の継続を目的に、療養病床上に転院を許可した。

これらの情報は2か月前のもので、4月に転院してくる頃、病状は一層悪くなっていると推測された。そして、黄疸、胸水・腹水貯留、肝臓性脳症などの重い症状から、病期は末期で、それに付随して生命末期の状況が忍び寄っている、と推測された。

僕は、難病の肝硬変の末期状態の終末期医療の対応に関して、限定的な対症的な延命治療にならざるを得ないだろう、と考えている。

患者には、まだ意識があり、「もつと、もつと生きたいです」と、自分の意思を申せば、「大丈夫ですよ、わがままを言っただけじゃない。何なりと言いつけてください」と答えるよう。

病気の末期、生命末期に及んで、患

者に、「なにをしてはいけません。塩辛いものは駄目ですよ」などと、制限するのはあまりにも患者の意欲を否定することになり、得策ではない。病気の末期では、ともかく、患者のわがままを聞くことが、肝要ではないかと判断した。

患者は気まぐれで、頭の中で食べたい食材を家人へ所望しても、いざ目の前へ出されてみると、「——もう食べたくないわね」と、急に食欲が萎える状況は、日常生活でも経験する。

もし、口から食べられなくなっていれば、水分栄養補給をどうするか、入院時、その対応を直ぐ解決しなければならぬ喫緊の課題となる。

紹介状には、「肝臓性脳症に対する治療剤である肝不全用アミノ酸製剤や高アンモニア血症に対するモニラックシロップを服用できて、意識もあり、食事を摂れております」とあった。

紹介状の記載日から相当日時は経過している。果たして実際はどうか？ 状況が変化すれば、すぐにも経口から服用できなくなる。そうなれば、水分栄養補給と肝不全用のアミノ酸製剤と利尿剤の静脈注入が必須となる。手足の静脈確保が難しければ、中心静脈を確保するとか、皮下注射で対応しなければならず、「説明と同意」の場面となり、家族に選択してもらわねばならない。

家族が考えている以上に、患者の寿命のスペンは、少ないのかもしれない。血中アンモニア、総ビリルビンの高い数値、腹水・胸水の貯留、CT画像で肝臓萎縮の所見、場所や時間の間違い、生気の無い表情や反応の低下などあれば、既に肝臓性脳症に移行し、肝臓萎縮から、肝不全は確実に進行している、と評価されるからである。

市場冬子は入院予定日の午後、6階の2床部屋に入院した。50歳前後の長男が付き添っていた。僕は、彼女のベッドサイドへ出向くと、初対面の挨拶を交わした。

「担当医の江口です。よろしく願います」

「主任の田沢看護師です」

「市場冬子です。よろしく願います。わがまま言うかもしれませんが。」

——食べられなくても、本心はもつと生きたいのよ。でも、もう駄目かしらね」

「いえ、そんなことはありません。みんな協力してケアしていきますから。何なりと申しつけください。弱気にならないで下さい」

「先の病院の雰囲気とは、ずいぶん違うようね」

「衣服を開かせてもらい、ざっと診察させていただきます。よろしいでしょうか」

「わかりました」

「それでは診察に移らせていただきます」と、主任の田沢看護師は衣服を開いてくれた。

目を観察すると、球結膜は黄色っぽく、皮膚の色は黄褐色でくすんでいる。グー、パー、チョキなど両の手で難なく行い、左右の立てひざの動作も問題ない。手足の麻痺は無い。聴診器で心音や呼吸音を聴取すると、呼吸音は右側でエアの入りが弱い。胸水のためかもしれない。背中の腰部や仙骨部、踵に褥瘡はない。指や趾の間には湿潤する皮膚病変は無い。やや肥満傾向で、特に腹部は脂肪沈着があり、相当な腹水貯留があるのか、腹部は膨満し、タプタプしている。手足の静脈の状況は、長年の点滴穿刺暦で、血管は消耗し、硬くなり、弾力ある血管は無さそうだ。

「寝返りできますか？ ベッドから降りて簡易トイレ使われますか？」

「年毎に、人手が要るようになりました。一人では生きられなくて、息子の世話になって、病院でもこの通り、介護度も高く、自分の世話を一人でこなせなくなっております。もう自宅に帰れないわね・・・」

「肝臓疾患には、痒（かゆ）みはつきものですが、いかがですか」

「そうね、今でも全身が痒くて悩ましいのよ。病気の最初から悩まされて、特効薬ないかしら」

「ありきたりの薬剤しかありません。ご飯は常食で、それともお粥で、カローリーの高いゼリーなど召しあがりますか。好物があれば持ち込んでかまいません。とにかく食べてもらわないと、点滴を併用しなければなりませんから」

「だんだん食べられなくなつて。でも、配膳してもらおうかしら」

「ここでは、皆さん車椅子に移乗して、食堂兼談話室で、お仲間と一緒

に、食べてもらいます。一口でも食べられるうちは、召し上がってください。水分補給の面からも、体力維持の面から必要ですから」

「病院が変われば、食事の内容や味も変わりますからしらね」

「当院の食事は『おいしい』との評判です。食べられるうちは、召しあがってもらわないと、困ります。たぶん食事介助になると思いますが、遠慮なさらないで下さい。口から食事が入らないと、点滴を併用しなければなりません。胃に留置された管による栄養を勧めておりません」

「栄養の管を入れられるのは嫌よ！お願いね」

「了解しました」

冬子の臨床データには、門脈圧亢進で血清蛋白は、腹水・胸水として漏出され、低下している。また、貧血と血小板減少が著名であった。いくら補給しても、ザルから大切なものが

漏れ出るように、血管から漏出して、追いつかないのかもしれない。動けば息切れがして、じっとしているしか方法が無いのかもしれない。

市場冬子は、初対面の医師や、ナースに対して、精一杯気張って受け答えしたためか、エネルギーを消費してへとへとになったのか、診察の終了する頃、すっかり黙り込み、眼を閉じてしまった。

診察が終わると、医療側と家族側との情報交換の場面となる。

この場面で僕が強調するのは次の3項目である。

「ざつくばらんに言いますので、失礼の段お許し下さい。お母様は、病気の経過と病状、あるいは介護度から、終末期の段階と評価されます。あとのくらい、ライフスパン（寿命）があるのか、病状と検査値から評価しますと、大変厳しいと思います。短い期間と思われる。先方の医師から

何かご指摘がありましたか？ 急変して心肺停止になったとき、当院ではそのまま看取るだけになります。その場合、心肺蘇生を控えさせてもらいます。心臓マッサージで肋骨が折れたりします。患者様に大変な苦痛を与えて、野蛮な行為になります。患者様の尊厳を敬うかたちで、看取りさせていただいております。よろしくお願いします」

息子はどもりながら応えた。

「母は、10 年間で療養しております。昨年から入院を繰り返して T 病院の先生の説明から、病気の末期と受け止めています。先生からあと数ヶ月といわれております。親父の最後は、家族が揃うまで『心肺蘇生』をしてもらいました。現在は無理でしょうね。姉は遠方ですから・・・」

僕は思い切って発言した。

「お姉様に事情を話されて、来院していただき、ベッドサイドでお世

話をされたらいかがでしょうか。お母様はすごく喜んで、安心なさると思います。ひよつとしたら食事が進むかもしれません。親孝行のせつかくの機会と思います。大変でしょうが。

この病院では心肺蘇生術をおこないませんので、ご了承下さい。

今の病状からすると、いつ、急変して、心肺停止に追い込まれるかもしれません。今まで何回もなく、点滴で急場をしのがれてきましたが、次第に病状は重くなる気配ですから」

「早速、姉に連絡して、都合つけてもらいます。急変してもおかしくない時期になっているということですね」

「肝臓が相当程度に萎縮し、肝不全は進んでおります。意識障害もあります。肝硬変の末期は生命末期に移行しやすいでしょう。早晚、口から摂れず、点滴による補液になります

よう。手足の静脈注入が難しいので、太い静脈へカテーテルを挿入しなければならぬでしょう。水分補給の延命処置を中止することには抵抗がありません。中心静脈栄養の処置の承諾書を用意させていただきます。股のところから太い腸骨静脈にカテーテルを挿入する処置です。署名をお願いします」

「承知しました。よろしく願います」

「終末期医療に関して、『事前指示書』ではなくて、当院では『蘇生術拒否（DNR）』の書面を活用しております。当院では、原則として心肺蘇生術をおこないません。ただし、緩和医療として麻薬の使用、酸素吸入、点滴処置、抗正剤の使用、輸血、栄養管の留置など、臨床上に必要な延命処置を、臨機応変におこなっております。

でも、最近、僕は、栄養管の留置を勧めておりません。ご希望があれば

対応しますが・・・」

「心肺蘇生術をしなくて結構です。栄養管の留置も要りません。酸素吸入、点滴など、治療上必要があればお願いします」

「承知しました」

転院当日の夕食、冬子は介護士に介助されながら、一口程度しか口にできなかった。薬は、水に溶かして飲みこんだそうだ。

病気の終末期なのか、次第に意識が低下して、反応が悪くなってきた。すこしずつ、終末期が近づいているような気配である。

息子は、ナースへ伝えた。

「週末、広島から長女の姉が見舞いに来ます。それまで、大丈夫でしょうか？」

「たぶん、大丈夫とおもいます、お母様はすごく安心なさるでしょう」
長女が来室して、母親のベッドサイドで看病し、ご飯の介助をするよ

うになった。調子の良いときには、昼食時のみ離床し、みなと食堂へ向いた。だが、食事はむらびどく、3から5口が精一杯となった。食欲が沸かないようである。水分・栄養をまかないできない状況に悪くなっている。

ある日の夕方、僕は部屋を訪室し、手持ち無沙汰の姉と挨拶した。

「遠方から来ていただき、ご苦労様です。お母様はあなた様にお会いできて、喜んでおられるのではないですか」

「最初は笑顔で、うれしそうでしたが、日に日に意識状態が悪くなるようで、会話も出来ません。いつの間にか眠ってしまいます。好物の梅干やのりの佃煮を、郷里から持ってきましたが、食欲が無いのか、口をあけようとしません。張り合いがなく、ただそばにいるだけです」

「あなた様がそばにいるだけで、

母親は心の安らぎが得られて、ゆったりなされているのではないでしょう。か。親子ですから・・・」

「そうでしょうか。あまり役にたかないみたいで」

「毎日、点滴で肝不全用アミノ酸製剤・ステロイド剤・利尿剤を注入しておりますが、意識の回復ははかばかしくありません。腹水・胸水で圧迫されるのか、息が苦しいようで、酸素吸入をはじめております」

「ありがとうございます。私も安心しました。用事で週末に広島の実家へ帰ろうかと思っています。最後は立ち会えないと思いますが、よろしくお願いいたします」

「これからも、スタッフ一同、協力してケアしていきますのでご安心ください」

長女が広島へ帰って間もなく、市場冬子は、明け方、静かに息を引き取

った。当直ナースは回診で、冬子の急変を見つけ、直ちに、当直医に連絡し、急いで心肺モニターを装着した。

当直医は、肝硬変の終末期を考えて、DNR（蘇生術拒否の書面）を確認して、昇圧剤の静脈注入や、心臓マッサージをせず、静かに看取ることにした。

息子が来院し、母親を看取った時刻を、死亡時刻とした。

転院後、12日くらい経過していた。

冬子の場合、「癌」病態でしばしば遭遇する「痛み」ではなくて、肝障害で出現する「痒み」で病気に気づかされ、その後も、苦しめられ、ストレスとなっていた。「隔靴搔痒」なる言葉がある。

「もつと、もつと、生きたい」という彼女の願いは、肝臓萎縮を伴う肝不全に進行しては、どうにもならな

かった。

彼女は病魔と闘い、精一杯「生」をまっとうしたといえる。合掌

（2019年8月）

さかさまのオリオンを

越えて

出来 尚史

南半球の星空の下

クイーンズタウンに着いた時、時計の針は八時を回っていた。陽は山の端に沈み、空は茜色から深い紫へとその色を変えつつあった。湖畔の家に一つ、また一つ明かりが灯る。人影はまばらで、街全体がしじまの中に溶けていくかようだった。

ホテルは小高い丘の上にあった。バスを降りると、頭上には雲一つな

い空が広がっていた。三百六十度視界を遮るものは何もない。今夜は絶好の観天日和になる。私は思わず快哉を叫んだ。

ニュージーランドは南半球の国だ。赤道を挟んで日本とはほぼ対称の位置にある。ここの夜空は北半球とはまた違った美しさに満ちている、そう聞いていた。まだ見ぬ星に会いたい。そして星々を繋いで、ケンタウルス、アルゴ、エリダヌスなど、名だたる星座を南の空に描いてみたい。私の長年の夢——今宵それが叶おうとしている。

ほどなく完全な夜がやって来た。

夜は新しい光と共にあった。煌めく星の世界である。右も、左も、前も、後ろも、もちろん真上も——夥しい数の星が天を埋め尽くす。明るい。想像していたよりはるかに明るい。透明感を湛えた明るさ、とでもいうのだろうか。

白、黄色、赤、橙、青……色とりどりの星が瞬いている。強く眩しく、弱く繊細に。あるものは温かく伸びやかに、またあるものは冷たく鋭く。時には速く、また遅く。あれば星々が奏でるシンフォニーだ。妙なる調べは、光の波となって地上に降り注ぐ。息を呑むほどの美しさだ。神々しく豊かな旋律に魂を揺さぶられ、私は声もなく立ち尽くしていた。

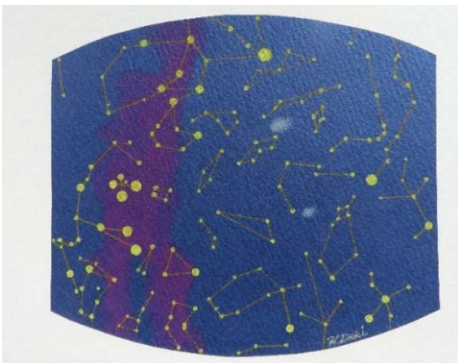
天の川が見える。光の洪水のようにやぐ目が慣れてきたようだ。天の川は何百億もの星が集まる金銀砂子の帯。南の地平から天頂に向かって緩やかに上がっている。帯の中、地平線近くにひとときわかるい星がある。ケンタウルス座の α だ。全天で三番目に明るい星。そして地球から最も近い恒星。その距離はわずか四・三七光年という。恒星間旅行が実現すれば目的地ナンバーワンとなるべき星である。

この星と、すぐ上に見える β 星を目印に星座全体を目で追ってみた。今の時刻、半人半馬の怪人は下、すなわち南を向いている。槍を構え、狼を仕留めんとする姿がおぼろげに浮き上がってきた。

ケンタウルスの前肢と後肢の間にあるのは、名高い南十字星である。今は横たわった状態だ。これから時計回りに移動し、午前三時ごろ直立した姿で南中するという。十字の形は一等星2個、二等星1個、三等星1個で構成される。小さいながら、凛とした風格を持つ星座だ。スペイン語名はエル・クルセロ。この星は大航海時代の船乗りにとって、南を指し示す重要な星であり、また「主」の加護の象徴でもあった。十七世紀初頭、南方貿易に従事した日本人の間でも「くるす」と呼ばれていたらしい。

南洋での呼称はこれとはいささか趣を異にする。十字の形ではなく、

「網」、「蚊帳」など、四辺形のイメージで捕らえることが多いようだ。生活に密着した命名には興味深いものがある。いや、どちらが相応しいというわけではない。地上の人々の思惑とは無関係に星々は輝き続けてきた。宗教的な意味合いを含めようが、含めまいが、この星座は十分美しい。南天を代表する珠玉の四つ星、といえ



クイーンズタウン南の空 2011 / 02 / 20, 21 : 45

ば賛美しすぎであろうか。

おや、空中にまばゆい光を放つ星が見える。天の川の帯からは少し離れたところ。もしかしてこれがカノープスか？　ちょうど今、南中したばかりだ。日本で見た時は水平線の彼方にぼんやりと浮かぶ、どちらかというと目立たない星だった。それがこの地にあつては仰ぎ見るほどの高さにある。美しい星だ。全天第二位の光度を誇るというだけではない。黄色味を帯びた白色は、温かく気品に満ちた印象を与える。周囲に明るい星を欠くため、余計にその雅が際立つのであらう。「南天の女王」、ふとそんな言葉が脳裏に浮かんだ。

カノープスが南の女王なら、北の王は我らが馴染みのシリウスとならう。はて、この国でシリウスは見えるか？　頭を反らして天の川を追うと、あつた！　天頂を少し過ぎ、北の空に入ったところだ。シリウスとカノ

ープス。お互い思ったほど離れてはいない。視距離にして三十度強、と読んだ。夜空の王と女王。両者を同じ視野に収められるとは、なんと贅沢な宵であることか。

シリウスは青白く研ぎ澄まされた光を、一方でカノープスは薄黄色の穏やかな光を燦と投げかけている。二つの星が続べる空が同じとは限らない。その証拠に、シリウスが強く輝けば北の星々が応えるように瞬き、カノープスがその輝きを増せば南の星々が女王を称えるかの如くまばゆい光の輪を作り出す。それぞれの君臨する領域が違うのだ。互いに敬意を払いながら、星空の均衡を保っている——私の目には少なくともそのように映った。

カノープスはアルゴ船座の一部、りゅうこつ座の α である。アルゴはいわずと知れたギリシャ神話に登場する船の名前。イアソンをリーダー

とする勇者たちが金色の羊衣を求めて乗り組んだ船だ。その冒険譚は今に語り継がれ、物語や映画となつて私たちを楽しませてくれる。

折角ここまで来たのだからアルゴの全貌を、と星座図を頼りに星々を繋いでみた。りゅうこつ座、ほ座、とも座、らしんばん座の四つを合わせ、船全体を組み立てるのだ。五分ほどかかっただろうか。ようやく巨大な船のイメージが頭上に現れる。感動した。これが伝説のアルゴ号だ。シウムプレーガデイスの大岩に一部を齧り取られた後というが、それでもその姿は十分巨大である。

勇者たちはその後コルクスへと向かい、艱難の末に金色羊衣を得た。旅を終えた彼らは今、地球の大海原ではなく大いなる天にある。アルゴ号はゆるやかに光の海を進み、艫に輝くカノープスは辺りの空間を明るく照らし出している。夜空に展開する

壮大なドラマは決して終わることがない。

さて、南天の奇観といえばこれだ。大、小のマゼラン雲。カノープスから天の南極へと下ったところに位置する天体である。現在小マゼラン雲のほうが高度が低い。初めはちぎれ雲かと思つた。あるいは、ぼんやりと滲んだ青白いしみ？ もちろんそうではない。地上からは想像もつかないが、あれは銀河だ。わが銀河系の周囲を回る伴銀河。あるいは宇宙の旅人。何処からともなくやって来て、私たちの隣人となつた。いつの日かまたどこかへと旅立つて行く運命にあるという。旅の途中でたまたま銀河系に捕捉され、行動を共にするようになった。宇宙の歴史からみればごくごく稀なタイミングだったのだろう。その偶然に人類は居合わせたのだ。私の「日本では見ることの叶わなかつた一等星のリスト」はアケルナ

ルをもつて最後となる。この星は小マゼラン雲の右方で見つかつた。そうか、これがアケルナルか。青白い光を見ながら、なぜかほつとした気分だ。全天にある二十一個の一等星のうち、十五個は子供の頃からのお馴染み。いづれも北の星だった。残りの六個に会いたくて南半球にやつて来たのだ。ケンタウルス座の α 、 β 。南十字星の α 、 β 。カノープス、そしてこの星。リストにはすべてチェックマークが入り、大願成就となつた。

アケルナルはエリダヌス川——かのパエトーンがゼウスの雷に打たれ、日輪の馬車もろとも落下した川——の河口に位置する。ここを起点として流れを遡行してみようと思う。著しく蛇行しているものの、星々を連ねて辿るのはそれほど難しいことではなかつた。目を動かし、首を回し、さらには体の向きを変えて追つてい

く。エリダヌスは最初右の方、つまり西に向かい、続いて大きく上がつて天頂に近づく。西の空に入ると百八十度曲がつて今度は下だ。十分下がつたところで再び反転、更に東進して北の空で終点を迎える。落ち着く先、というよりこちらの方が川の起点なのだが、なんとオリオン座の傍らであつた。南のアケルナルに発し、ぐるつと右回りに辿つて北まで——およそ空を半周したことになる。

日本にいた時にはエリダヌスの存在にはほとんど関心を払わなかつた。オリオンのすぐ脇から出ている川であるにも拘わらずだ。オリオンがあまりにも偉大だったせいかもしれない、とも思う。とまれ、この地に来ることで初めてエリダヌスの全体を目に捕らえることができた。夢中になつて星座を探した遠い日々を思い出す。曲がりくねる龍の姿を北の空に見つけた夏のある日。あの時の興奮

が再び湧き起ってくるのを私は感じていた。

オリオン座がさかまであること

眼前にオリオンがいる。言わずと知れた天空の狩人。北半球に住む私たちにとってお馴染みの星座である。いや待てよ。お馴染み、と言ってはみたものの、なんだかこのオリオン、様子がおかしい。星座の中心をなす鼓型の四辺形が歪んで見えるのだ。それに狩人の右肩を表す星ベテルギウスと左足の位置にあるリゲルが入れ替わっている。

そうか、逆さまだ。ここは南半球。

日本の南天に掛る星座はこの国では百八十度回転した姿で北の空に現れるのだった。本で読んでいたものの、すっかり忘れていた。うむ、確かにそのとおり。見れば我らがオリオンは、頭を下に両腕も下に伸ばしてダイヴするような格好である。短剣を象る

小三ツ星は横並びの三つ星の上に飛び出ているのだ。

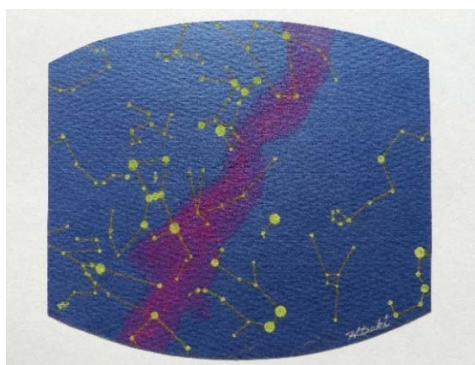
やれやれ逆さまのオリオンとは。

思わず嘆息が出た。勇猛を持って鳴る狩人もこの姿では何とも迫力に乏しい。力のなさに輪をかけているのが両隣の星座——オリオンを挟んで上に「おおいぬ座」、下に「おうし座」——である。牡牛は仰向けに横たわり、もはや猛牛のイメージはない。片

や大犬の方は猟犬の役目を忘れたのか、主人を襲おうとしているかのように見える。従者の叛乱？ オリオンを牡牛ともども追い落とさんばかりの勢いだ。星座の位置関係が変わると、こうも印象が違うものだろうか。

オリオンや大犬、牡牛ばかりではない。右から左まで、北の空に展開するすべての星座が逆転してしまった。夢を見ているかのようだ。もしこれが現実の世界なら、逆さになったの

は私の方かもしれない。先程まで二本の足で立っていたはずなのに、と慌てて下を見た。地面は確かにそこにあつた。改めて踏ん張って心の動揺を抑えようと試みる。それでもフワフワと浮き上がるような感覚は治まらない。この不思議な逆転世界を受け入れられるまで、まだまだ時間がかかりそうだった。



クイーンズタウン北の空 2011 / 02 / 20, 21 : 55

日本からは飛行機で来た。十一時間の空の旅。途中で星空を見る機会はない。移動時間が短すぎた。加えて、変化が大きすぎた。戸惑つて当然といえは当然である。

これが船旅だったら状況が違つていたかもしれない、と思う。船の上ならば星の観察も比較的容易。また航海に要する時間は長い。移動しながら星の見え方がどのように変わっていくか確かめることができただろう。例えばこのように――。

〔船が南下するにつれて南天の星の高度(仰角)が上がつてくる。やがて星々は私の頭上に至り、仰ぎ見るほどになる。なおも追いかけようとすると、百八十度振り返つて北を向かねばならない。この瞬間、東西が入れ替わる。右手方向が東、左が西だ。星座は天空に張り付いたまま北の空へと入っていく。オリオン座なら、腕から先に、次に頭、胴体の順である。船

がもう少し南に進めば、私は完全に倒立した狩人の姿を見ることになる。上下逆さま、さらに左右も反転している。地球の自転と共に右手方向(これが東)から、左手の方向(西)に向かって星座は移動する。〕

なんだかわかったような気がする。わかったような気がするが、あまりすつきりしない。この浮遊感、雲散霧消とはいかないようだ。星座のイメージに囚われすぎているというのは事実だ。ほとんどの星座の形はその伝説と共に私の中に沁み込んでいる。子供の頃から「オリオン」といえば、獵犬を連れて牡牛に對峙する姿しか頭になかった。オリオンの昇っていく方向が上であり、真南の空に至れば彼は正しく上を向く。私もオリオンと同様、頭を上にして立つ。二人共足は下向きだ。オリオンの足は宙にあるが、私の場合は大地を踏んでいる。この上下の關係は自明であり、万

古不易のものだと思つていた。頼りにする星空が逆転したことによつて、私の空間に對する感覚は大いに不調をきたしてしまつた。

しかし、もちろんのことではあるが、自らの混迷を星空のせいにしてはいけない。南半球ではオリオンが逆さに見えるのは自然の道理なのだ。見え方の変化したものを同じ名前と呼び、その名前に引き摺られている私の方こそ問題なのだ、とも思う。オリオン座は最も古い星座の一つである。メソポタミアに起源を持つこの星座はフェニキア人によつてギリシャに伝えられ、そこでその名称を得たといわれる。華麗に繋がる二等星の「三ツ星」を二個の一等星と二個の二等星が囲む形。これが星座の中核となる。多くの民族の間で、天上に雄々しく跨る巨人の姿とされた。勇氣、力、勝利の象徴である。

例外的に中国の「白虎」、「鉞」、イ

ンドにおける「鹿」という見立てもあるようだ。インドの場合、三ツ星は鹿を射止めた三節の「矢」というから面白い。日本では人や動物の形ではなく「鼓星」となる。それ以外では三ツ星に注目した「柄鋤星」、「酒舂星」など地方によってさまざまな呼称があるようだ。いずれも地域を越えた普遍性に乏しく、星座の名前としては主流にはなりえなかった。オリオンをはじめとする全天八十八の星座名が定められたのは一九二八年、国際天文同盟の総会においてである。西洋世界主導のこの名称は今に続いている。

ニュージーランドの先住民マオリ族の眼にオリオンはどのように映っていたのだろうか。やはり人物のイメージだったのか。三ツ星だけを取り出して特別の意味を持たせていたのか。それとも周囲の星々を取り込んで、より大きな星座として捉えてい

たのだろうか。

私たちが見ているのは天の川銀河にある数多の星の二次元投影像だ。スクリーンは天空という巨大な球の内面である。文明の誕生以来、人々は主要な星を繋いで意味のある姿を見出だした。それらは伝説上の人物であり、動物であり、役立つ道具や物であった。「星座は読むもの、天空の書物」といったのは誰だったか。星座が農耕や漁業、航海、呪術などに果たした役割は大きい。人類は星の有様と共に文明を築いてきたと言っても過言ではないだろう。

それほど重要な概念ではあるが、星座はあくまでも人が天空に描いた絵、二次元に留められた世界だ。どのように分類しようと、どんな名称を付そうと、三次元の世界に存在する星々にとつては「身共の与り知らぬところ」ということになろう。それでは、星々の「与り知るところ」とはな

んであるか？ それを知りたいと思う。星座という二次元の桎梏を越えて宇宙の奥深く進み、ありのままの星の世界——星々の真の姿を見てみたい。

私は強く念じた。

オリオン星域を旅する

次の瞬間、私はフワリと宙に浮いていた。いつまでも続く浮遊感のなせるわざか、それとも願いが通じたのか。見れば先程までの私は地上に残ったままだ。ということは私が「私」と思っているこれは肉体を遊離した意識だろうか？ 自分の事なのにわからない。特殊な状況下にいることだけは確かなようだ。いずれにしてもこのチャンスを利用しない手はないと思う。

「ちよつとそこで待っていてくれ」地上の「私」に声をかけた。そして意識のみの「私」は地球を離れる。時を

越えた旅の始まりだ。目指すは一路——オリオン座。

須臾のうちに太陽系を離れた。これから先は恒星の間を進むことになる。太陽もオリオンの星々もオリオン腕 (Orion Spur) と呼ばれる銀河渦巻の腕の中に位置するという。同じ場所生まれ育った仲間と思えば親しみもいや増すばかりである。

それにしてもなんという自由で軽やかな旅だろう。身体を地球に残してきたのでどんな動きも思いのままだ。百八十度上下の回転を試みる。逆さまのオリオンがいつもの正立した姿に戻った。うん、この方がいい。絶対わかりやすい。今日はこのままの姿勢を維持していこう。いよいよ恒星探査行の始まりだ。静寂の支配する透明な空間を、ある時は猛スピードで、またある時はフワリフワリと漂いながら、私は進んでいく。大気の揺らぎがないため星々は格段にくっ

きりと見える。

しばらくの間、星座の形は変わらなかった。やがてシリウスが近づき明るさを増したかと思うと、忽ち左下方に過ぎ去って行つた。主星のいなくなつたおおいぬ座はもはや星座の形を保てない。オリオンはその僚友を失つたのだ。

ほどなく小犬座のプロキオン、次いでふたご座のポルクス、カストールを見送つた。おうし座の眼、アルデバランに接近したのは六十五光年ほど進んだ時だ。太陽の四十四倍もある橙色の巨星である。あらためて牡牛の全体像を確認しようと思つたが、いかんせん、近づきすぎてうまく捉えられない。そうこうするうちに牡牛の眼は右上方へと去り、牛の顔面を形作っていたヒアデス星団も百五十光年あたりで通り過ぎた。天の猛牛の解体である。

このようにしてオリオンを取り巻

く四つの星座が早々と姿を消した。オリオン自体は未だ健在であり、中核をなす鼓型の配列はまだ保たれている。しかしいつまでもそのままというわけにはいかないだろう。

最初に変化が訪れたのはオリオンの左肩、ベラトリックスであつた。地球からの距離およそ二百五十光年。

この星は私の右上方に近づいた、と思う間もなく離れて行つた。これといつて特徴のある星ではなかつたように思う。トップバッターは空振り三振といったところか？ あまりにもあつけない退場である。これでオリオンは獅子の毛皮を掲げていた左腕を事実上失つたことになった。

その後星々は上下、左右に広がりながらその光度を増していった。オリオン座を構成する主要な星は我が太陽よりも明るく大きい。その横綱級ともいふべきベテルギウスが近づいてきた。直径が太陽の一千倍とも

いわれる赤色超巨星である。ぎらぎらと燃え盛り、絶え間なしに高温ガスを噴き出している。いびつな形状をした怒れる火の玉だ。すべてを焼き尽くさんばかりの迫力。ただただ凄まじいの一語に尽きる。

ベテルギウスは超新星爆発を起し、いずれは消滅する運命にあると聞いていた。ここに来るまで心配だった。なにしろ遠い星の話。地球から見えているのは六百四十年も昔の輝きだ。本体はとくに爆発を終え、一切の光を残していないのではないかと懸念があったのだ。杞憂であった。今こうしてベテルギウスの気焰万丈たる様を確認して安堵する。この超巨星は天空には欠かせない存在だ。もうしばらくは寿命を永らえてほしいと願うばかりである。

ベテルギウスと時をほぼ同じくして巨人の右足に相当するサイフが過ぎ去った。これで「鼓」の四隅のうち

三隅が消え、残るは左足に輝くりゲルのみとなる。三ツ星と小三ツ星はまだ見える。β星リゲルは明るさと大きさを増しながら右下方に移動を始めた。

三ツ星は互いの間隔が確実に広くなり、明るさも増してきた。古くから世界中で親しまれてきた星だ。こうして見るとその存在感は格別に見える。狩人オリオンの形が壊れた今も独立したグループとしてまとまり、彼ら自身の物語を紡いでいるかのように見える。

いつまでも続くかと思えたこの団結も、地球から七百年ほど離れたところで崩れた。両脇の二つの星が相次いで消え去り、真ん中のアルニラムだけが残る。この星と小三ツ星はまだまだ遠く離れたところにあるようだ。このまま真つ直ぐ進んで追いかけてい気持ちはやまやまだが、その前に「鼓」の最後の一隅、すなわ

ちオリオンの左足、リゲルに目を向けねばならない。

ここまで来るとリゲルは相当下の方に移動している。近づいたために私も大きく位置をずらした。地球を去ること八百六十年。この星も太陽の八十倍はあるとかという超巨星だ。ベテルギウスと違うところはその色である。青白く、氷河を思わせるような冷たい色。しかし実際は極高温の燃える火の玉なのだ。輝きが強すぎて三連星であるにもかかわらず他の二つの星はよく見えない。全天第一の視等級を誇るシリウスもリゲルの横に並べば色を失うに違いない。なにしろ絶対等級はマイナス七だ。太陽のおそらく十萬倍超の光を放射しているというのだから。

それにしてもオリオン座は粒が揃っている。ベテルギウス、リゲル、サイフ、三ツ星……。主だった星はすべて大きく明るい。最も目立たな

いといわれるベラトリックスでさえ、太陽の六倍の半径を持ち、その絶対等級はマイナス二・八であつた。これほど一流の役者（スター）を集めた星座も珍しいのではないかと思う。おいぬ座にも巨星はいる。しかしここまで均整のとれた配役にはなっていないようだ。地上から見ると、シリウスの明るさに負けそうなオリオンの星々であるが、宇宙的スケールでは十分その面目を保っているといえそうだ。オリオンの α 星リゲル。遠い将来この星にはどんな運命が待っているのだろうか。ベテルギウスに予測されているように超新星爆発を起こして消滅、というのでなければよいが——そんなことを考えながら、私は美しい巨星の傍らを通り過ぎた。

さて、リゲルを見送った。オリオン座の主要な星はこれで終わり？ とんでもない、大事な星を忘れていた。

そう頭だ。オリオンの頭。どんなに力があつてもこれなしでは狩りはできない。オリオンのために頭を見つけない。上の方に移動して、あれだな、と見当をつける。リゲルから二百光年ほど行ったところでようやく捉えた。予想していたよりはるかに明るい星だ。オリオン座の ϵ 。メイサという名前が付いている。地球から見ると三等星と奮わないが、それは遠く離れているため。実は絶対等級マイナス四。頭となるにふさわしい立派な星だったのだ。

遠いといえはまだまだ遠い星が残っていた。三ツ星兄弟の真ん中、アルニラムだ。両脇の兄弟は七百光年の所で姿を消し、これだけが前方離れたところから光を放っていた。今次第にその輝きを増しつつある。光に向かつてさらに進み、傍らに達した。メイサから約三百光年の距離であるか。これは凄い。驚異的な明るさだ。

リゲルに匹敵？ いやそれ以上かもしれない。星座の奥にこんな宝石が控えていようとは、思いもよらなかった。さすがはオリオン、との感を強くする。何度となく振り返りながら光輝燦爛たるこの星に別れを告げた。

星雲巡り

これから先、私が向かうのはオリオン分子雲の支配する領域である。その規模数百光年といわれるガスや宇宙塵に満ちた世界だ。そこは星々の揺籃——かつてオリオンの星々を産み、今なお新しい星に命を吹き込んでいる特別の場所だ。誕生した恒星が周囲に高エネルギーの光と熱を与え、星雲を美しい色に輝かせているという。

三ツ星から小三ツ星にかけての領域はオリオン座の中でも星雲が多い。前方に見えてきたのもその一つ。ピンク色の雲が重なり合って、宙に独

特の模様を描いている。濃度の濃い個所もあれば薄いところもある。角度によつては燃える炎のようにも見える。高温の星の光と熱の作用によつて自ら輝くこのような星雲は輝線星雲と呼ぶらしい。若い星を育む母なる天体だ。これまでは恒星の一個一個を訪ねて来たが、ここではより大きい規模、すなわち恒星を内包した星雲の中を観察する旅となる。その懐の中は広くて暖かい。何光年にも及ぶ雲の海を行きつ戻りつしながら、これまでの旅とは違う雰囲気を楽しんだ。

このすぐ下で出会ったのが馬頭星雲である。望遠鏡写真でおなじみの暗黒星雲。地球でのイメージは薔薇色のヴェールに食い込んだ黒い馬の頭、ただそれだけで何もない空間のように思えた。だが、今、間近で見るとこれは稠密なガスと塵の塊である。馬とはいっても可愛いポニーではな

く、荒ぶる異形の馬。星間物質の密度があまりにも濃いため、光を返さないのだという。湧きあがる濃密なガスの波が底知れぬエネルギーを表徴する。ガスの中では星が次々と誕生しているのだ。私はそれらの星がちらちらと瞬き、暗黒の世界にわずかな光をもたらすのを見た。生まれた星々が輝きを増し、熱と光で辺りのガスを吹き払うようになると、馬頭星雲もその形と明るさを変えるだろう。その時が来るまでまだしばらく待たねばならない。

地球から千六百光年のところまで来た。小三ツ星の真ん中にある星雲が間近に迫っている。ああ、これが有名なオリオン大星雲か。なんとも奇妙な形だ。上方にある小星雲と合わせると翼を広げた鳥？ 宇宙に羽ばたく鳩だろうか。差し渡し三十光年というから実に巨大な鳥だ。先程の馬の頭といい、これといい、創造主の

茶目つ氣ぶりには驚かされる。

近づくとつれて全体の形がぼやけてきた。ガスと塵でできたヴェールの奥に星が沢山集まっているのがわかる。中心部にひとときわ明るい星が四個。この星雲を代表する若い星だ。澄んだ力強い光を放ち、周囲を照らしている。取り巻くガスの反射光は青とも緑ともいえるような色だ。ここは光の玉のゆりかごである。光の玉とはもちろん恒星のこと。ほら、そこに生まれたばかりの星が見える。あそこには少年の星。ここにいるのは大人になったばかりの星だ。ある星は仄かに光るピロートの襟でまどろみ、またある星は目覚めてその輝きを強くする。星々が放つ光の波によつてゆりかごは幻想的な色に染め上げられていく。神秘の産屋、神秘の花園——私が見ているのは紛れもない天上の世界であつた。

夢心地で逍遙しているうちにこれ

まで見たことのない円盤状の天体に出くわした。中心にあるのは若い恒星。その周りをガスや塵の雲が取り巻いている。雲の中に一つ二つ凝縮

して星の形を取りつつあるものが見えた。ああ、あれは生まれる寸前の惑星だ、と気づく。そうか、このようにして惑星系が作られていくのか。我々が太陽を母とする水、金、地、火、木……の一家もかつてはこのような姿であつたのだろう。太陽系の第三惑星に生まれた私。その私がオリオンの光に導かれてここに至り、真新しい惑星の誕生に立ち会っている。何ともうれしい巡り合わせではないか。

オリオン分子雲を抜けると、宙は晴れ上った。星々の輪郭がはっきりと見える。ついにオリオン座の奥までやって来たのだ。ここから天の川銀河の辺縁まで、まだ一万年以上もの隔たりがある。この先にはどん

な世界が待っているのだろう。好奇心に動かされ、私は「ゴー」のスイッチを押した。旅は続く。

銀河系の外に向かう

そこからの行程は長かった。次第に星がまばらになってくる。もうオリオン腕を抜けたのだろうか。辺りを見回してみるがわからない。星団を幾つか過ぎたのち、左の方にもやもやした赤いものが見えてきた。これまでの進路からはかなり離れていたが、少し寂しくなっていたところだ。寄り道のつもりで近づいてみた。

ばら星雲だった。地球から見るとベテルギウスの東方、一角獣座に属する天体である。望遠鏡写真でその美しさは知っていた。五千年光年離れたここで実物にお目にかかる。美しい。銀河の園に咲いた真紅の薔薇だ。縁取りは濃く、中央に行くに従って淡い色合いを呈する花卉のような

光の雲。それが重なって、えも言われぬ優美さを醸し出している。この星雲は差し渡し百三十光年になるという。華麗にして壮大なること他に喩えようがない。旅の途中で思いがけず宝物を発見した。そんな気持ちだった。

なおも進む。先刻から星の密度が高くなっているような気がする。ペルセウス渦状腕の中に突入したのだろう。銀河系もここまで来ると馴染みのある星は皆無だ。来ては去る星々の流れの中を、当てのない旅人のように私は進む。

地球を離れること六千五百光年、前方に不思議な形の星雲が姿を現した。これは知っている、と思わず声が出そうになった。知っているといつても本の上でのことであるが。おうし座の右角の先に位置するM1という天体だ。一般には、かに星雲と呼ばれる。赤外線画像では青緑の雲

オレンジ色の縁取りが鮮やかであった。ここで見るとガスの色は、青にほんの少しピンクが混っているか？といった程度。波打つ索状構造は縁のみでなく雲の内部を縦横に走っている。こちらは青緑色と表現した方がよいかもしれない。全体の形や、突き出た索状物から蟹に見立てたようだが、見る角度によつては蝶のようにも見える。

この星雲は超新星爆発の名残だ。「突然夜空に明るい星が出現し、二年間煌々と輝き続けた」といった内容の記録が残っているらしい。一〇五四年というから比較的新しい出来事である。ここで見る索状の構造物は飛び散つた星の残骸だ。近づいてみると猛烈な勢いでガスが拡散している様子がわかる。爆発から七千年以上たった今でも星雲は動き続けているのだ。

爆発した恒星は中性子星となつて

高エネルギーの電磁波を放出し（パルサー）、周囲のガス雲に影響を及ぼす。距離を縮めて目を凝らすと、星雲の中心と思しきあたりにリング状の構造がかすかに窺える。それと直角の方向に飛び出すジェットらしきものも。あれがエネルギー供給の場であろうか。更に接近して観察したいところであるが、圧倒的な電磁パワーが波状に迫り、肉体を持たない私もたじたととなる。早々に断念してこの印象深い天体から離れることにした。

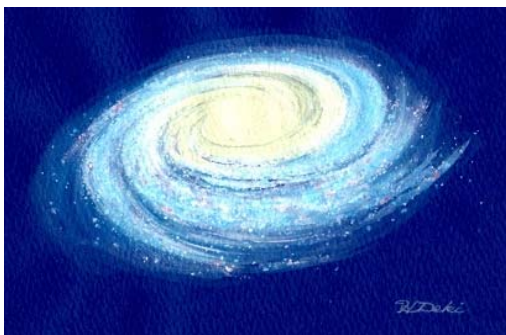
その後は特筆すべき光景には出会わなかった。ペルセウス腕を抜けた私は速度を上げて銀河系の外縁を目指す。星々の密度が急速に薄くなつていくのがわかった。あと少し、と尚も加速する。そして、ついに銀河系の辺境と思しき場所に辿り着いた。後を振り返ってみると、天の川の中心方向に重畳の星々が形作る燦然たる

光の帯が見えた。一方私の前には何もない空間が広がるばかり。ここで一区切りなんだよ、と誰かに言われたような、一瞬ではあるが、そんな寂しい気持ちにした。

思い切つて飛び上がってみた。何もないわけではなかった。銀河から外れたところにぼつぼつと丸い明かりが浮かんではいる。よく見ればどれも星の集団だ。球状の集団。可愛い光だが、数は少ない。予算を削つたクリスマス飾り？

なおも高く上がる。十分距離を取ればわれらが天の川銀河を俯瞰できる。直径十万年光年。美事に均整のとれた形だ。中心の棒状構造から太い腕が四本、渦巻状に伸びている。わが太陽系は、いて座腕とペルセウス腕に挟まれた短いオリオン腕の中にある。太陽は、そして地球はあの辺りだろうかと心の中で指をさす。通つて来た道なのにもう不確かだ。我ながら

頼りないことこの上ない。



天の川銀河（想像図）

二千億個の恒星を擁するといわれる銀河系。その中の一つである太陽系。太陽系の一惑星、地球。地球の一島国ニュージーランド。ニュージーランドの南西部、ワカティプ湖畔の街クイーンズタウン。そこから私はやって来たのだった。長い旅だった。

無数の星が集まる大円盤を眺めながら、銀河系百二十億年の歴史に思いを馳せる。そして思う。私たち人類の誕生はほとんど奇跡に近いことではなかったかと。恐ろしいほどの偶然の積み重ねによって、初めて可能となった。ほんの少しでも条件が違っていたら人類の出現はあり得なかった。そう考えれば、今ここにこうしていることのありがたさが身に沁みる。

さて、わが銀河系から目を離してみよう。ぐるり、渺渺たる宇宙を見渡す。黒い空を背景に数多の光斑が浮かんでいるのが見える。あれは星ではない。すべて銀河の光だ。私たち天の川銀河の仲間である。あまりにも遠くにあるため、明るさや煌びやかさには欠ける。しかしいったん銀河の中に入れば、私たちが地球で見ると同じ、華やかな星の世界に包まれることは間違いない。

よく見ると銀河にも渦巻型、楕円形、レンズ状などいろいろな形があることがわかった。それら一つ一つが無数の恒星を擁し、その恒星を巡るこれまた無数の惑星があるに違いない。内にはそれぞれのドラマを秘めているのだろう。これだけの銀河の数だ。知的生命体が存在する可能性は十分にある。なかには銀河そのものを移動手段として、宇宙を自在に航行する種族が生まれているかもしれない。あるいは、巨大な不定形の生命体が空間を漂いながら、人類の到来を待っている？

これまでわかったところによると、銀河の分布は階層構造になっているらしい。数十個の銀河が銀河群を作り、それらが集まって銀河団となる。銀河団の大規模な集合が超銀河団である。この超銀河団が繋がって巨大な蜂の巣構造を成し、宇宙に展開しているというのだ。観察可能な宇宙

の広がりには百三十八億光年にわたる。しかもいまだ加速度的に膨張中とのことだ。今回私の達成した遠征距離が十萬光年に及ばなかったことを考えると、気の遠くなるような話である。

いつの日か人類は銀河間航行をものにし、宇宙の最深部に到達することだろう。そして数々の謎を解き明かしていくに違いない。その時には、お釈迦様の掌の上で右往左往する孫悟空の眼ではなく、一段と高い視点と鋭ぎ澄まされた探究心を持つて臨んでほしいと思う。もちろん遠い未来のこと。私とその成果を知ることはいできないだろう。しかし、来るべき世代のために祈ることは可能だ。新しい科学の誕生、そして人類の人類としての存続を心から期待したい。

私の旅もここで終わり。家路につく時が来た。帰りは往路と同じコースを辿ろうと思う。今度は裏から表

へと向かう旅だ。逆さまのオリオンが地球で私を待っている。

再び地球にて

クイーンズタウンの丘に戻った。すんなりと元の身体に潜り込む。手足を動かし、頭を振ってどこも変わりのないことを確かめた。さて久しぶり。本物の目を通して北の空を仰ぎ見た。時を超越した旅のつもりだったが、地上では時間が経っていたようだ。オリオン、おおいぬ座、こいぬ座、ふたご座などすべての星座が左の方に動いている。おうし座にいたってはもうすっかり西の空の住人だ。オリオンはじめすべての星座は相変わらず逆立ちしたままである。まあ銀河系の奥に入って個々の星を探訪してきた私としては、以前ほどの違和感はない。

おや、北東の空、低いところに見えていた「しし座」がこんなに高く上が

ってきた。もちろん逆さまのままで。頭部を象る「獅子の大鎌」の柄には主星レグルスが輝いている。すぐ後ろに月が迫っているので折角の一等星も鮮明とは言い難い。あと一時間もすれば、夜は月の女王の世界に変わってしまう。星々は色を失うだろう。南天の星空を愛でるのも今のうちだ。

日本からはるばるこの地に来て本当に良かったと思う。街の灯はなく静かで、空気が澄んでいる。天体観察には理想的な場所だった。この次の訪問は八月にしようかと考えてみる。ニュージーランドは真冬。天の川の中心部が天頂にかかる季節である。その輝きは何よりも明るく、地上に影ができるほどだという。

さらに、さそり座。マウイの伝説ではニュージーランドを釣り上げた針北半球では火星の敵アンタレスを胸に抱く巨大な毒虫である。この星座が私たちの頭上高く昇ってくるとい

うのだ。日本では南の空低く這うように進む蠍。これが天上から私たちを見下ろす位置に来るとは！是非ともその偉大な姿を見てみたいと思う。クイーンズタウンに雪は降るのだろうか。積もるようならうれしい。真つ白い雪に、真紅のアンタレス——地上の白に天上の紅——さぞかし見事な光景になるであろう。そして私にとつて最高の旅に。

今から心の準備をしておかねばならない。さそり座星域への遠征も視野に入れて——。

お役御免

八潮 弘三郎

眞治は医師になることを目指し、そして医師免許をうけ、医業に携わることになった。しかしお役御免ま

で教員医師を続けていようとは思ひもよらなかつた。

十八歳で医学部の進学過程に入學し、最初の二年間は他学部との共有のキャンパスで医学の学びはせずに過すカリキュラムになっていた。そして医学をのこる四年間でドイツ語中心のまず学体系を学ぶ明治以来の教育が色濃く残つた最後の学年でもあつた。卒業そして国家試験は、眞治たちの学年は開學以来最低のストレート率を示すという不名誉な歴史を残してしまうことになった。一方で同級生から眞治を含めた多くの大教員を生むことになった。眞治たちの旧カリキュラムでは医学部教育の最初のハイライトである解剖実習は三年生から始まる。時代は早くからの専門教育をニーズしていたので改訂された新カリキュラムで進む一級下の学年では二年生から解剖実習が定着した。この大幅なカリキュ

ラム改訂によつて、眞治たちが単位を未修得となると学年落ちをしないと未認定科目の教育を受けることができなくなってしまうことになった。つまり教える側は科目を未認定にしなければならぬ。学期末に行われる試験では繰り返し追試験にはなるが最終的には認定されるという教員と学生の間で暗黙の了解ができあがつていた。ここで同級生の対応は二つにわかれ、社会勉強に力を入れた一群と試験を意識せずに医学を学んだ一群ができた。結果ストレート率の最低記録にも貢献してしまつたが、自由に医学を学んだものたちからは医学部教員に携わるものが少なからず誕生した。そして四十年経つてみれば皆立派なドクターとして成長していた。むしろ同窓会等で改めて交流を深めてみると前者の経歴の者たちに頼れるドクターが多く存在すると眞治は感じる。後者の経歴を

たどった眞治も、大学という狭すぎる世間のなかでやっていこうとしたために、研究論文の作成や診療技術の開発に偏りすぎたためにライフワークバランスを大きく崩し人格形成のための発達が阻害され一部に障害を残してしまったように感じている。もう一度神様が四十年前の進路選択の時点に戻してくれ再度人生を作り直すチャンスが与えられたとしたら、眞治は医学部の教員をお役御免まで勤め上げる道は選ばなかったように思う。

教員と言っても、医学部での教員は大学病院での業務は総合病院と同じように外来そして病棟の診療業務をそのまま担う二足わらじとなる。学部生に対しても、医師という職人になるための様々な手ほどきが必要なため、小グループに分けて一年中医学部の教育をし続けていることになる。加えて医療の現場では学部で

習った程度の知識と技能ではとても病める人を治すことはできない。一般的に内科六年外科八年といわれている卒業のさらなる研修が必要になり、眞治のような医学部教員は一人前の医師になるまでの他学部にはない長期の卒業教育も担うことになる。

心療内科では外来での初診の診察が大事な教育場面でもある。眞治が大学病院で行う初診では陪席を置いて診療することが一般的である。陪席するものは学年の上の医学生、研修医といわれる初期研修のもの、臨床系の大学院に所属する大学院生たちそして卒業研修医などに診療を見せノウハウを学んでもらう。来診していたただく方々には負担な診療構造であったと思う。加えて大学での教員であるためには他学部での教員任用と同じように助手、講師、助教授、教授と職位に分かれ階層化している。このヒエラルキーを昇るには診療の

経験と技量が卓越したのではかなわず、研究による論文のみが評価の対象となる。そのため大学に残って教育の仕事に携わるには診療と教育に加えて複数の研究ラインを走らせながら、結果が出たものについて次々に論文を刊行していく必要がある。

職位が昇っていくに必要な論文は周囲のものとの競争の原理から、他の学問の領域に比べ物にならないほど医学部では膨大な論文が必要とされる。したがって診療、教育そして研究をひとりですべてを遂行することが必要となる。教授を目指す医学部教員たちは、プライベートな時間を大量に奪われていくことになった。

こんなことがあった。心療内科の初診外来に父親が開業しているひとり娘さんが心療内科に来診した。大学病院の外科系大学院生とお見合い結婚をしたという。

お相手の医師は毎晩遅くまで大学

での診療そして研究と不眠不休の生活なので、父親と毎日夕食を共に過ごしていた生活とは一変し、急に一人暮らしに近い生活のようになってしまった。寂しさが高じて抑うつ的になってしまったと訴えた。

眞治は新婚の夫となった外科医とも面談し状況を確認すると、学位論文の作成のために動物実験を行っている。診療の業務が終わった後、動物の世話をし帰ると深夜になってしまふ。また翌日手術のため早朝に出勤するという生活であると言っていた。土日も術後管理で大学病院に出ることは多いと説明していた。眞治が話を聞いた印象では、新婚の夫である外科系を専攻している彼はよく仕事と新しい家庭を両立しようとしていると感じた。少なくとも当時の眞治の生活よりは新婚の彼女と時間を共有するように努力している。

しかし診察室に現れた彼女の父親

は、「うちの娘に寂しい思いをさせているとは言語道断である」と怒っている。私が彼は両立するようになかなかよくやっているのではないかとコメントしてみた。しかしこのカップルは父親の意向を娘が受け入れ、ほどなく離婚になってしまった。このカップルの診察を心療内科外来で担当し、双方の意向やここに至る経緯を詳しく聞いていたので眞治自身の生活のテーマの一つでもあったので顛末にショックを受けた。

自分の大学教員生活に比べても、かなり努力した状態で来診された娘さんの夫が新しい生活での配慮をしていたにも関わらず、新婚の妻からもまた開業をしているお父さんから失格の評価になっていった。状況は眞治の生活に酷似しており、眞治の妻も彼女のお父さんも決して今の眞治が行っている生活をよいとは評価していないだろう。いや同じように、

自分の娘に寂しい思いをさせていると感じ、彼女も昼間仕事に出ているものの、それまでしたことのない独り暮らしに近い生活になってしまっている。眞治が診察していたカップルと同じ結論になることはそれほど不思議なことではないと考えるようになっていた。「これまでの生活は楽しかったわ。残念だけどさようなら」と眞治は突然通旨を受け、彼女との生活にピリオドを打ち、彼女がかぐや姫のように去っていつてしまふというかなり現実味を帯びた心配を持つようになっていた。

ある時大学と関連病院の二連の当直が明け、次の日当然のように大学病院の日常業務をこなした夜半に帰宅し、久しぶりの彼女が作ってくれた夕食を食べた。途中で食卓で眞治は寝てしまったことがあった。深夜食事も片づけられていた状態で目覚め、一緒に食事が充分全う出来なかった

ことは申し訳なかったと後悔した。私の妻が寂しいので近所を一人で散歩をしていたという話しも少し経ってから聞いた。

そんなエピソードが連続した結婚生活ではあったが、医師としての生活が始まってから四十年、彼女との所帯が始まってから三十五年、子供たちと時間を共有して三十年ほどたつて、とうとう教員・医師としてお役御免になるまで続けることができた。ひとえに家族の信じがたい我慢とてつもない慈愛の中でしか成り立ちえなかったと振り返る。

眞治の医師としての卒後のお役は総合内科で始まった。そして数年後総合内科から分離して設立され心療内科に移り診療そして研究を続けた。大学院を修了してから二年後研究論文が規定を満たすと助手を三か月間だけ任用され、すぐに講師への昇格の申請がなされた。

「内科の教育スタッフとしては経験が浅すぎる」

当然出るべき慎重論が支配する中、心療内科にはスタッフが教授しかないという特殊事情が受け入れられ、眞治は異例の人事として心療内科の講師を拝命することになった。拝命の目的でもあった学内の講義等のスタッフ以上でないと出来ない仕事全てが眞治の肩に押し掛かった。また国内を見渡しても心療内科の講師以上の教育スタッフは全国に十数人ほどしかいなかった。郡市の医師会の講演やメンタルヘルスに関する講演会の依頼が眞治にもたくさん舞い込んだ。当時の教授から全ての依頼を全うする様に指示されていたので、毎週のように殺到する外来患者の診療の合間を縫って全国へ移動し心療内科臨床のコンセプトを伝えるために行脚するようになった。

眞治は日常の業務に追われている

中、メインにしている学会での演者指定のシンポジウムで教室の主要なテーマの一つである自律神経失調症について発表することになった。司会は教室の責任者である上司である。自覚的な訴えが不定になるのは確定した病態ではなく、定形の訴えとして自覚される前段階である疾病の形成過程の断面にすぎないという趣旨であった。それまでは自律神経失調症は確立した病態として教室の責任者が提唱していた見解について否定的な見解を示すものとして発表をまとめた。前日シンポジウムの打ち合わせがあり通過的に病態を認識しているにすぎず、確定的な疾病は後で自覚や情報が積み重なってくると別の病態であることが決まってくるとして結論を示した。その発表の打ち合わせ後に、主任の教授と病態の捉え方が異なることを他学の教授が心配してくれ、また論してくれた。

「同じデータで違った結論が導きうると思う。このままでは君は破門されてしまう。」

「明日までに教授の持論を肯定する内容に書き換えればよい」

示唆されるままに教室責任者の宿泊している部屋を訪ねて他学の教授から示唆された結論の書き換えたものを示した。意外にも彼は眞治に向っていった。

「発表は単独ネームで刊行しなさい。それでよい」

翌日はそのままシンポジウムは進行し、心配してくれた他学の教授の懸念は起こらずに事態は収まった。

しかし今から考えてみると、浅学の十年に満たない学徒が断言するような内容ではなく、非常識な行為であったと思ひ返すた。またその後アメリカ精神医学会が発表した分類には、新しい疾病概念であった身体表現性障害と理解され更には疾病の単位と

して身体化障害という名前で彼の提唱していた自律神経失調症とした病態が確立していくことになる。教室の責任者の提唱は世界的に認められたことになる。一方で眞治が若気の至りで主張した通過的病態として捉える視点も日本の内科学会の研修項目の総論に身体化という病態として取り上げられ、眞治の主張もその後継代されていくこととなった。どちらの視点も時々議論になりながらも併存していったことから考えても当時の眞治の主張もそれなりに筋の通ったものであったようだ。

また眞治の指導の教授の専攻が精神薬理であったこともあり、心療内科で今でも主流で使われている数々の抗不安薬・睡眠導入薬・抗うつ薬の開発治験を実施していた。ガイドラインも治験室もない時代であったので、同意の取得もあいまいな口頭同意で行われていた。教授から治験へ

の参加を依頼されると患者は断りにくい構図があり、教授の外来診察で眞治が陪席していると、診察室の外にそつと患者に呼ばれ、相談を受けた。

「治験に参加したくはないが私の治療を担当していただいている大教授の前ではとてもお伝え出来ない」

治療を受けるものの相談を受け、治験における弱い立場を実感した。

またある多国籍企業としての創薬製薬メーカーから眞治に声がかかった。若手の助教授クラスを数人集めて薬剤の化学構造式を示し、日本で上梓できるかまたどんな可能性があるかを探索する新薬開発の方向性を検討するミーティングのメンバーになって欲しいという依頼であった。世界を股にかけている企業も日本の心療内科が今後のマーケットを握っている領域と考えたようだった。そのボードに先行して新しい構造と作

用が期待される抗うつ薬の第二相前期試験が心療内科と精神科で進められていたが、一部のグループで第二相後期の用量に依存する結果が上手く出ていなかった。効果が弱く、このままではとても第三相試験に持つていくことが出来ないもので、開発本部の方針としてはプラシボとの二重盲検法を組みたいと相談された。抗うつ薬の治験の対象はうつ病又はうつ状態の患者で、うつの苦しみから薬をもすがる気持ちで診療を受けに来ているので実薬としての抗うつ薬が必須であると考え、それまでプラシボとの二重盲検試験は行われずに上梓されていた。当時から新薬のプラシボとの治験には断りにくい診療風土と共に、企業から提示されたプラシボとの二重盲検試験に参加する者には治療上大いに迷惑がかかると感じた。患者は診療室に治してもらいたくて来診している。新薬を創るた

めに診療を受けに来ているわけでは断じてないと強く思い、眞治は開発本部の責任者に向かって質問した。「貴方のお母様がこの病気に捕まったとしましょう。プラシボが割り当てられるかもしれないあなたの提案している臨床試験にお母さんをエントリーしますか？」

「勿論そうします」

責任者が即座に答えたのを聞いて、私は激怒した。

「嘘つき野郎」

眞治は開発責任者を罵り、それまで薬効を推測し、日本での上梓の可能性を考える知性を駆使しての討論場面であった。私も拙い英語で意見を述べていたが、その後も数分間怒りが収まらず日本語で暴挙であることを訴え続けた。

後日談になるが、眞治が治験の不適切性を指摘したからではなく、薬剤の効果が強力でなかったため、開

発治験は第二相後期で取りやめとなった。その後別の会社の治験を工夫しながら治験を遂行し直すことになった。今思えばそんなに眞治が憤ることをしなくても、無理な治験は進まないものである。

その後十年以上の時間を要して、やっと上梓され現在は使用可能な薬剤になっている。今後輩たちが開発の経緯も知らずに使い分けている処方箋に接すると複雑な気持ちになる。うつ病の治療薬であることを考えても、被験者の治験への参加に積極的ではない時に不参加の意思表示をしたことによる不利益から弱者である患者を守る方法が確立していなかった。この治験が遂行されれば当初初発のうつ病で治療を希望されて来院してくださった方々の中で治験のサイズにもよるが五十人か百人程度がプラシボを八週間も服用しなければならぬ。いかにも強者の論理の中

での生体実験ともいえる治験が実施されなかった。い、すぐに治験が実施されなかったことは今思い返しても知らずに治験に参加してしまう人をつくることにはならなかったので本当によかったと思った。

また丁度新薬治験の不適切性に嘆いていた頃、医療外の世界で個人のプライバシーを無視されたときか思えない個人情報漏洩が盛んに種々のメディアを通して伝えられるようになり、個人的な情報の保護が必要な社会状況になってきていた。これを受けて個人情報保護法が成立した。この法律の執行を受け不必要な個人情報世間に垂れ流されることが無くなったのは弱者を保護する観点からは一私人としては歓迎すべきことであつた。ただ学術出版物についても除外されることはなかったので、心療内科において学術的に最も眞治が重視していた症例報告が個人情報

保護の立場からは患者情報をそのまま記載した状況で刊行することが出来ない事態になった。事実や真実から離れて内容を本人と同定できないように修正しないと症例報告を投稿できないことになった。

症例報告の投稿規定では個を特定するような部分は削除するか変更することによつて個人情報保護法に対処するように勧めていた。症例報告に登場する細かい真実の積み上げの日常に意味があることがほとんどで、改変や執筆時の意図的削除によつて、症例の持つている特有の生活史の僅かなズレや隙間が出現する。このズレや隙間が自他覚的な違和感を成立させ、とうとう症状として訴えられるようになる。眞治は考えていた。心療内科的な治療の対象となる不定な身体症状が成立していく目に見えない積み重ねから、必然として出現してくるものが自他覚症状出現に不

可欠だと思つていた。したがつて一部でも事実を歪曲してしまうと、症状の経過の推移の中に求めていた必然のプロセスによどみが生じてしまう。また学術論文の中でも著者なりに都合のいいように改変することもなり、本質を見失つてしまうことになりかねないと考えた。したがつて学術誌の投稿規定にある改変は眞治としては刊行すること自体の学術的な意味を失うことになってしまうと考えていた。したがつて改変を加えた論文を投稿し、後世に向けてメッセージを残すことはいわばでつちあげと同じであり、でつちあげによつてしか刊行しえない症例報告は心身医学領域では学術としての意味を失つたと強く思つた。

また並行して眞治は渡辺淳一氏の初期の作品群を題材にした医療関連小説を学生と一緒に読むという医学部の低学年を対象にした選択授業を

始めた。医学に関連する小説を教えながら学んでいるうちに、真実と記述の解離の谷間を埋める解決策が曖昧ながら浮かんできた。症例報告として刊行すべき事象を全てフィクションとして設定し、創作ものとして執筆すれば個人情報保護法にも抵触することもなく、事実に内包する真実を書き残すことが出来ると考えるようになった。もちろんフィクションの設定等をかなり工夫しないと伝えたい真実を歪めずに記述することは難しいが、時間をかけて考証を行えば出来ないことはない。

例えばリサシテーションを止めるタイミングを扱った渡辺淳一氏の初期医療短編では治療する側が必ず持つ可能性の高い疑問に対して著者なりに見解を与えており学術誌としての体裁を内包した小説が既に完成している。

また山本周五郎氏も医療に関する

著作の中で精神障害を扱っており、江戸末期の時代設定で現代的な問題を扱うことに成功している。

その後も眞治は症例報告ではない論文の刊行を続け、心療内科の准教授の資格を得て、大学教員として仕事を続けていた。昼夜を問わず問題解決が求められる心療内科臨床での対処を介しての臨床教育そして臨床での介入をベースにした研究的としか言えないような集計を二流の論文であることは承知で刊行を続けた。研究としては二流ではあるが、弱者である患者には負担をかけることはしていない点は優れていると思っていた。

こんな生活を二十四時間三百六十五日繰り返し返していた中、阪神大震災が発生した。東京で教員生活を続けずに、支援に行かなければという揺ぎ立てられるような気持ちが沸き上がり、阪神で発災した二か月後被災

していない東京で時を過ごし、ことに罪悪感を覚えていた。

丁度そのころ、心療内科の学会の有力なメンバーであった神戸にある中核病院の院長から、学会からの支援を受け入れたい旨の申し出がなされ、眞治は即座に応募し支援に出かけることにした。先発隊として日本の心療内科中心となつてリードしていた大学の医局長とふたりで一緒に招請して下さった院長をお訪ねした。発災二か月後の神戸はまだまだ震災の傷跡が色濃く残っていた。招請して下さった一部被災している病院を探しながら歩き回っていた。細い通り道の脇で重機が焼け落ちた建物の撤去をしていた。眞治が通るかかると突然火の手が上がり、眞治も慌てたが、周囲からも怒号が飛び交い程なく火は消し止められた。身近な火事でまだまだ被災地として進行形であることを実感した。

探しあぐねながらやっと被災支援に招待してくれた院長にお会いすることが出来た。

「今後の心療内科の発展にはここでの体験が必要になると思う。病院の周辺の地区の支援に入ってもらいたい」

院長から要請された。

院長が二か月前を思い起こしながら、その時の緊張感を話してくれた。ライフラインの全てが閉ざされてしまった時にも病院は機能していかなければならず、大学病院から転入した当時は新米の院長は途方にくれた。マスコミからも取材の申し込みがあり、取材ごときに付き合っている場合でないほど院内に命に関わる問題が山積であった。病院幹部からはテレビに向って院長が発言すれば、病院での苦境に支援が差し伸べられるかもしれないので、是非会見を引き受けてほしいと勧められ、渋々引き

受けることになった。

記者が次々に質問を發し彼は一つ一つ答えていたが、何が放送されるか、實際放送されるかは分からなかったので、出たとこ勝負と腹をくくって応答をはじめた。記者が質問した。

「病院で今一番困っていることはなんですか？」

何から何まで困っていると言いたかったが、とっさに会議での上申を思い出し、一つの苦境を思いついた。

「水がありません。水がないと透析が出来ない。このままでは透析患者が尿毒症になって死亡します。透析には大量の水が必要です」

この会見が生放送で全国ネットに入った。ものの一時間もしないうちに、自衛隊の本部から院長に緊急の連絡が入った。

「補給艦を一隻そちらに回します。すぐに透析に使ってください」

船一隻の水は使いきれないと思つたが、病棟の医師やナースからは絶賛された。新米の院長としては上出来だったかもしれないと思つた。

そんな院長の話しを聞きながら、眞治も決定的な弱者である被災の方々にお役に立てればいいという思いが益々強くなった。そして院長が予約しておいてくれた被災者の方と面談をはじめた。

学校の先生が、心療内科としての内的な被災地ならではの悩みを用意してくれていた。

「本来今こそ行わなければならぬことは子供たちへの教育です。しかし大規模な避難所となっているので教育を再開する目途が立たません。仕方がないのかもしれないが、教室で避難されている方々が飲んだビールの空き缶が教室のごみ箱に廃棄されているのを見、廃棄されたビールの空き缶を含めたものを整理をして

いると、教員としての気持ちを納める場所が見つからない」

ここしか聞くことが出来ない内容であった。眞治は必死に考え、応答していたが、しばらくすると眞治が咳き込んだ。兎に角被災地の現場は埃っぽい。元々呼吸器が丈夫でない眞治はアレルギー反応を起こしてしまったようだ。

「大丈夫ですか？この部屋も埃っぽいですから」

眞治の意気込んだ支援の一日目は足手まといそのものの、散々の状況で始まった。

被災地は苦手なことはある程度予測はしてはいたが、眞治がどうしても阪神に行かねばならぬと思い込んだには、自分なりには理由があった。

震災の二日前の土曜日の夜に大阪に入り、日曜日に大阪で開かれていた研究会に医局員二人を連れて研究発表をしに出掛けていた。同行して

くれた二人の医局員は奈良と三重の大学の出身だったので、学会発表の終了後大学時代の友人に会って帰りたいということだったので、二人を大阪に残して私だけ日曜日に東京に戻った。月曜の朝に学部生の英文講読の講義があったためであった。眞治は英語を大の苦手にしていたが、英語学の教員ではなく、臨床の教員が教えた方がよいと学内のカリキュラム改訂にあたって進言する委員でもあったことから、自ら心療内科の英語の教材で担当することとなっていた。月曜日の早朝六時に苦手の英語をもう一度確認してから授業をと思ひ、大学に移動するためにクルマに乗った。カーラジオから聞いたニュースに驚いた。

残してきた医局員二人が震災に巻き込まれたのではないかとことが不安になった。また自分が被災地から逃げ帰ったような罪悪感があった。

実際に震災する前に東京に帰ったことは事実である。しかも医局員を残して大阪から自分だけ逃げ帰ってきたという気分になっていたようだ。大学で一緒に学会に行った後輩の医局員二人をバタバタと探した。幸い二人ともが月曜日の外来の当番だったようで、日曜日の夜の新幹線で帰京し病院内にたことがわかり、ホッとはした。ホッとした一方で、自分だけ被災を免れていることへの罪悪感益々強くなった。すぐにも、償いのために、もう一度神戸大阪に支援に戻るといふ思いに駆り立てられていた。

被災者の情報を分析すると、大震災後も地震が連続しているので、充分な睡眠が取れていないことはキャッチしていた。心理的の安定を目指す治療の第一歩はよく食べよく寝ることであると常々思っていた。その原理を当てはめれば、震災でのファ

ーストエイドに必要な薬剤による治療はこれまでの蓄積してきた経験を応用し、より改善させていく自信があった。しかし兵庫区にある大型避難所の体育館に行ってみると睡眠導入薬服薬の希望がないことがわかった。眞治が勤務している病院から支援のために必要ということ、許可を貰って持参した開発も担当した安全性の高い睡眠導入薬の使用を勧めた。

「睡眠薬は要りません」

「再度強い余震が起きた時ぐっすりねむってでは避難できません」

被災者は眞治の服薬の勧めを断った。

命をかけて避難している被災者への支援の難しさを体験したのと同時に、専門とする知識や技能は実態をわきまえない浅はかなものであったことが暴露された思いであった。これまでの心療内科臨床での経験は実

際の災害現場では全く役に立たないことがわかった。弱者救済の使命感を持つてきた被災地へのファーストタッチであったので、強い無力感に苛まれた。自分と自分の技量が支援として役に立てないことを思い知らされ避難所の体育館にへたり込んでいた。

よほどがっかりした状況にみえたのであろう。壁際に佇んでいた女の人が声を掛けてくれた。

「お力落としの無いように」

自分は被災者ではないのに誤解だなあとますます恥ずかしく思いました。眞治に声をかけてくれた女の方は静かに舞台上がり、ギター一本連れてマイクなしで小さな声で歌い始めた。

「お休みの方もいらっしやるので、お邪魔にならないようにします」

広い体育館に一面に寝具が並べられている。避難して体育館に寝泊ま

りしている方々は日中仕事や用事で外出しているので、がらんとした空間にそれでも百人程度が座っていた。最初から彼女の歌を聴いている人は眞治を除いては誰もいなかったように思う。避難所の体育館全体は思い思いの会話でザワザワしていたが、二曲目そして三曲目と進むうちに、話し声が少しずつ止んでいき、そのうち舞台で歌っているスローテンポの女性の細い声を皆がシーンと聞き入るようになった。シーンとした中の演奏が何曲か続いた。

「うらら、うらら」

最後の歌では多くの方々が笑顔で、大合唱となり、そして大乱舞にもなった。

避難所を慰問していたのは山本リンダさんであった。自分の十数年積み上げた浅い学問より歌謡曲の方が人を癒すことができるとその時強く感じた。眞治がそれまで実践してき

た心療内科臨床は大学病院の診察室の中だけで行うものではなく、もつとフィールドで受け入れられるような広がりを持つことが必要だと、つくづく感じるようになった。

阪神の支援に行き、役に立たずの中に帰ってきて数年がたった。突然に今度は民放の連続ドラマの医療監修することになった。丁度眞治が申請に必要な論文もそろい、教授に昇格する話しが持ち上がったので、目立ったことはできれば避けたいと思っていたタイミングである。些細なことで教授への昇格の話しが潰れ、二度と昇格の話しが取り上げられなくなることになる現実を繰り返し見てきた。眞治も現在教員をしている大学と同じ法人傘下になる付属の中高の出身であったこともあり、中高大と同窓である先輩が附属病院内に多く教員として存在していて、見えない互助会のような雰囲気ネット

ワークが暗黙の中形成されていた。一回生で当時脳外科の教授をしていた学内の同窓生に最も強い影響力を持っている先輩から電話があった。

「同級生が芸能プロの幹部で、今度心療内科をテーマにしたものを取り上げるようになったので、面倒見やってくれガチャン」

いつものように同窓会長は問答無用であった。

すぐに番組製作に携わるプロデューサーやディレクターが大人数で医局にみえ、監修を引き受ける前提で、インタビューを受けることになってしまった。眞治の昇格の話しが動いていることもあったが、心療内科自体に内包している対象疾患などの議論も盛んだったため時期が悪い旨を伝えた。

「ご依頼の心療内科イメージで十話も作っていけば問題視する方々が出てくる」

「設定を心療内科にするのなら扱う病態を考え直してほしい」

「また短い一話で良くなつてめでたしめでたしってわけにはいきませんよ」

「これから治療が始まるというエンディングでないとリアリティーがない」

「こんな反応が予想される中ではとてもゴールデン枠のドラマなんて出来ないと思う」

眞治は時期が良くないことをテレビ制作スタッフに伝えた。

しかし眞治が難しいと具体的な問題を挙げると、彼らは自分たちなりの解決策を提示するという押し問答を続けていたが、とうとう制作に入ることになってしまった。

主人公の名前もまだ決まっていなかったようで医局のネームプレートを番組の責任者がじーと眺めていた。不安に思っていたが医局員に涼子と

いう名のものがいて、ドラマの主人公の名前は涼子と決まった。医局のネームプレートの名前からイメージしたとは最後まで責任者は言わなかったが、あの時密かに候補になつていた名前が複数あり、ネームプレートを見て決めたに違いないと眞治は今でも思っている。

一話完結で取り上げた病態は「買物依存」であったり「虚言癖」であったりで日常の心療内科での実際の診療とはかけ離れたものが主題となっている。

台本が送られてきて眞治たちが監修を始める。元々ノンフィクションとして作られたものではなく、全てが架空の設定であることが前提のドラマである。したがって心療内科の現実と同じである必要はない。しかしあまりに無責任な設定は心理的問題を抱えながら悩んでおられる方々に悪い影響があつてはいけない。眞

治は現実と違うという視点ではなく、現在心理的問題を持つておられる方々に安易な治愈イメージや短絡的な治療手段の推奨にならないようにすることが医療監修に求められていると考え、医療を今後受けることになる方々を弱者と想定して混乱を与えないように、最大の努力をすることにした。監修に与えられた時間は短く時には一日ほどしか猶予のない中で台本の監修が求められた。幸い演劇に心得のある当時眞治が最も信頼していた腹心の一人に作業を託した。彼も精一杯筆を入れ修正に次ぐ修正で少しでも心理的なことで悩んでおられ通院中の方々やこれから受診し治療を受けてみようかと思われている方々に誤解や希望を失つてしまわないようにと最大限弱者保護のために努めてくれた。

勿論心療内科の重鎮の方々からは心療内科という言葉が使われて作ら

れているドラマなので架空とはいえ、誤解を招いてしまうというお叱りに近い苦言を繰り返し多方面から受けた。

「こんな相談が心療内科を訪れるとご覧になった方々が思われたらどうするんだ」

「主人公がとっている医療スタンスは全く心療内科的ではない」

心療内科に従事している方々からは散々であった。しかし視聴者からはそれなりの評判と一定の視聴率を頂いて三か月余の番組が最終回まで無事に放映され終了した。青山の中華料理で打ち上げをするので、先生も来てほしいと言われ、内外に対応しなければならなかった愚痴をこぼしたく、参加することにした。

番組は業界内からは散々であったことをスタッフにこぼした。番組最後にする「これは全てフィクションです」の十数秒のテロップが救いだ

ったと伝えた。

「自分としては主人公のドラマの中で見せた治療の仕草や所作は眞治がドラマを見ていて好ましく思え、実際とかけ離れ、現実世界に悪い影響を与えたとは思えなかった」

例えば一話のドラマが終わる時涼子先生がクライアントの想定の方の横に座って、「これから頑張りうね」というセリフを語りかけるカットはとても素敵に思えたとプロデューサーに伝えた。

「あなたが繰り返し私たちに強調して言っていたことを忠実に作ろうとして工夫した末に考え出した動きです。治療の本質を繰り返し教えて頂いた先生に気に入っていただけたのは光栄です」

と番組の責任者が言われた。

その時主人公の涼子は自分の分身だったんだと初めて気がついた。眞治が内在して持っていた治療のイメ

ージを形にくれてくれた映像を創造してくれた番組がこの世に残ることになったことを改めてありがたいと思いい、最終的には監修に携わることができたことに感謝した。

卒後の研修を開始してから十八年目でドラマの反響が賛否両論となり世間様を騒がせてしまったにもかかわらず、眞治は心療内科の教授に昇格することが出来た。教授に就任はしたが、このまま心療内科を続けることはできないと考えていた。ここには出来ない、しかしまだまだしなければならぬことが眞治の気持ちの中に山積みだった。大学で一番歳若い教授ではあったが、残り二十数年であり、それほど多くの時間を稼働できる間に持っていないように思った。教授就任によって一応の到達をみたとして、すぐに展開すべき次の道を模索することにした。転出先を探す前に、教授になるま

での二十年間直接の上司であり続け、眞治を教授にまで昇格させてくれた教室の責任者には真意を同意してもらう必要があった。眞治は彼への相談はいつもそうしていたが、直接会って話すのではなく手紙を書いて相談した。すぐに彼から便せん三枚のレターが戻ってきた。

「君を教授にするまでが自分のやったことで、そのポジション使い道を決めるのは君でよい」

教室の責任者は眞治の気持ちを支持してくれるありがたい内容であった。

現実的には複数の方向が存在していた。一つは他学で心療内科的診療を加味した総合診療を始める道であった。この道には二つの大学に打診し、具体的な応答まで得ていた。もう一つは文系の総合大学の教養学部教授となり、健康管理室の責任者に就任する展開であった。これも退任

後の道として具体的であつた。結局自分で模索したこれら三つの道はいずれも些細な理由で、成就しなかつた。結局それまで選択肢としては存在しなかつた母校の管理業務に入ることになり、後半の二十年が始まつた。

教授になるまでは頑張ろうと思つたのは学生教育に携わるためのライセンスと思つていたためだったかもしれない。

心身医学の系統講義は眞治が大学院生の時から受け持っていたこともあり、教育には魅力を感じていた。丁度六年目で講師に任用された時期に学内の教育ワークショップに参加した。ワークショップという新しい作業形式による意思決定の方法が眞治には新鮮であつた。教育場面ではされる側は弱い立場に規定されること一般的ではあるが、ワークショップでは教えられる立場は存在せず、

また内容を熟知している教える立場の者も必要としない。眞治は教育の理想を感じた。学習伝達としてのワークショップメソッドの中に、未知への探索をする無限の宇宙のような広がりを感じた。

医学部教育ではカリキュラム改訂が模索され学部教育でも未経験のチュートリアルや少人数グループでの学習方法の実践が求められていた時期でもあつた。また母校で教鞭をとっているという責任も感じ、医学において知識や経験において弱者である医学生に対してのより良い医学教育を探し求めていた。ここで痛感していたのは、講義は教えるものから押し付けられるものではなく、学習者が面白く、興味深くかつ魅力を感じ求めるものであると思つていた。また例え学部生が試験対象科目として進級のためだけのつもりで受講する状態であつても、興味をそそる様

に工夫されたものでなければならな
いと思つていた。

眞治は医学教育の学会やワークショップでの話し手の中で上手な人を探した。なかなか真似しようと思うような話し手は見つからず、唯一魅力的だと感じたのはかつてハーバード大学のビジネススクールで講師をしていた経済学の先生であつた。

彼はハーバード大学で採用しているケーススタディー法を監督官庁が主催した講習会でやつて見せてくれた。この方法を工夫すれば対象が五十人位まではコントロールすることができると結んだ。すぐに彼の技術に素晴らしかったが、ちよつと待てよと思つた。もつと多くの聴衆にそんなに面白くないわかりきつた話しを魅力的に話している世界が身近にありそうだと思つた。

古典落語の噺家たちである。志ん生師匠の「たがや」、談志師匠の「大

工調べの序」や枝雀師匠の「茶漬けえんま」は眞治が何度も録音で聞きそのたびに話しの世界に引き込まれる。確かにそれぞれの古典落語はよくできた面白い話しではあるが、独演会などで集まる落語好きのフアンの方々はお話のサゲまで承知なはずである。しかし演芸場やホールを稲穂のようになびかせることができる。これは話し手のスピーチの魅力に他ならない。

たまたま娘の通っていた大学から公開講座のパンフレットが送られてきた。パラパラとみてみると、公開講座のひとつに「落語をやってみよう―真打の師匠が直接教えます」と書いてあった。縁を感じ、早速申し込んだ。講座は夕方からだったと思うが、診療以外にも教育や管理会議などがびっしりで飯田橋まで行く時間を作るのに苦労した。二十人程度の募集であったように思うが、集まったの

はたったの五人で、これでは次回からは打ち切りですね。最初で最後ということになりそうなので精一杯頑張りましょうと芸術協会の真打の師匠がやる気を見せてくれた。

教室の教壇の位置に毛氈をひいて高座を作り、毎回赤い毛氈の上で五人の受講生が順番に今日の小咄から始めて、「えー」とやった。他の教室では源氏物語の講読とか古文書の解説などの講座が熱心に進んでいる。こっちは赤い毛氈の上で「えー」である。主催の大学職員が見回っている時眞治たちのスクーリングをみて、ぎよつとして歩き去って行っていた。「えー」が上手くいくと廊下を行きかうヒトがぎよつとして立ち止まる。そうすると師匠にほめられる。ちよつと意外な訓練もあったが、とても楽しい時間であった。

「半分垢」という短い落語と物売りをからかう小咄を習ったが、わか

ったことは落語というものはプロの職人たちが日夜努力してもなかなか極められない奥が深くて難しいということであった。

「眞治さん、今花道から来る与太郎に声をかける時、左手を出しましたね。眞治さんは左利きだからとつさにそうなったと思いますが、それではお客様から身体が隠れます」

「眞治さん、声はまだまだ小さすぎます。元々大道の芸だったので、道行く人の足を止めるように、えーです。できれば隣の教室にいる人に届くようにね」

と次々に小咄や短い落語をやっていく中で指導を受けた。その後も声に高低強弱をつける工夫を練習し、スピードに緩急をつける工夫を少しだけ身に着けた。落語は受講生の一人は芝浜をやりたい、と言っていたが、一年後に本当に高座で話し通すまで修練して成就していたが、眞治

は早々に落語はあきらめ、講義の中での話し方として噺家さんたちのスピーチの技術や工夫を取り込んでいき、興味深いまた魅力的な講義を工夫していった。

そんな中、昼を挟んで一時からの医学部の講義をすることになった。まだ暑さの残っている季節だと、本来眞治の授業を受講すべき学年の体育会に所属している一部の学生は昼休みにクラブ活動の練習に精を出しすぎ、またお腹も一杯になってしまっている。しかも他の場所よりも教室は空調が充実している。

講義室の一番後ろにガタイのいい男の子が十人位ズラッと陣取って講義を始めるや否や突つ伏して寝始めた。いつも講義を聞いてくれるのは二、三十人程度であったが、聞いてくれている学生諸君も興奮してもらわないとならないが、後ろでズラッと寝ている諸君を眠りから起こすこ

とも魅力的の指標と考え当面の目標とした。

落語の訓練をした時身に着けた技術は話し方をはじめ、時に診療の場面を再現しながら医者と患者を声色を使って演じ分けたりした。診療はお互いに真剣すぎて笑いが出てしまう場面が起こりうる。疾病の症状などが記憶に残るように印象的な出来事で本当にあったでも、うそのような診療場面を再現して講義に挿入していくと、授業をノートを取りながら聞いてくれている諸君が、ノートを取らずに顔おあげてゲラゲラ笑っている。そして笑いの波のようなものができ笑いが静まると、次の笑いを待つよう話し手と聞き手が一体となったような特別な状態が時に現出する。一分線香即席噺も駆使して爆笑講義を続けた。すると一番上で眠りに来ていた体育会の諸君が起きはじめ、更に更に同じペースで続けて

いくと、とうとう睡眠していた全員起きて眞治の話しに応じて笑って聞くようになってきた。

最後のフィードバックでは覚えさせたかった症候等を書いてくれた諸君も居なくなかったが、「面白かった」の反響が圧倒的であった。落語からの学びとしての心身症の講義に興味を持ってもらい、また面白いと感じてもらえるような工夫が少しはできるように思えた。しかし医学教育の難しさを更に深く実感することにもなった。

学生の中に芸能関係に接点のあるものがいたようで眞治の爆笑授業のことをテレビ局に話したようで「一度は受けてみたい授業」という番組からのオファーがあった。有難い評判ではあったが、流石にこれには丁重にお断りさせていただいた。しかし依頼され引き受けることになった百回以上にも上った郡市医師会の講

演や大学での学部生を対象にした講義を行う中で診療状況での相手に治るきつかけのようなものを伝える技術が少しずつは身についてきたと思つた。

加えて山岳診療所の運営責任者を引き受けることにもなつた。ここでも話しの修行は役にたつた。診療所は医師とナースが交代でつなぎながら運営していく。診療所の胴元である山荘と密接な關係を保つていくことが必要となる。それまでの責任者は直接二千四百メートルの診療所に向うき、運営に当たる方略はできてはいなかつた。山荘の運営責任者経営の責任者から直接希望をきき、こちらのお願ひもする話し合いが是非必要と感じていた。眞治が責任者を拝命するとすぐに夏季の診療所の開設に先立つて、まだ深く雪の残る山荘に伺ひ、初めての意見交換をした。山荘からも今まで意思疎通が図れな

かつたことによる不具合の事象を聴き、今後は密に連携しながら、更によい運営を目指すという良い關係を合意することができた。その夜山荘の運営責任者と経営責任者が従業員の皆様と夜の晚餐会を開いてもらひ、飲んで食べて大いに盛り上がった。宴たけなわの中、若い従業員の方たちと爆笑を繰り返しながら、眞治の話しに大爆笑をしてくれていた。その輪に加わつてきた運営責任者の方が急に真顔になり、考え込みながら、ビツクリするような提案をした。

「眞治先生の話しはすごく面白いので、今度山荘でお客さんにも聞かせてもらおうというのはどうだろうか？」

眞治も關係を良好に保つにはよいきつかけとなると考え、「山で役立つ救急医療」「低山でも高山病」といった講演会を食事が終わつて就寝するまでの短い時間に開催させてもらつ

た。医師との接触などあまり縁のない健康・頑強な方々だったことも眞治の講演を喜んでいただけた要因だったように思う。かれこれ二十年が経つた今も、毎年恒例となり他の管理に入る医師たちも協力してくれ、繰り返し毎年行われる講演会となつて現在でも決まつたように開かれる定番のイベントとして定着していった。元をたどると、夏の管理の前に挨拶に伺つた折の従業員さんとの爆笑おしゃべりが始まりであつた。ここでも聞いていただくおしゃべりの古典落語の修行が役にたつた。

一方で医学部内での民主的な運営する活動にも組み込まれていた。教員の会議は講師の部会、助教授の部会、教授の部会がそれぞれ互選で投票し、委員を選出していく。眞治は長く大学内の人事の不条理を扱う教員代表会議に講師の時も助教授の時もそして教授になつても選出されいつ

も人事委員会に組み込まれてた。講師や助教授での任用は一番若いスタッフでもあったことが進出の理由であったように思うが、時には深夜にも及び徹底した調査を繰り返し行なうことがあった。不条理があったという摘発をした者と教室の運営を仕切る医局長または人事を提出した教授の主張が真つ向から対立することがある。必要な説明の上同意が得られたとする執行側と同意の手続きは行われなかったとする摘発側が対立することが一般的であった。受け取りの問題かもしれないが、実際はどうだったのかその場に居合わせた全員から聞き取り真実に近づこうとする。会議の人数が少ない教室ではニュートラルと考えられる立場の者がいないか少ないと真実が見えないで終わることも少なくなかった。

不明の報告をした案件のなかで、数年してから人事委員会のメンバー

で討論しなすと、その後の人事の動きから利得が発生する人物が同定でき、他の者はニュートラルであったことから虚偽の証言をしたものを同定することが出来た事案もあった。証言が対立し詳細は明らかにできずと差し戻したケースで、恣意的な動きを取りやすい執行側が証言通りの動きをして、不条理を告発した側に虚偽の動きがあったことが後になって気が付いたケースもあった。この活動は医学部の中であって、力を持たない教室内の弱者が圧迫されていることへの支援であり、眞治にとっては自分の所属している教室以外の人事の決め方を知る重要な体験であった。この人事の調査という役割を果たしている中で学んだことは正義であったと考えられる主張が大勢に必ずしも支持されないという眞治にとっては痛恨の結論である。教室員会議で頑張ってみても、人事の不条

理がまかり通っていく悲しい結末が、何度も起こった。力を持つていない眞治は正義であった側を支援できなかった体験を重ねることとなった。

さて心療内科で教授職を拝命し、昇格を推挙して下さった指導の教授からも転出の許可が下りていたので、いよいよ母校での臨床教育からも離れる決心を固めた。

そして眞治は転出先の大学へ提出するために数十ページにもわたる刊行論文や発表学会のリストを何日もかけて準備していた。自分としても完全に外向きに立ち位置が出来上がってきたタイミングで、突然眞治が所属している自分の大学の理事長に呼び出された。

「都内の私立大学から割愛の打診があった。儂はなにも聞いていない。どうなっているか？」

理事長は不機嫌に怒鳴っている。眞治は正直に専門を少しからだの診

療に移動して、上司の責任者の許可を受けて総合医として動いてみたい旨を上申した。理事長は都内の私立大学のことは聞いていなかったこともあり、この人事は許可できない、と切り捨てられた。

「お前にとにかく言われる覚えはない」

眞治は激怒して反論した。

「君を出すわけにはいかない。大学を異動する時には割愛の申し入れによつて双方が同意することがルールになっている。私は同意しないのだから出することはできない」

理事長は頑固に主張した。眞治は大学の移籍にルールがあることは知らなかったの、段取りをしくじったことを知った。とうとう移籍の案件は眞治の現在所属する大学の理事長の預かりになつてしまった。他学への転出に失敗し、身の振り方を再考するしかなかった。しばらくして

付属病院の副院長に呼び出され、人事のことで打診があつた。

「医学部に新しい管理ポストを作るので、就任してはどうか？」

潰れたのは私立医大の総合診療部への話だけで、まだ国立大学への転出や総合大学の教養学部道は残されていたと思うが、以降は自分が進路を決めるのはやめて、運命に身をゆだねることにした。後に稲盛和夫氏の講演の中で、自分で道を切り開いていくことを「立命」といい、ヒトに定められたものに身をゆだねることを「運命」といい、後者は愚かな判断であると説いていた。この時の眞治は理事長の反対から、心が折れて運命に従うような愚かな意思の決定をしてしまったのかもしれないかと振り返る。

しかし一方で理事長の不同意で潰れた私立医大の眞治の入るはずであつたポストで数年後大事件が発生す

る。僕の入るはずであつたポストに納まつた方が責任を取ることになつてしまった。数年後その方も眞治の知人であつたので、お会いする機会があり事件から随分時間が立つていたことや全ての責任者としての処分が解かれていたこともあり、久しぶりでもあり打ち解けた状態で二人は話しをした。

「眞治君は私に比べると遥かに運を持つている。抜擢の人事には魔物がつきものだからね」

私立医大の後任の教授就任された方は苦笑した。事件に巻き込まれたら眞治が全く同じ処分を受けたのだと思う。運がいいという事は本当にそうかもしれないと、その時に思った。その他お話を頂いた国立大学も総合大学の教養学部でもその後それなりの波乱があつたことは後で知ることになる。

しかし流れに身を任せただけで、

始まった学内の管理ポストでも波乱が待っていた。新しい管理ポストのミッションは平成十六年に新研修制度がスタートすると厚生労働省に伝えられ、眞治の大学でも急ぎ対応が迫られていたので、この制度改革に適切に対応することであった。眞治は教授会で急ぎよ作られた規約に従い、平成十四年の末に研修センターに附属病院の教育担当の副院長から推挙され心療内科から転属した。まず理事長から厚生労働省に接し、制度が今後どのように運用されていくかを確かめるように指示された。新制度の発足は早々に発表されていたが、医師不足が加速するとの指摘や多くの病院で教育体制が整っていないことを理由に多くの病院の運営責任者たちは時期尚早と強く反対し制度に対する準備を保留していた。もし制度が運用されるならば経営収支を意識しながら、実施の半年前に

処遇を決め学内での予算措置をしなければならぬ。それまで無給同然の薄給で処遇していたので、早く方向性を知りたいと思ったことは大学の方向性を任された眞治も同様であった。監督官庁に問い合わせてもこちらが欲しいと思っている疑問に回答が得られるとはとても思えず、何か方向性を確認する方法を考えなければと困った。

心療内科での専門医制度の試験が始まっていたが、試験の評価基準が明確にされないまま試験官に裁量を与えられていたので、ついに理不尽な不合格者が出るということが起こり、関東の意見を同じくしていた二人と相談し学会の制度の運営を任された委員会に透明性が担保された試験制度の設立の建白書を連名で作り提出したことがあった。時々学外で会い、時にはアルコールを入れないながら制度の青写真を作っていた。その

仲間が突然医者をやめて政治の世界に入っていた。眞治も驚いたが、時の新党ブームに乗って、国選の議員となりし、政権運営のメンバーに選ばれていた。彼は当選したばかりの新人議員だったが厚生労働省の副大臣に任命されていたことがわかり更に驚いた。政治家となつてしまった友人に相談することは別の専攻科の教授にケースの相談をすることとは明らかに次元が違うので控えた方がよいとは思ったが、大学の制度対応の方向を決める責任もあり、判断材料も乏しかったため悩んだ挙句に、彼へのアポを公設秘書に打診した。勿論多忙なことは分かっていたので難しいと断られるか、数か月先の短時間のアポになると予測していたが、すぐに副大臣室から呼び出しがあった。いくつもの受付でできたばかりの新任の部署の名詞を示しながらなんとか副大臣室の待合室までたどり

着いた。しばらくすると一緒に学会の改革を議論していた頃と同じように接してくれた。

「やあやあ久しぶりだね」

すぐに学会の最近の動向を話し始め、いつもと同じ仲間のような彼であつたことにホッとした。眞治は教授に昇格したことや心療内科をやめ新しい管理業務に就いたことを伝え、相談の目的も伝えた。

「それって医政局長と医事課長だよね。呼んであるよ。そこにいるはずだけ」

彼は話しながら席をたつて待機してくれていた二人を招き入れてくれた。この制度運用の責任者二人であつた。副大臣の陪席の中、厚生労働省のこの制度の運営の責任者たちは根強い反対が続いているため、全国の大学執行部の協力が是非必要だと突然の面談を好意的に受け止めてくれた。後日責任者たちが直接大学に来

てくれ、具体的に執行部と臨床の責任者たちに説明してくれた。眞治はかつての心療内科での闘争の同士に新しい仕事の入り口での苦境を救つてもらつた。

眞治がコントロールすることになつた新研修制度は昭和四十年の東大入試と見送りに発展したインターン闘争の時に争点になつた医師の身分に関する次のステージでの再構築であつた。主に旧帝大と言われていた国立大学医学部の中の一部の臨床教室では主任教授の強権による医局運営がうわさされていた。眞治が所属していた大きい内科でも大学院生と医局員との間で大きく権利に差が存在していたので、あながちうわさとはいえないかもしれないと思つてた。

眞治は新制度の運用にあたって、自分が受けた臨床系大学院生や無給研究生制度の不安定さを感じていた。

眞治自身も身分上の安定には程遠い処遇で大学生活を送つていた経験からも、医学部として研修者の身分を保全する制度が存在せず、慣習として初期の研修も医局に運営が任されていたことは知つていた。

眞治はすぐに身分の確立のための方略を現行の内規に沿う形で、臨床系の医師の身分の確立を目指したルール作りをはじめた。他の臨床教室の状況も調査し、無給研究生や臨床系大学院生の経済的苦境を支援するために社会人大学院生制度など身分を安定させるための基盤整備の構想を医学部の執行の会議で立案を提案した。

また関連病院への派遣の権限の集中していた弊害に対しては当時国立大学の大学院生の名義貸しが取り締まられており、いわゆる医局の派遣人事を労働者派遣法の違反の疑いがあると監督官庁から通達を受けてい

たことから制度の改革を立案し、独自の関連病院連携病院規定を制定し関連病院への医師派遣に関する運営の透明化を目指した。加えてご恩奉公のような武士の時代からの日本の悪しき伝統として継代されていた医師派遣の見返りとしての教室への研究費としてのキックバック等の恩恵を排除するために、医学部内に無料職業紹介制度の設置も行った。

さらに医師免許なしでのインターン制以来、新研修制度では全ての研修医を対象に医師免許の交付を受け臨床の研修を希望したものの全員の有給化を医政局医事課が方針を示した。しかし研修期間の外勤の禁止など研修病院以外の施設での医師不足が深刻化するなど弊害も指摘されていた。一律の有給化は財源不足との財務省からの反対で、私立大学の附属病院には研修医給与支給とはならず、指導医手当として当時議論されていた

額の三分の一程度が実際は支給されたとすぎなかった。

大学での予算折衝の折、法人本部より人件費を膨らませた赤字部門という指摘を受け眞治たち制度を遂行しなければいけない責任者としては強く憤った。現在も研修医給与については国家からの支給額は更に減り、私立大学ではわずかな補助金大部分は大学病院負担で支給されている。

大学の研修管理を司ってきたものとしては、厚生労働省の給与の支給に関しては不誠実な対応は許しがたいものと今でも考えているが、研修の二年間ある程度の国からの補助を受けながら給与を受け取れるようになったことは身分が確立したことは確実であり、身分に関して弱者と考えられる部分を支援する方向に動けたことになったと考えられる。また眞治たちの裁量がなかった割には名義貸し等の事件処理のなか、ある程度

までは学内の臨床系の医師に関する制度を改革することに成功したことは弱者に対する支援的な動きとして理解できると考えられた。

また研修制度の開始に伴い研修医を教える立場の者に指導するための基本技能を身につけさせるために研修指導医の認定が行われた。この制度が運用される以前から臨床系の教える立場のスタッフを対象に眞治は副センター長と共に繰り返し指導医と呼ばれている教授や准教授のスタッフに対して教え方の講習会を開催していた。それまでそれぞれの学問の最高峰である教授や准教授の立場にある方々に何かを教えるということはいわばタブーとされてきた。大学で教える教授陣に卒後の研修医への教え方を教えるという大胆な試みは眞治にとつての制度改革へのチャレンジであった。臨床領域の最高峰ではあったが、教育方法に関して体

系的に教育法を学んだチャンスはなかった。医学部の教育スタッフは元々好奇心の強い知りたがりが多いので理論や技法の伝達はタブーを犯した設定ではあったが、思いのほか眞治の教育技法の伝達は教授陣にはスムーズに受け入れられていった。

眞治はそれまで心療内科での修行の中で個人的に身に着けてきた患者指導の方法を応用し、臨床医療の教育技法に転換したものを教授陣に伝達する工夫を重ねた。それまでの心療内科での実践がワークショップの学習手法の中、卒後の研修医教育の実践的方法へとクリエイトされていた。更に副次的効果もあり、受講してくれていた当時准教授で臨床栄養を専攻していた高校の後輩がコミュニケーションスキルは管理栄養士にも必須の技能だと考え、彼が更に実践的な工夫した講習会を企画運営するように発展したことも経験した。

その後大学の教授陣も含めて指定の項目を満たせば医師免許に匹敵する第二の国家ライセンスとして卒後医師への医療教育法を身に着けることが必須になっていった

身分については執行部の渋々の対応ではあったが研修医の有給化が制度化された。しかし相変わらず三年目以降の研究生は無給のままであった。次には研究生の有給化は必須であったが、法人本部の執行部の代表者は三年目以降の研究生は自らの研究のために自分の意思で個人的課題を遂行するために来校しているに過ぎないという明らかに実態を踏まえない誤解が実施を阻んだ。

そこで私は臨床に所属している研究生たちが大病院の臨床の運営そのものを支えている主力メンバーであり、研究の時だけ来ているのではなく、毎日病院での臨床を日常業務にしていることの実証が必要と考え、

電子出勤簿による研究生の勤務実態を把握することを計画し、実施した。すると医師の勤務を管理するとして、眞治の願いとは裏腹に研究生の有給化のための第一歩とは理解されず、連日医学部の臨床教室のドンたちから執拗な苦情を受けることとなった。医学部の有力者たちが反対していたので当然のように打刻率も上がらず、打刻は順守されず医師の勤務管理のための打刻が抵抗の手段としての無打刻やルール違反による打刻が繰り返された。

数年後人気の企業での過労死の犠牲者が出て、以降働き方改革が急速に進行し、それまで聖域とされてきた医師の働き方をも対象になった。一転して働く者たちの実証的な手段として注目されることとなり、眞治の勤務する大学は働き方改革の先駆けた施設として認識されるようになった。また働き方改革の推進の中

やつと打刻が病院で働く医師たちの勤務を守るシステムとして実施の形に近づいた。そしてとうとう研修医の有給化に続き、長く続いた無給研究生制度が廃止されレジデントとして五年間雇用される内規ができた。同時に五年間のレジデント研修以降もシニアレジデントとして有給化され、助手として教員になるまで雇用関係が継続する制度も設立された。

眞治は大学で教員として存在し続けていくためには、研究データを作っていくかねばならぬが、研究データを創生していくためには研究費は不可欠である。しかし心療内科は当時から研究費の領域には認められていなかった。眞治は大学での教員としての生活では研究を第一にとは考えていなかった。診療を進めていくには、経験を集計して治療の方向性や薬剤への反応性と確かめる必要は感じていた。研究費を要しない日常臨床の臨

床経験の集計を研究結果として学会誌に投稿していた。しかし科学性や実証性には薄く、二流の研究論文であることは明らかであった。研究費を要しないで、形だけでも研究的な論文のごときものとして存在させることで審査対象の論文としては評判は今一つではあったが、なんとか医学部教授の任用時に必要な評価対象論文として認めてもらっていた。

教室の責任者が厚生省特定疾患の班長に指名された時には、眞治が事務局として会計や研究発表会や研究出版物をコントロールする必要がある。このため、事務局は班員の一人が担当することになっていた。研究班の頭割りの公的研究費を頂くことになった。教室に大学から人数割りで割り当てられる研究費は微々たるもので、診療の補助員や秘書の人件費を支出すると、既に赤字の状態であった。当時心身症領域で盛んに行

われていた開発治験や適応拡大のための臨床治験による治験収入で日常の教室維持のための費用を賄っていたが、来診患者を対象にした治療薬研究には用量の変更や使用期間にも制約があり、どうしても病態の変化に応じたその時の最善の治療が選べないことなど、患者に負担を強いることになりがちであったので、眞治は臨床研究と称して遂行していくことには疑問を感じていた。

管理部門に移ってからは診療を止めていたので、臨床治験を担当することは無くなり、当事者として疑問も感じなくなりましたが、研究的活動に投じる資金もなくなり、教員として研究等の創造的な活動をすることはできなくなっていた。

全ての職位が有給化されて以降、眞治が立案した数々の提案は費用が掛かるという理由で、医学部の執行の会議では否決され、大学病院に勤

務する医師たちへの支援の施策は全く進まなくなかった。

その頃組織的な研究のシステムやフェローを持つていなかった眞治は大学に揭示されているポスターを偶然みて一人でもできそうだと思い、チャレンジしてみる気になった。ポスターには文部科学省が大学改革のための広く公募していて、優れた取組には補助金を給付していることが紹介されていた。医学部の執行部の有力者に相談すると、悲観的な見解であった。

「あれは国立大学への補助金みたいなもので我々のような私学に所属する者には絶対に配布されない」

しかし当時の学長に相談し、提示された課題に取り組むことを求められている大型の文部科学省の公募する競争的補助金にチャレンジする許可を取り付けた。しかし事務部門からは申請書作成の作業自体が職務権

限外の作業であると囁き、多忙を理由に費用の積算などの事務作業には協力できないと拒否されたこともあった。また医学部教授会で申請の準備の状況や補助金のターゲットを説明すると、失笑とも苦笑ともつかない笑いが処々から出た。

「また眞治の何億円の大風呂敷がはじまった」

医学部の有力者が示唆したように今まで誰もしてこなかったには過去の歴史を踏まえたそれなりに理由があったのだと思う。したがって医学部の教授陣が眞治のプレゼンをドンキホーテと笑うのも当然だったかもしれない。それでも眞治は四面楚歌の中でも全くめげずに、応募を続け、当然のように落選が続いた。

落選続きの中女性医師支援に関する申請を試みている時に産婦人科の当時准教授だった女性医師が申請を手伝ってくれた。申請の視点を変え

てくれたことが奏功して、とうとう初めての獲得となった。但し獲得したとはいえ、半額は大学が負担しなければならぬ。予算外ということでは補正予算を組むこととなり、外部からの資金獲得ではあったが結局は大学の支出を増やすことになり執行側からよくは思われていなかった。補正予算は評議員会で審議されたが、公的資金の獲得には肯定的な意見が多数を占め可決された。評議員会での支持は眞治の更なるチャレンジを奮い立たせるには充分なものであった。

しかしこの細々とした支援の取り組みではあったが弱者支援のきっかけとなった。当時初めて女性が理学部長に就任した。先生から女性研究者支援への応募が打診された。この応募には病児保育への取り組みが必須であったので、附属病院での取り組みが必要であった。丁度女性医師

支援室を設立時の遂行メンバーの一人であった小児科の女性医師が手を挙げてくれた。

「病児保育室の運営と管理は私がやります。任せてください」

とても頼もしかった。これで女性研究者支援への応募の条件が整った。

女性理学部長が取り組みのスキームを組み立て申請した。暫くすると書面での審査が通過しヒアリングの通知が来た。ヒアリングとなり学長からプレゼンすることが求められていた。質問に答えるためだけに同行者からの応答が認められていた。質問は医学部に関する具体的に予想される困難に集中し、全て同行した眞治が答えた。医学部内部の意識改革や病児保育室運営に対する抵抗などプランの甘さを突く厳しい質問ばかりであった。眞治は自分の責任で全て偽りなく実行すると語気を強めてアピールした。

「きつちりやってみせますので、是非私にこの改革をやらせてください」

眞治が机に両手をついて頭を下げた。評価委員の席から笑いがでた。

「ああいう発言はよくない」

帰りがけに学長からしてはいけないことだと指摘された。申請の競争倍率は五倍強の狭き門であったが、一億五千万円の補助金交付が発表された。初めて教育に関する取り組みのプランが採用された。採択の理由の一つに次のようにも書かれていた。

「取り組みの実施に意欲が認められる」

四面楚歌と思い、失笑まで買ってしまったあのプレゼンが実は意欲として評価されていたことがわかり、眞治は小さく拳をあげた。

初年度に数千万円をかけた病児保育室を付属病院内に設置し、運営をはじめた。構造的弱者である研修中

の女性医師や病院ナースたちに形ある支援を行いた小々な第一歩であった。

その翌年これも文部科学省の競争的補助金の周産期人材養成の公募があった。新生児科の教授選が終わり四月に着任したばかりの新任教授に申請を打診し競争倍率は十五倍程度であったが、医師の診療科不均衡へのチャレンジをし、女性医師支援や子育て支援をメインにした周産期人材養成が採択となった。この取り組みは五年間で二億円の補助金が予定された。眞治は二年連続して億単位の補助金を文部科学省から交付を受けることが出来た。しかも大学負担分はなしでの補助事業遂行となった。眞治たちの行った取り組みでの成果のためだけとは思えないが、新生児科は多くの新入局者を迎え入れ、活気がみなぎる教室としてその後も発展を続けている。

この二つの課題に取り組んだこと
によって、更にダイバーシティー研
究環境イニシアティブの取り組みも
関東の国立大学と独立法人の研究施
設と共に取り組むことともなった。

これら一連の男女共同参画に関す
る活動は既に亡くなられてしまった
看護の名誉学長からの薫陶に負うと
ころが大きかった。

「ピンチはチャンス」

名誉学長はいつも励ましを下さつ
た。また取り組みの採択の時にも心
から喜んでくださり、女性医師支援
の取り組みを始めた時から眞治たち
の活動に無条件のご助力を頂いた。

眞治の二人の子供を妻と育ててい
くことができたには先生がお作りに
なられた学内保育室のお陰であると思
い、先生をリーダーとするそれま
での推進してくださった方々への恩
返しでもあったのかもしれない。

先生に男女共同のことをご示唆い

ただいたのは眞治が大学の四年生で
先生の教授室にお邪魔していた折、
国際婦人年のイベントに加えていた
だいたことが始まりであった。

加えて男女共同参画の推進イベン
トのご挨拶の中で、このことを紹介
してくださったので、先生のご記憶
の中に残っていたことに感激した。

取組の第一歩として眞治たちはまず
公的資金を使つて、ダクト付きの高
機能の病児保育室を設置し機能させ
た。感染力の異なる病児を双方保護
しながら保育できるハードと柔軟に
個別に対応するカスタムメイドした
ルールで運用するソフトを両輪とし
て、病児保育などを広く利用しても
らい女性医師や職員たちの継続就業
を支援する方針を立て推進した。

取り組みの反響は外から先に入っ
てきた。受験生や他学の執行部から
ポジティブな評価が医学部入試の二
次試験の面接や大学間の幹部が集ま

る会議などを通して学内執行部のメ
ンバーに戻ってきた。そして教員以
外の職員にも研究する権利を持つこ
とができる制度を創成した。この取
り組みは文部科学省の大学改革の委
員会からもまた大学基準協会からも
高い評価を受けることとなった。

また眞治は研究不正に関する調査
委員会の責任者として介入すること
がセンター長の職務を兼務すること
が決められていたので研究者の権利
を守る役目も担うことになった。眞
治は委員長としてわが校の教員が巻
き込まれた研究不正の調査を通して
教育される側からの声なき声に接す
る機会を得、立場の弱い学習者を保
護することが必要なこともあり、ま
た心無い告発によって不正として理
不尽に取り扱われかねない状況を事
実確認することによって救済するこ
ともでき、真の弱者を見定め救済す
ることに努めた。

また眞治は学校法人傘下の教育施設のある六行政との地域連携協定を締結し、支援を受けやすい環境を作りまた行政連携による医療支援も模索した。例えば長期入院を必要とする小児腎移植の母親の付き添いのための支援を創生した。病院での治療構造では家族への支援として患児が入院中に宿泊する施設を行政と連携し民泊のルールの中で支援するシステムを作った。

次に取り組んだ課題は産学連携事業の創生であった。産学連携センターが理事長の推進により設立され、初代の責任者として拝命を受け創生することとなった。他学部为重鎮たちと共に後発の大学ならではの組織を作り上げようと方向性を模索した。利益相反の確立も同時に処理しなければならぬ課題であったので、組織における利益相反の設定などを含め産学連携による不透明な癒着を回

避するためのいわば銭洗いの方法も同時に立案した。

また製薬企業との物質の提供を受ける際に結ぶ契約により企業の利得が優先される不平等が起こってもいけない。体験を踏まえアカデミアは大学が開発に関連した場合産業界の利益追求が患者に圧迫を与えるものにならないように監視することもミッションと考えた。また教室への研究寄付も利益相反が起こらない新しいスキームを作ること模索し提案した。加えて民間企業からの研究費の獲得、大学が特許の権利を保有することによる社会貢献、大学帰属特許の取得・維持のルール作りや研究の海外軍事応用への監視など弱い立場に追い込まれない大学研究者への支援を次々に立案し執行していった。加えて産学連携を一定の枠の中で全国順位を維持しつつ運営していると文部科学省から上乘せの人物

費を加えてくれる権利も得た。計算すると一億円超の補助金増となり、退任迄毎年大学への補助金の上乗せにとして流入させる取り組みを維持し続けた。まだまだ完成には程遠いが次に続く後輩に産学連携の更なる発展を委ねた。

眞治が目指した医療を受ける者への心理配慮ができることや研修する者の身分の確立することそして医療機器に頼らず、五感を使つての医療を模索などであった。自分としてはそれなりには総合診療医としての技能を身に着けある程度身に着け、システムについてもある程度は具現化できたようには思っているが、到達には程遠いものとなった。

眞治はお役御免となるまで、競争的補助金での取り組みによる弱者支援を実践し、また医工連携による臨床医療機器開発の方向性を模索してきた。模索でわかったことは、眞治に

とつて最も大切なものは形をなさず、また自分にとって大切なものは目で捉えることもできないような実体として捉えがたいものやもやしたものであったと実感した。実際に弱者と考へた者たちに対して支援を行つていくと、一方で支援を受けることができない対象をつくることにもなり、見えにくいものではあるが、支援には配慮をすべきことが余りにも多くあり、また支援自体にも矛盾を内包していることもわかった。自分としては不利益や差別を作らず執行するように努力をしたつもりではあったが、適切な方法として到達できたものは残念ながら手にすることはできなかった。

今眞治がお役御免となるに当たり、次世代に差別が少なく、執行する者は弱者への支援をいつも続けていく世界の創成を託すことになる。より良い未来が創生されることを願つて

お役御免となり、隠居になり自分の関わつてきた世界だけでもより良い方向に改善していることを見守りたい。

松原湖の想い出

小川 昭子

この度、ふとしたことから、母校、東邦大学額田記念館資料室から、昭和二十五年卒業の私共のクラスが、『青春のかたみに。』という文集を平成四年に発行した中から、係の方が、私の拙文を送つて下さいました。私は会員の中で超高齢になりましたので、お若い先生方にご笑覧頂きたいと思ひ、投稿させて頂く事に致しました。

“一番うれしかった事、一番口惜しかった事”

昭和二十年四月、医学部一年生となった私は十六才だった。国中の女学生や女子大生が工場動員されている時、医学生は国民を守る医師不足のため学業をつづけ、一日も早く医師になるようにとの国の方針だった。母校は松原湖畔の旅館を借りきつて一年生の寮に当てていた。八畳に七人のわり当てで、一畳分に七人のふとんと荷物を置くようになっていた。夜はノミに攻められ一睡も出来ない日もあった。十六、七才の秀才（私以外）の乙女等は、隣村の公民館迄、空腹に耐え溝を渡り草を踏み、足をがくがくさせながら通つた。板の間には机も椅子もなく、生化学の講義が始まると一週間つづき、ドイツ語の先生が見えると一週間つづくというくり返したつた。

そんな単調な講義の中でも一生忘

て、ビーコンこそなかったが低空飛行で卒業した事もなつかしい思い出となっている。

一方、悔んでも悔みきれない口措しい思い出が一つ心に痛く残っている。湖畔の近くに製粉所があった。発育盛りの空腹の乙女等はよくそこへ食料を分けてもらいに伺った。洋服やレインコートをおみやげにしてお願いに行ったが、いつもいやな顔をせず気持よく分けて下さった。終戦となり私達が東京へ引き揚げる時、そこのおじさんが、同室の七人を招待して下さった。兎を殺してすき焼をして下さった。物のない時代によく他人の子供に迄親切をして下さったと、その恩を忘れられずに過していた。医師になった当時は無給だったが、七年目最初のサラリーを頂いた時、ちいさなお菓子を御礼としてお送りした。そのおじさんの喜びは一通りではなかった。お菓子の大小

は別として、こうして恩を返してくれた事がうれしいと涙ながらのお手紙を下さった。ささやかなお菓子なのにと、私も胸が熱くなった。その後相変わらず年賀状、文通はつづいていた。

松原湖を去って十八年目、主人の大学の三組の夫婦で、松原湖へドライブする事になった。車三台を連ねて、道の悪かった当時は、七、八時間かかった。昔の駅からの断崖絶壁の道は、大型バスも十分すれ違えられる舗装道路に変っていた。そして、その逢いたいおじさんの家に着いた時、おじさんが仏様になっていた事を知った時、私は奈落の底につき落されてしまった。前年にこの世を去ってしまったのだった。おじさん何故死んでしまったの、何故私は一年早く来なかったのだろうと心に叫んだ。泣きながら後悔した。終生の恨事とはこういう事をいうのだろうか、と。

れられないうれしい思い出が一つあった。女学生時代英語が好きで英文科に進む予定だった私は語学が好きだった。ドイツ語の単文は、冠詞、定冠詞の変化こそあるが、殆ど英語と同じだった。英語の基礎をしっかりと覚えていれば、ドイツ語の単文はとても楽だった。最初の大槻先生のドイツ語のテストで一人一〇〇点を頂いた事だった。その答案を返して頂く時、丁度新潟に帰省していた私は、授業に間に合わなかった。寮で待っていた所、授業から帰られた同室のKさんから、先生が最初に野沢さん野沢さんと五・六回お呼びになり、
“百点が一人います。”とおっしゃった事を教えて頂いた。返して頂いた答案は百点だった。敗戦の色こい灰色の青春の中でこの思い出は心に明るいい灯をともし、未来に限りない希望を与えてくれた。しかし帰京してから、あまりにもenjoyしすぎ

おばさんが元気に迎えて下さったのは不幸中の幸だった。私は自分の親に与えるようにその時の持ち金の殆どをお香典として仏前に供えた。奥さんを喜ばせる事は、故人となつたおじさんもきつと喜ぶに違いないと、自分を納得させたが、落胆して帰途についた。今はその長男の方と年賀状の交換をつづけている。

親切だったおじさんはとても達筆だった。昔小学校の校長先生をして居られた方だった。物質の豊富に伴い、心の荒廃した人、冷酷な人が増えている今、田舎の一教育者のやさしさ、暖かさは、還暦近くなつた今も、私に生きる姿勢の一つの指標となつて居り、松原湖の思い出と共に生きる限り美しい思い出の一つとして心に残るであろう。

眞知子その愛その死

和田 秀敏

最愛の女房眞知子が忽然とこの世からいなくなつた。諸行無常、人の死は仕方ないのかもしれないが、あまりにも急な別れであつた。時間の流れは残酷なもので、out of sight, out of mind、平凡な一主婦の一生などあつという間に闇の世界に雲散霧消し忘れられてしまう。

そこで早い時期に何かを残してあげたい焦燥かられ、思い出すがままに断片的に書いた夫婦の物語である。

ようやく手術患者の回診を終え、午後十時すぎ医局に戻つて来るともはや誰もいず、灯りに照らされた大きなテーブルの上の白い封筒に気付いた。興味本位で開けてみると写真館で撮られたであろう台紙に貼られ

た若い女性の写真が出てきた。女性は着物姿で姿勢を正し椅子に座り、その顔はかたい表情でこちらを見つめている。いったいこの写真は何だろうと思つたが、たぶん医局の医師と結婚を希望する同窓の父兄から委託されたものであらうと勝手に納得した。

翌朝早々助教のT先生から呼ばれ、昨日の写真を手渡されながら、「君に良い人を紹介するので一度会つてみないか」と言われた。なんでもT先生のお友達の医師会の仲間のお嬢さんということである。昨晚偶然に見つけた封筒の中の若い女性の写真を見たとき、ひよつとしたら将来の伴侶になるのではないかと妙な予感がした。

それから一月後、新宿の京王ホテルで会う手筈が整つた。当方はT先生と私、相手はT先生の友達N夫婦、眞知子、眞知子の両親の七人である。

T先生と友達、友達N夫婦と眞知子の両親とは既知の中で、最初から話に盛り上がり、主人公の二人が完全に取り残された。眞知子は下を向いたまま面を上げようとしない。時々N先生がこちらを気遣って「何か話をしたらどうですか、せつかくお会いしたのだから」と話しかけてくれるものの、極度の緊張のまま下を向いた眞知子に話しかける機会さえ見づからなかった。

そのまま時間が過ぎ、ほとんど言葉を変えないままに食事は終わったが、眞知子はこちらを全く見ていなかったかと思いきや、後で聞くところ細かにこちらの行動を観察していたことが分かった。中でもスープ皿の中にネクタイの先が浸かっているのを見逃さなかったようで、ことあるごとにこの間抜けな夫の初対面の失策を面白そうに友達に披露する。

その後N先生より連絡があり、正式に付き合うようになった。外科系の大学の勤務は多忙を極め、月に一度の休みもままならない。ようやくとれた休みを利用して二人で新宿御苑に出かけた。御苑の芝生の上で、買ったばかりのオリンパスの一眼レフのカメラで眞知子の写真を撮った。この一枚の初々しい眞知子の写真は翌年イスラエルの病院に研修に出かけたとき、英和辞書の間に挟んで大事に持つて行つたし、結婚した後も四十年間この写真は医局の机の上や開業してから院長室に額装して飾つてある。

なかなか会う時間がないまま数か月が過ぎたころ、N先生から突然この話はなかったものとあきらめてほしい旨電話があった。電話口でしろもどろの私に対し、僕が責任をもつてもつと良い人を紹介しますからと慰めの言葉が後に続いた。なんで

も眞知子本人は当方を気に入ってくれたが、近い将来福岡に帰省することを聞き及んで、義父は本人に任せがよいと理解を示したが、義母が大反対しらしい。

結局新宿御苑で撮った一枚の写真だけが残った。断りの電話をもらったものの、眞知子は将来の伴侶になるのではなかるうかという妙な予感の心の隅にあり続けた。気に入っていただけに残念ですとだけ電話でN先生に伝えていたが、N先生がこれを誇張して眞知子の両親に伝えたらしく、結婚後、後々までもこちらが大いに落胆しもう一度付き合いを望んでいると話が拡大し、あの時はあなたが可哀そうで仕方なく付き合いを許可したと義母から何度も聞かされた。

N先生を通じてもう一度眞知子と会ってほしい旨電話があった。残念ながら短い期間ではあったが一度別

れた相手に再び会うのは恥ずかしさでなかなか踏ん切りがつかない。そこでN先生にお願いしてN先生を含めて三人で会うことにし、休みが取れた日曜日、N先生が予約してくれた中野サンプラザホテルの近くのイタリアレストランで再会した。眞知子は薄手のブラウスに白のニットのベストを着た学生らしいでたちで現れた。この時もN先生の独壇場でワインをぐいぐい飲みながら一人で話を盛り上げてくれた。再会の気恥ずかしさはあったものの、N先生のおかげでいろいろと話をすることができた。眞知子との思い出は数限りなくあるが、この時の服装と合いました。初々しい姿を昨日のことのように覚えている。眞知子の晩年、何かの機会にこの話を持ち出してみたところ、現金なもので全く覚えておらず、いつまでもロマンチックな自分が恥ずかしかった。

相変わらず忙しい毎日が続きなかなか会う機会がなく数か月が過ぎたころ、イスラエル、エルサレムのハダサ病院形成外科に研修に出かけることが急に決まった。これで肝心な時にしばらく会えなくなることとなり、研修に出かける前に何とか一度会いたいと思った。新宿のレストランで夕食をともしたのち、今晩は自宅に立ち寄ってほしいと眞知子が突然言う。今まで何回も会う機会はあるが自宅に招待されたのは初めてである。この縁談につながるであろう出会いに一度反対されており、自宅に伺い眞知子の両親に会うのは抵抗があつたが、夜十時を過ぎたころ中野の自宅に気が進まないまま訪ねた。眞知子の父は内科の開業医で幾分の興味もあつたものの、医院は都営住宅の一角を増設したもので、住宅を含め思いのほか質素な佇まいであつた。

た。早速茶の間に通され居心地の悪いひと時を過ごしたが、話好きな義母の明るい対応にこれまでの心配は杞憂だったようだ。そろそろお邪魔しようとしたとき義父からこれは餞別だと茶封筒が渡された。下宿に帰って封筒の中身を見てみると二万円もの大金が入っていた。

それから間もなくしてイスラエルに旅立った。今回のイスラエル行きは中東の政情不安が理由で回りは大反対であつた。回りの反対はともかく初めての海外で一抹の不安はあつたが、若い自分にとって新しい世界を見分できる興味のほうが大きかつたのは言うまでもない。しかし眞知子も眞知子の両親もしばらく会えないという物理的理由以外は何も心配していない。特に若い眞知子にとつてイスラエルという国がどういう国なのかもわかっていなかったようだ。

途中ボンベイ(現在のムンバイ)で一泊しローマから敵対する中東の国々の上空を避けて縫うようにイスラエルのテルアビブに到着した。下準備もないままに訪れたヘブライ大学医学部付属ハダサ病院は近代的な設備の整った巨大な病院であった。その形成外科で戦時国しか見られない外傷の多くを目の当たりにして、どうやら物見遊山気分ではならず、いた気分を引き締めなくてはならず、それからイスラエルの医師とともに連日の過酷な手術に明け暮れた。

毎日疲れ果てて間借りした一室に帰り、その日見聞きした手術内容を手術録に書き留めた。もはや眞知子のことは考える余裕もなかったが、毎晩ベッドに入ったとき英和辞書の間に挟んだ写真を手に取り眠りに入った。少し余裕が出てきたころから両親や所属していた大学の医局に手紙を書き、眞知子にもこちらの生活

の一部を紹介しながら元気であることを報告した。父からの一番に便りが届き、安否を聞いたです前書きの後にどこでどう知ったのか眞知子との付き合いを尋ねてきた。父の心配は海外での研修生活ではなく、長男の私が勝手に縁談を決めてもらっては困るというものである。親に秘密でこのような行動をとったことを強い調子で叱咤する内容であった。

できるだけ早く地元に戻り医業を継いでほしいともくろんでいた父にとつて関東の女性との結婚などもってのほかである。これまで父から地元の開業医の娘さんとの結婚話をたびたび言ってきたが、何となく気のりせず、そのたびごとに断っていた。

眞知子にはその後たびたび手紙を書き、返事を心待ちにしていたが音沙汰はなく、それとともにベッドで眞知子のたった一枚の写真を見ることも少なくなつた。そのころ夏休み

を利用して遺跡発掘のボランティア活動でエルサレムに来ていたS女子大学の四年生S子さんと知り合った。眞知子と同じ学年である。お嬢様育ちであることは眞知子と共通であるが人見知りせず、積極的に話しかけてくるのですぐに仲良くなり、夜店に出かけたり、エルサレムで一番のイタリアレストランで食事をしたりした。

ほとんど忘れかけていたころ眞知子から航空便が届いた。「お便り有難うございました。大変楽しく読ませていただきました」で始まる手紙は、卒業研究が終わったことや伊豆への友達との旅行などの報告のあとキプロスでのめめ事が新聞を賑あわせており心配している旨が書かれていた。この手紙は四十数年ぶりに駐車場の二階の倉庫から偶然出てきたが、眞知子からの便りはイスラエル滞在中の一通のみであった。眞知子の死

後しばらくして遺品を整理していたところ、アルバムの間からイスラエルから眞知子にあてたいくつもの手紙が大事そうにファイルして残してあったのを見つけた。

いよいよイスラエルを離れる時S子さんからかわいらしいピンクの封筒を手渡され、飛行機の中で読んでくださいと念を押された。テルアビブから飛び立ったハンブルグ行きのおランダ航空の中でそつと封筒の中身を覗いてみると、美しいベツレヘムの水彩画の絵葉書に、プレゼントしたエルサレム旧市街のスケッチを一生大事にすると書かれていた。

イスラエルのテルアビブからスイスのチューリッヒに飛んだ。これからスイスとドイツを観光し米国周りで日本に帰る予定である。スイスではまずオメガの腕時計を買いに出かけた。高級時計は買えないがスイス

製というだけで満足である。チューリッヒの街にはイスラエルでは見られなかったきらびやかなファッションがあちこちに満ち溢れている。そうこうするうちに艶やかなネクタイや深紅のセーターを買い求めた。しかしながら眞知子には何も土産を買ってないことに気が付いた。イスラエルには特産品はなく食料以外はすべて輸入品で土産となるものは何もない。チューリッヒの街角の時計屋の片隅にはオルゴールが何台も並べられて売られていた。オルゴールはスイスの特産品で、中でも精密機械メーカー、トーレンス社のそれは有名である。そこで高い買い物ではあったがトーレンス社の箱型のオルゴールを土産に買い求めた。曲目はモーツアルトの小夜曲である。トーレンス社のオルゴール部門はその後すぐにリュージュ社に買収され今では貴重なオルゴールである。

このオルゴールはスイスを出国するときに荷物検査で引っかけり、箱の中身を問われ「オルゴール」と言ったが通じない。そこで「ミュージックボックス」と言い直したが納得しない。結局贈答用にきれいに包装されていた包み紙を乱暴に破られてしまった。

帰国してすぐに眞知子呼び出し土産のオルゴールをベツレヘムのクリスマスカードとともに手渡した。記憶は定かではないが眞知子はこの土産をさほど喜びはしなかったようだ。嫁入りの時このオルゴールを持参したかどうか不明である。しかし眞知子の死後持ち物を整理していた時、和ダンスの着物の間に四十年間静かに眠っていたオルゴールを発見した。早速ねじを巻いてオルゴールの蓋を開けると明るい音色の小夜曲が狭い納戸の中で拡がった。いまこのオルゴールは仏壇の前にある。

時々ねじを巻いて音を鳴らす、眞知子はこのイスラエルのお土産が本当に気に入ってくれたであろうか。

父はイスラエル滞在中相手の身元調査をしたらしく、ようやく秘密裡に進めていた我々の付き合ひにも許しが、出、その後も忙しい合間を見つ、け今度は堂々と会うことができた。

食事の後は当時若者に大流行していたデイスコに出かけたが、眞知子は学生の身分でこのようなきらびやかなところに出かけたことがなかった。せいか、最初は緊張していたものの段々見よう見まねで狭いフロアーで踊るようになった。結婚してしばらくして「私があなたとの結婚を決意したのは六本木のデイスコ『赤い靴』に連れて行ってもらった時です」と打ち明けた。なんでも自分は仕事一途の堅物でデイスコなど縁がなかったように思われていたらしい。

クリスマスの夜だけは眞知子と過ごそうと待ち合わせはしたものの、仕事が長引き東京駅でずいぶん待たせてしまった。残念ながら時間が不案内だったせいで、何処も予約してはいない。有楽町を中心にいくつものレストランを覗いてみたが、さすがにクリスマスイブだけはいっぱいである。寒い中散々歩き疲れたところお堀端の東京会館の前を通り過ぎた時、会館の中から聖歌隊の讃美歌が聞こえてくる。誘われるがままに中に入り空席を尋ねたところ、幸いなことに一席のみ空いているとのこと。で、ようやく食事にありつくことができた。讃美歌をバックにクリスマス料理を頂いたが、当日の夜空の星をあしらったクリスマス特別メニューは今でも大事にとつてある。

食事が終わり、日ごろ行きなれた東京プリンスホテルに移動した。ここでもクリスマスパーティーが

真つ盛りで、半開きになった大広間の扉の間から尾崎紀世彦の「また逢う日まで」の歌声が聞こえてきた。しばらく立ちすくんだままその歌声を聴いていたのち、何処か休めるところを探し始めたがどこもいっぱいである。ようやく大通りに面したラウンジバーの止まり木に座ることができた。周囲は暗くローソクの光だけがぼんやりと周囲を照らしている。コーヒーを前にして素敵なクリスマスイブを演出しようにも適当な言葉が浮かばない。眞知子もこの暗闇の中ますます寡黙になる。そこで意を決して「福岡に来るかい」とそつと誘いをかけてみると、眞知子は無言のままうなずいた。眞知子の死後ふと思ひ出して東京会館のクリスマスメニューを探してみたが見当たらない。どうやらこの思い出の品は眞知子が一足先に黄泉の世界に持っていったようだ。

福岡での生活が始まったとき東京は遠い存在であった。新幹線も広島止まりで、その距離感は半端でない。眞知子は大海の小島の暮らしが始まった。友達も親戚もおらず、引つ込み思案な性格からなかなか周りに溶け込むことができないでいる。帰りの遅い主人を目がな一日狭いマンションの一室で待ち続ける毎日が始まった。遠い空の飛行機雲を眺めながらあれに乗れば東京に帰れると涙を流すことが多かったと後から眞知子の姉妹のように付き合っていた従姉から聞かされた。唯一の楽しみは東京の母に電話することであったが、今と違い遠距離電話は高く砂時計で時間を計りながらの会話であった。

翌年の暮れには宮崎の病院への転勤が決まり、その夏生まれたばかりの乳飲み子を抱えて、戦後すぐに建てられたアパート形式の古い官舎で

宮崎での生活が始まった。相変わらず眞知子は東京を懐かしがり、母と話すことを切に望んだが、残念ながら官舎には電話はない。週に一度深夜、長男を身包みに包み官舎から少し離れた喫茶店の公衆電話を借りに出かけた。電話口に出た眞知子はその時ばかりは笑顔に戻り、砂時計の砂がさらさらと落ちるのを気にしながらのひと時の幸せである。

三十の半ばから眞知子はテニスを始めた。週一度夕方から近くの小学校校庭での町内会テニス教室である。長男は中学生になっていたが弟、妹は小学生、夕食を早めにすまし子供だけを残して少し遅れてテニスに出かけた。もともと運動経験はなかったが、近くのコンビニのご主人の熱心な指導のもと段々とテニスにのめりこんでいったようである。三人の子供を家に残しての夜間のテニスは封建的な姑には不評だったようで、

いつも遠慮しながらのテニスである。そこで日中テニスクールに通うようになった。これが眞知子のその後の人生を大きく変えたのである。スクールで生涯の親友となるたくさんの友達と知り合うことができた。それまで引つ込み思案で積極的に友達の輪に入ることができなかった眞知子を取り巻きの友達のおかげで人が変わったように明るい本来の自分を取り戻した。

四十半ばで開業することとなった。学究生活に大いに未練はあったが、居場所がなくなり苦渋の選択である。開業生活は単調で五十を過ぎるころからだんだん働く意欲を失い、眞知子の明るさと反対に、内にこもり診療から帰ると倒れるようにソファアーに横になり体調も思わしくなかった。ちょうどそのころ眞知子からテニスに誘われた。学生時代にはそれなりにスポーツはしていたものの三十年

以上のブランクがある。いやいやながらまずは小学校の校庭でテニスを始めたが体がついていかず、テニスの翌日は診療に差支えがあるほど疲労困憊していた。少しうまくなつたところで、怠惰な自分を励ますように、さらに夜間のテニススクールへ眞知子を送り迎えしてくれ、試合にも参加できるようにするとそのうち二人の共通の趣味となった。子供に手がかからないようになるころには眞知子はますますテニスにのめりこむようになりそれと同時に親しい友人の輪が広がった。眞知子が亡くなる前日の夜、近くの小学校の校庭でテニスをした。テニス仲間と試合で眞知子はすこぶる調子がよく、ただ一人全勝した。自転車でのテニスからの帰り道「今日は調子よかったね」と話しかけると「今日だけではありません。実力、実力」と楽しそうに言葉を返した。これが眞知子との最後の

の会話である。

眞知子が亡くなった後半年ほどテニスから離れていたが、テニスの仲間から再び誘われテニスを始めた。眞知子の死後何とか独り身で生きていけるのは今ではテニスのおかげである。テニスは眞知子だけでなく二人を助けてくれたようだ。

質実剛健な家風で育てられたせいか女はともかく男の衣服は一切の贅沢はなく大学に入るまでほとんど学生服で過ごした。若いころからファッションには大いに興味があり、友達の洗練されたいでたちをうらやましく思ったものである。卒業後自分の給料で金ボタンのついたジャケツトを買い求め、意気揚々と福岡の自宅に帰ったところ、さっそく父から金ボタンを外すように強く言われた。「この程度のコットンでは派手には見えないのに」とブツブツ言いなが

ら父の命令で母は金ボタンを外し野暮ったい薄ネズミ色のありきたりのボタンに変えてくれた。

それからしばらくしてもう少ししやれたスーツを求めて渋谷の東急デパートに緊張の面持ちで出かけた。いろいろあまたのスーツを物色しながら、父の顔が目の前をちらつきなかなか決めることができず、迷っていると女店員がブルーの七宝焼きの派手なボタンのついたジャケツトを薦めてきた。まさに当時ブレイクしていたグループサウンズの衣装のようである。このようなジャケツトは若い時にしか着ることはできませんよという店員の言葉に後押しされ、ついに買い求めた。このジャケツトは眞知子との初めてのデート、新宿御苑に着ていったが、その後はほとんど着る機会がなかった。

眞知子と結婚してからは靴下一足下着一枚自分で買うことはなかった。

セーター一枚買う時も必ず同伴し、あれこれ注文を付け、眞知子の好みで決められた。そのため家に持ち帰ってもなかなか気に入らずしばらくお蔵入りとなるが多かった。四十半ばで開業するとスーツを着る機会も少なくなり、開業医は白衣を被れば下の衣服は何でもよいという眞知子の合理的な考えのもと、お洒落をしたいと思いますも取り合ってくれず、フアッションとはますます遠縁となった。一方眞知子も女性が憧れるブランド品の高級な衣服は欲しがらず、多くはデニスウェアで過ごしている。

眞知子が亡くなる前年の秋、ホテルで開催された百貨店の内覧会に招待され夫婦で出掛けた。もちろん目的は婦人物を物色するためである。会場には紳士物も多数陳列してあり、あれこれ見ているうちイタリア製のいかにも高そうな冬物のジャケット

に目が付いた。最近自分の衣服はほとんど手に入れたことがなく、購入することなど考えもせずぼんやり見ていると、背後から眞知子が「気に入っているのなら買ったら」と声をかけてきた。こんなに簡単に買い物を買ってくれたことはなく半信半疑で眞知子の気が変わらないうちに購入することを決めた。イタリア製のそれは値段も半端ではなくもう一度眞知子に念を押したが、あっさりと首を縦に振った。結局その日は眞知子の婦人服は何も買うことはなかった。袖口の手直しを依頼し、一週間後、デパート内のブランドショップにジャケットを受け取りに出かけた時、ショップ内にも高級なスーツが多数陳列しており、眺めているうちにもう一つ紺色のベストを編み込んだしやれたジャケットを見つけた。手に取って眺めていると会計を済ませた眞知子が「それも気に入ったら買った

ら」と思わぬ提案があった。びっくりして振り向くと「買ったら」ともう一度言った。値段を見ると受け取りに来たジャケットの二倍もするさらに高級品である。結局眞知子の同意のもとこれも購入した。結婚してこれまでこんなに簡単に意のままに衣服の購入をしたことがなかったし、おまけに大変な高級品である。

師走の半ば、クリスマス飾りつけを買いに東急ハンズに出かけ、電飾やサンタクロースの小物を買ったのちふと店の片隅に目を落とすとグランドピアノの形をした電動オルゴールを見つけた。サンタの人形がピアノの鍵盤をたたきながらクリスマスソングが流れるという優れものである。それなりに高価なオルゴールである。昔からピアノは弾けないもののピアノの形をしたものは大好きでピアノ型の小物をいくつか集めていた。物欲しそうに眺めていると「余計なも

のは買わないで」との眞知子の一言で購入を諦め我に返った。

クリスマススの朝ベッドのそばの大きな段ボール箱が置いてある。一瞬間なんだろうと思ったが眞知子の荷物に違いないと思いいまの数日放置していたところ、眞知子から「なぜ開けないの」とこちらを責めるかのようには聞いかけた。一体何が入っているのか半信半疑で段ボール箱を開けてみると、先日東急ハンズで物欲しそうな目で眺めていたくだんのピアノ型電動オルゴールが出てきた。結婚して四十年眞知子からクリスマスプレゼントなどもらったことはなく、どういふ風の吹き回しか問うたところ、「あなたが欲しそうにしてたから」といふ簡単な答えが戻ってきた。

わずか半年のあまり立て続けに高価なプレゼントを眞知子から受け取った。残念ながらこちらから眞知子

に何もあげてはいない。それからしばらくして眞知子は忽然とこの世を去った。一体あの立て続けの高価なプレゼントは何であつたのであろうか。たぶん眞知子は黄泉の国に旅立つことにうすうす気づき別れの饞別を一足先にくれたに違いない。ピアノに添えられていたクリスマスカードには「今年もお疲れ様、子供たちもそれぞれ健康で一生懸命やっている。新居で一年健やかに過ごせることに感謝」と書かれてる。

眞知子が亡くなり、いろいろな人からお悔やみの言葉を頂いたが、その枕詞はいつも「奥様はきれいな方でしたね」であつた。眞知子は本当に美人であつたのだろうか。「あつたのだろうか」といふのは39年間夫婦生活を共にし、お互い知り合つた顔に過ぎないということである。その後眞知子の話題が出るたびに「奥様

は美人だつた」と言われることが多いし、つい最近でも久しぶりに会つた花屋のご主人から「きれいな人でしたね」と感に堪えない表情で言われた時は、これほど客観的な評価が積み重なれば眞知子は美人だつたのかもしれないと思うようになった。

若いころ冗談半分に「自分は西郷輝彦に似ていた」と眞知子に話すと、「私も学生時代夏目雅子に似ているといわれた」と真顔で答えた。まさかその時は相手にもしなかつたが、最近昔のアルバムや撮りためていた8ミリビデオを見ると、女房の20代は確かに夏目雅子によく似ている。また還暦を過ぎたころ東京の青山で写真のモデルに誘われたこともあつた。

眞知子が脳出血で急に亡くなり自宅での通夜の晩、多数の方の弔問をうけたが、夜の十時ごろ一段落し遅い夕食をとつたのちそろそろ床には

いろいろとしたとき、来客を知らせるチャイムが鳴った。慌ててインターホーンの映像を見てみると、久しく畳肩にしていた焼き肉屋の夫婦の姿が見え隠れした。十一時ごろ早めに店を閉めエプロン姿のまま吊問に来てくれたという。焼香を終え、いつも陽気な奥さんが棺桶の眞知子を覗きながら周囲の沈黙を破るような明るい声で「美人薄命」と一言。あまりに筋違いの一言にその時は驚いたものの、陽気な奥さんの心のこもった黄泉の国へのはなむけの言葉であつたに違いない。

眞知子の死後三年してポール・モーリア・リメンバー・コンサートに一人で出かけた。生の演奏を聴くのは久しぶりで、半年前からチケットを予約し楽しみにしていた。ポール・モーリアはフランスの作曲家、指揮者、ピアニストでポール・モーリア楽団

を主宰し、イージーリスニング界の第一人者として有名ではあるが、ポール・モーリア死去に伴い楽団は解散し今では知る人も多くはなからう。しかし1960年後半日本中で大ヒットした「恋は水色」は今でも時々聞くことができる。

今回来日したのはジャン・ジャック・ジュスタフレ・グランド・オーケストラで、ポール・モーリアの楽曲をジャズ風に編曲し一段と力強い演奏である。音楽会の聴衆は予想通りポール・モーリア楽団を知りその音楽に郷愁を抱く熟年層ばかりであつた。演奏会も佳境に入り「涙のトッカータ」や「憧れの地平線」が演奏されると隣の高齢の女性が盛んに目頭をハンカチで抑えている。一体何事かとチラチラ盗み見すると、涙はそのうち嗚咽に変わった。音楽は思い出を作るもので、その楽曲を聴いただけで遠い昔がよみがえり、悲しみに

打ちひしがれることもある。

どちらかといえば陽気な明るい演奏なのに、よほどの思い出があるのだろうか、本当に不思議に思い、演奏会に集中することができなくなった。

演奏会も終盤に入りジャン・ジャック・ジュスタフレ・グランド・オーケストラが演奏する「愛の讃歌」が流れてきた。

眞知子との婚約がようやく整ったとき、両親が越路吹雪のクリスマスコンサートに招待してくれ、当時の皇居前帝国劇場に四人で出掛けた。

義母は越路吹雪の大ファンで、これといった音楽好きではなかったが越路吹雪の演奏会には欠かさず聴きに行くという。眞知子はその当時まだ世間ずれしていない無垢な女学生で当時の封建的な男女のしきたりをほとんど知らなかった。劇場のクロークでコートを脱ごうとしたとき、昔気質の義母がいつも夫にしているよ

うに、眞知子に脱衣を手伝うよう厳しく指示したことを今でも覚えている。最初はあまり興味はなかったものの、初めて聞く越路吹雪の力強い歌声に知らず知らずのうちに魅了され、コンサートもいよいよ最後の一曲となり、越路吹雪の十八番「愛の讃歌」がホールいっぱいに響き渡った。

ポール・モーリアの「愛の讃歌」を聴きながら越路吹雪の「愛の讃歌」と重なり、すでにこの世には眞知子はいないと思うと、目頭から自然と涙が流れるのを覚えた。

拙い眞知子との思い出話もこれで終わりである。さて最後にタイトルをどうしようかと考えたが、適当なタイトルが見つからない。芥川賞作家、村田喜代子氏の「名文を書かない文章講座」の中に「タイトルは最後の一行を読み終えたあとにくる、本当の最後の一行といえる」とある。いろ

いろ考えたが郷土の文人、檀一雄氏の私小説「リツ子その愛その死」から拝借することにした。「リツ子その愛その死」は若いころからの愛読書でこれまで何度も読み返したが「リツ子その愛その死」は最後の一行に相応しい。

記備談語― 13―(30・08～30・11)

佐藤 玄祥

電動自転車その後 13・8・1-1

什器備品の購入価格と実働利用期間の関係は、使用頻度が高いほど低価格に感じる。度々問題視して来た既報「電動アシスト自転車」日本タイガー電気 Bicycle 452(28・04・28・11)(30・15)が遂に40カ月使用歴の末、廃車することになった。バッテリーの消耗故障で、電動アシストが

出来ず、バッテリー交換が不可能(取り外せない)なのが原因である。この車種に関しては近所の何処の自転車店でも対応不可(つまりパンク修理問題視を含めて既報である)。「中国製通信販売品」の安価品のせいか。購入価格は四万円だった。

幸い一回のパンクと軽い転倒(擦過傷)があっただけだったが、現今、アフターサービス皆無の商法に遭遇し、「安かろう。悪かろう」では結局高く付く事になる。

40 カ月使用出来たため、月千円の割合の利用率となり、これが高いか安いかは判断に困るが、メーカーは対応と改善をしていない。悪口の割りにには利用出来た方か? これからは健康のため、徒歩か人力の自転車のでかけよう。(30・08)

学校プール中止 13・8・1-2

今年の異常気象は、楽しい夏休み

の学童から学校プールの使用を奪ってしまった。学校薬剤師として昨年まで、永年プール管理に携わって来た経験の中でも、全く異常な出来事である。昨年は水温・気温合計50度に達せず、8月は殆ど雨のため遊泳中止が多かったが、今年は全く逆の状態で、水温・気温が高過ぎて、特にプールサイドの高温が異常だ。熱症対策の問題が起きている。

日体大スポーツ危機管理研究所南部しおり副所長は、「水中ではノドの乾きを感じ難く、水圧で体が保たれ、脱水症状を自覚しづらい」と学童が体調変化を言葉に表せず、熱性疲労にも「疲れた」「眠い」と口にし、大事に至るという。

熱中症は自覚症状がメイン、体調不良を早く友人や先生に伝える指導が必要なのだ。各教育委員会や学校の適切な判断のもとに、予防して欲しい。老婆(爺)心ながら、即断の警告

である。体育系の無理もほどほどにしたい、異常温なのだ。(30・08)

選択の見出し(8) 13・8・1-3

的確で高度な情報として定評があり、一流ジャーナリストが編集参加している。

《世界》 “米国は誰の同盟国なのか”、欧州よりロシアを選ぶトランプ、米国第一主義に基づく欧州駐留米軍の撤退。“「習近平独裁」に長老達の反旗”、一強指導部に批判噴出の「異常事態」。“イラン「政権転覆」に本腰の米国”、経済制裁と「反体制騒乱」支援の謀略。“米国を襲う「トランプ農業恐慌」”、通商戦争と移民排除の重い代償。《政治》 “安倍の「賞味期限」はいつまでか”、総裁選で斯くも必死の理由、三期目早々の「死に体化」の恐れ。“総裁派閥「清和会」に人材無し”、後継育成ができない安倍の限界。《経済》 “三井住友

海上火災”、西日本豪雨と海外事業

不振の「二重苦」、水害補償額と海外事業の裏目、再編も視界不良。

“SUBARU買収”、“トヨタの下心、

不正問題でチャンス到来。《社会・文化》 “自衛隊「災害派遣」”、美談の陰に隠された重い課題、消防・警察と比べ異常に高コスト。etc (30・08)

火星大接近 13・8・2-1

惑星の中で生物体が存在する仮説を、子供の頃信じ、愛読した「火星兵团」を思い出した。重力の関係か、“蛸”の様な、そして知能も高く人語も理解するなど子供心に想像力を逞しくした「火星」が大接近する。ピークは7月31日午後4時50分に最も接近、南東から名の通り赤橙色輝く姿を現した。国立天文台によると、明るさは“マイナス2.8等星”で年初の50倍を超えと言う。9月上旬迄

“マイナス2等星”の明るさが続く。約2年2カ月毎に接近、15年振りに大楕円形のため最短「5759万キロ」に接近したのだ。

隣町・西武新

宿線「都立家政」

駅南北の賑やかな商店街は、通称「家政銀座」と称し、“カセイチヤン”をシン



©ちばてつや

ボルマークとしている。現在名称の起源は“都立鷺宮高校”になっているが、「都立家政商店街」として毎年夏（8月25日頃）中野区の名物として“阿波踊り”が実施されている。“火星”が話題になることだろう。

(30・08)

水の日 13・8・22

8月1日は「水の日」、被災地の傷も癒えない中で巡って来た。この夏

はどうなったのか、猛暑・異常気象の中、“水の害”が日頃の有り難味を相殺している。気象キャスター・倉嶋厚氏によると地球上の水の98%は海水で大気中の水蒸気は0.001%に過ぎず、太陽熱に依つての海水蒸発と雨水となつての自然循環のおかげで生物が生存を続けられると言う。今夏はその循環の乱れから、そして気象の異常から台風迷走により長期間水害に晒され、このまま暑さが続けば水不足、改めて「水の力」の両面を見ることとなった。奉職していた小学校の校長室に「水の則」の掛け軸が飾られている。

一水五則 自ら活動して他を動か
しむるは水なり・常に己の進路を求め止まらざるは水なり。障害に遭いて激しく勢力を倍加するは水なり。自ら潔くして他の汚濁を洗い清濁併せて入れる量（うつつ）あるは水なり。〃方円の器に従い柔軟に形をか

えるは：〃が抜けていたが「水の日」に初めて水の偉大さに思いを馳せる。

(30・08)

大麻（マリファナ） 13・8・23

厚生労働省によると、17年の大麻事件摘発者数は全国で3218人に上り過去最多数を記録した。流通量を押上げているのが大麻の国内栽培の増加で、麻取り（マトリ）（厚生労働省関東信越厚生局麻薬取締部）によると、組織的大規模栽培だけでなく海外インターネットサイトで大麻種子の購入が容易となり、園芸用栽培キットで簡単に栽培出来るためだ。もつとも恐れていた成分濃縮による“大麻ワックスリキッド”を市販品の“電子たばこ”で簡単に高濃度吸引が可能になった事だ。見分けることは極めて困難という（捜査関係者）。16年参院選挙に「医療用大麻の解禁」を公約に立候補したという

無知者の元女優が居たが(麻薬所持違反で逮捕、大麻は吸引により「たばこ」と同じ耽溺性だけでは無く、中毒が進行し幻聴・幻覚から人格喪失、「廃人」を辿る悲惨な終末を迎える。簡単に入手出来る「電子たばこ」を製造発売禁止し、同時に家庭内栽培を厳重に重々に取り締まることが急務だ。「まとりさん」たのんまつせ！
(30・08)

i P S細胞 13・08・3-1

ノーベル賞受賞の京都大学中山伸哉博士の「人のi P S細胞(人工多能性幹細胞)」による新治療法のパーキンソン病への臨床試験(治癒計画が政府機関で承認され京都大学病院で年内にも治療を開始するという。パーキンソン病は脳内の情報伝達物質ドーパミンを出す神経細胞が減少して発症し、徐々に身体機能を失ふ。日本で生まれたi P S細胞の有用性に

期待される事になる。細胞を用いる治療として欧米では1980年代以降、中絶した胎児の脳細胞の移植が、その成長力を利用して効果を挙げているが、倫理上の観点からあまり一般的ではない。i P S細胞なら症状改善に適した細胞作成が容易である。京大i P S細胞研究所では現在、他人に移植しても拒絶反応が少ない特別な形(かたち)の遺伝子を持つ人からi P S細胞を作り備蓄する計画を進めて居る。国内16万人のパーキンソン病患者の期待のためにも成果を挙げて欲しい。
(30・08)

盆踊り 13・08・3-2

夏の風物詩のひとつ「盆踊り」に民謡など合わせて踊る昔ながらの形では無く、米ロックバンドの曲が大音響の中で、今月13、14日「第6回中野駅前大盆踊り大会」が挙行された。米国ロックバンド「ボン・ジョヴ

イ」の名曲で振り付けした盆踊りで話題をさらい、「炭鉾節・おはら節」でも若者・外国人に大受けだったようだ。

古い話だが昭和10年の夏、母の実家の下谷同朋町(御徒町)近くの空き地で「東京音頭」♪おどり踊るならチヨイトヨイヨイ」の上野盆踊り大会が記憶にある。

「盆踊り」とは、もともとお盆に帰ってくる先祖の霊を供養するため、平安時代位から始まったと言われて居る庶民的な行事である。

地元鷺宮商店街では毎夏8月初め(土・日)近くの小学校校庭に櫓を組み、夜店・屋台を業者を排し、手作りの盆踊りを実施して来た。学校敷地なので大音響は無く地域密着型で好評だ。老いも若きも楽しむ伝統とニーズの一体である。
(30・08)

高校野球100回大会 13・08・3・3

真夏の風物詩、日本中を沸かせた高校野球は史上最多の56校が出場し、大阪桐蔭高校が優勝し100回の記念大会が締めくくられた。大正の米騒動と戦時中を除いての103年目の大会である。特筆すべきは三度目の「大阪桐蔭」の春夏連覇の他、「9人野球」で公立校(県立、特に農業高校の秋田「金足農高」の準優勝の健闘であった。酷暑の中、選手の体調管理の観点から延長戦12回からの「タイブレーク」が適応され、逆転・サヨナラ・満塁ホームラン(「済美高校」)もあり、連日の熱戦と天候に恵まれ史上初の総入場者100万人を記録したようだ。「金足農高」は秋田大会から選手交替なしの「9人野球(全員3年生)」で決勝戦に勝ち上がり、好投手「吉田輝星(こうせい)」の力投と全員地元出身の「雑草軍団」の活躍が全国的に共感を呼び、素晴ら

しい記念大会となった。秋田県は第1回で準優勝(「秋田中学(現秋田高校)」以来103年振りの快挙を称えた。い。(30・08)

私の健康法(88歳 13・09・1・1

市立一中クラス会幹事M氏の家族葬の通夜(8・28)御斎(おとき)の席で、弟君から「健康の秘訣」を是非話して欲しいと言われ、僭越ながら日頃実行している食事法「済陽(わたよう)高穂医博「ガンにならない食事」」他、をお伝えした。米寿の現実の説明になった。

1)腹八分、2)減塩・減糖、3)30回噛む、4)HSP入浴法(28・01、28・12)、5)血圧体重測定、6)原則菜食主義、7)しようわじゆうす(28・06)少食・和食・充(実)・薄味(85歳から粗食を充に)。健康五則：快食・快便・快眠・快働・快唱(笑)。五出(ごすい)の術：大小便・汗(労

働)・声・精・気。

具体的には、新ためて実施方法を述べる。1)白を避ける(玄米・岩塩・黒糖を)、2)菜食(多色)・果物、3)タンパク質(牛乳・卵)、4)肉類…四つ足を避け魚介類・トリ(85歳から解禁)、5)脂肪はゴマ・オリーブ油、6)発酵製品：漬物・酢・ヨーグルト、7)大豆製品(豆腐・納豆・豆乳)、8)根菜類・茸、9)海藻、10)禁酒・禁煙。水は現在の水道水で完璧。運動と足を鍛え、寝たきりを避け、百まで実行中！ (30・09)

防災の日 13・09・1・2

関東大震災から9月1日が来て95年、忘れたところか天災が、忘れ様も無い程多くやって来るこの頃迎える「防災の日」でもある。火事が大災害になるのだ。火山国の宿命か震災は避けようがない。日頃の対応が問われる「防災」なのだ。加えて今

年は、7月からの異常気象で、数度の大型台風により齎す西日本豪雨による水害が各地で起き、避難を余儀なくされた方々が多い。今夏は交通網遮断・落雷・停電等でライフラインが断たれ、高温異常が長期継続し、新たな熱中症対策を検討しなければならぬ。都市部の高層化と地下網の充実で、ハザードマップはもとより多数の人々の避難対策が必須である。決して自分の所は大丈夫とは思はないこと。いざの場合の避難対策はやり過ぎることはない。飲料水ひとつ考えても備蓄のため、ふる水も流せない。

個人的にも今年は防災グッズを購入し、電気がなくても3日間を乗り切る覚悟で公助を待ち、自助・共助・近助の四助(26・02)で頑張ろう。火の用心! 第一。(30・09)

五輪に出られなう 13・09・1-3

体操五輪女子有力候補の宮川沙江選手が弁護士介添えで堂々と体操協会上に、速見佑斗コーチの解任処分の撤回の単独記者会見を行った。

協会側は、速見コーチもパワーハラスメントを認めていたので、宮川選手の聞き取りもせず解任したが、逆に宮川選手にもこれに従わなければ2020年五輪に出られないし、所属も「朝日生命体操クラブ」に入れと示唆したと伝えられ、その反論がこの会見になったものと思われる。同協会山本宣史専務理事も女子体操強化塚原千恵子部長も、速見コーチの指導中の暴力行為が他の選手に恐怖を感じさせ「暴力は指導に不可」の見解のもとでの処分であつたと言う。しかし宮川選手は暴力とは見ず「愛のムチ」での指導強化と感じ、今回の撤回会見となった。「会見はウソが多く、選手のワガママと認定外の個人

指導へ繋がり、五輪にも出させない」とは塚原光雄副会長の談話であつた。勇気ある宮川選手(18歳)に感動の声が多いのも解る気がする。

(30・09)

保存150年 13・09・2-1

記録の保存に、責任を問われるのを防ぐ(妨げる)ため廃棄を指示した役所もあるのに、何と総務省は住民票・戸籍の付票を含めての保存を、5年から150年とし関連法の改正案を来年の通常国会に提出する方針を決めた。

人生100年、平均寿命を上回る150年保存法の設定は、総務省では死亡・転出等で抹消された住民票と住所の履歴となる「戸籍の付票」を保存期間を5年から延長することで、土地所有者の死亡による不在地主や所有者不明の土地と住民基本台帳の関連を明確にするための法律なのだ。

2016年の時点で実測410万ヘクタール(九州の面積より広い)と推定されている。相続放棄や所有者不明の土地は、犯罪の温床にもなり、更には税制上の不公平(未収固定資産税)もあり、明確な土地所有者を記録し土地の有効利用と、巧妙に狙われる不在不動産登記の不正取得防止の罰則強化も検討しているようだ。

(30・09)

固定電話表示 13・09・22

受信の場合、東京都内(03)の電話表示を見て固定電話と意識し、簡単に相手を信じてしまい、ニセ電話での詐欺に引かかってしまうケースが多いと言う。

〔発信 090-☆☆☆☆☆表示 03-

☆☆☆☆〕転送サービスを利用した方法で固定電話と信じ、犯人の目論みに乗ってしまうのだ。従来のサギグループは他人や架空名義契約のス

マホを使っていたが、2018年の法改正で契約者の本人確認が不十分な業者への罰則が設定され、それ免れるため対象外の「固定電話転送サービス」に着目し、区分が曖昧になり、事件が増大(送付・振り込みサギ等)した(警察当局談)。

本来固定電話の転送サービスは、官公庁・企業等が利用することが多く、携帯電話から自社の固定電話としての発信が出来る制度なのだ。犯罪者は他人名義や架空のニセ身分証明で幾つもスマホを購入し、あたかも固定電話からの案内と見せ信用させている。悪質は良貨を駆逐する。須らく早急に制度を改正すべきである。

(30・09)

大坂なおみ選手の快挙 13・09・23

テニスの全米オープンで「大坂なおみ」選手が優勝、四大大会のシングルスで日本勢で初めて制したニュー

スは、昨年12月からコーチに就いた「サーシャ・バイン」氏と本人の努力が実った成果であった。

180 cmの身長と180 K/hのサーブを武器に、目標としていた計23度の四大大会優勝を誇る「セリーナ・ウィリアムズ」選手に一步もひけを取らず快勝した。

完全アウエーの観衆で埋まった女王復帰を願う会場で、「セリーナ」選手に対する審判の判定を機に、ブライニングが沸き起こり、そんな異様で不安な環境の中での「大坂」選手の心を乱さなかった精神力の強さに感銘した。精神面の成長を助けたコーチの存在はパワハラ問題などで揺れる日本のスポーツ界にも、一石を投じた事になる。試合後、勝者を讃えた「セリーナ」選手にも敬意を表したい。これがスポーツ精神なのだ。

(30・09)

敬老の日記録 13-09-3-1

敬老の日を前に、厚生労働省は9月15日現在100歳以上の方は69,785人、48年連続過去最多数を記録したと公表した。内訳は女性+1875(61,454)人(88.1%)、男性+139(8,331)人であった。都道府県別では人口10万人当たり夫れ夫れ1位島根(6年連続10.1人、2位鳥取9.79人と山陰が占めていたが、同省では詳しい分析はしていないようだ。

医療技術の進歩や健康意識の高揚、食事・運動等の環境の変化が齎し、人生120年説の実証に、健康寿命の伸延の成果なのだ。国による百歳高齢者表彰が始まった1963年に153人であったので半世紀(55年)で実に456倍に達し、今後更なる増大が期待される。因に、東京都の65歳以上の高齢者は3,078,000人(男性1,336,000人、女性1,742,000人)と過去最多を更新、高齢化率23.3%。日

本人最高齢者は115歳、田中か子(ねさん)(福岡)。

百歳以上のご夫婦は高松市の109歳と100歳の松本政雄・みや子夫妻で「存命中の最長寿夫妻」としてギネス世界記録に認定された。いつ迄も仲良くお元気で。(30・09)

機嫌ドーピング 13-09-3-2

記録向上のためのスポーツ界での薬物によるドーピング事件が起きて久しい。日常に服用するカゼ薬や治療薬、保健栄養剤の中にも尿検査でクロと出る事もあるので、選手達も注意を払っている。そんな中で全く次元の異なったドーピング(そう言えるのかどうか)も疑問だが、事件がフランスで起きた報道に驚いた。有名なツールドフランスでの事、使用自転車タイヤに仕込まれた電動自転車レントゲン写真を見て、レジャー目的ならともかく、競技に

使用する意識はスポーツマン精神に反する事である。製造者は、使用者がどう使うかは関与しないと言っているようだ。

使用器具については、パラリンピックで脚部に付けた強力なバネも基準があると思うが、機械(器具)に因る差異は競技には向かない。小型ジェット使用の陸上競技や水泳は遊びである。自転車は検査機を使い、重量測定も基準を設定するようだが、健全なスポーツに巧妙な事件の登場は、ドーピング以前の犯罪でもある。(30・09)

国民医療費最高 13-9-3-3

厚生労働省は21日、2017年度の医療費の概算が前年対比23%増しの42兆2千億円に達し、過去最高を更新したと発表した。

高齢化と医療の高度化で年々医療費が増加し、一時的には16年度のC

型肝炎治療薬「ソバルテイ」や高額
の制ガン剤の大幅値下げがあっても
前年比9千億円増となったようだ。
診療種別で入院17兆円(全体の

40%)、外来14兆4千億円(34%)、
調剤7兆7千億円(18%)、歯科2兆
9千億円(7%)。一人当たり75歳未
満22万1千円に対し、75歳以上は
94万2千円になる。都道府県別では
最高は東京都で4兆5274億円、
最小は鳥取県で2千75億円である。
自己負担や労災保険を除いても、医
療費の総額を示す「国民医療費」の
約98%に当たる国の負担なのだ。現
在元気で活動している高齢者は、夫
れ夫れ自己管理で医療費負担を少な
くし、何れはご厄介になる有難い制
度を負担している若い方々に感謝し
なければならない。(30・09)

於岩稲荷見聞 13・10・1-1

まち歩きツアーで四谷左門町近辺

を散策した。講師の説明解説を聞いて
全く誤った記憶を正されて愕然と
した。手入れの成果かきれいな佇ま
いだった。

それは歌舞伎作家「鶴屋南北」と
「於岩稲荷」の経緯のこと、資料によ
れば、1636年(寛永13年)田宮家
の娘「お岩さん」が信仰していた屋
敷社が後々「於岩稲荷」と呼ばれ、
崇敬者により祭祀されてから約200
年近く経った1825年(文政8年)
に「祭神於岩さま」が主人公の「東
海道四谷怪談」として歌舞伎上演さ
れたのだ。於岩さんがオドロくした
怪談に作り上げられたのが、江戸後
期の流行作家「鶴屋南北」で、当時評
判になった事件、例えば密通のため
戸板釘付けの男女・主殺し・姦通の相
手に殺された俳優等、当時の江戸の
人間なら誰にも記憶にある事件を搦
めて全く虚構の物語に仕上げたのだ。
地名も東海道を付し役者の病氣・事

故を、崇りと怪談に結び付け参詣し
賑わったという。

〈四谷〉於岩稲荷田宮神社(お岩稲
荷)の一席。道理で明るかった。

(30・10)

はやぶさ2 信州の技 小惑星に

13・10・1-2

宇宙航空研究開発機構(JAXA)
は9月22日、探査機「はやぶさ2」
から投下した探査ロボット「ミネル
パ2」が小惑星「リュウグウ(大きさ
900mの約立方体)」に着陸し、地表を
移動し写真撮影に成功したと発表し
た。2014年12月に打ち上げられ
3年半の32億kmの長旅の成果であ
った。

「ミネルパ」の二つの移動用モー
ターや基盤等のソフトは、諏訪市の
デジタルスパイス社とレンズ開発の
光学機械「nitton」の技術が提供
されていた。更に10月3日、TAX

Aは「はやぶさ2」から小型観測用着陸機材「マスコット」を投下、小惑星表面の鉱物調査にはドイツ・フランスで共同開発した顕微鏡も搭載している」と発表、各国の叡知の結集なのだ。初代「はやぶさ」(2005年)のイトカワ着陸失敗を糧にした大成功であった。「はやぶさ2」本体の着陸も期待したい。(30・10)

紅ごんぱつ 13・10・1-3

弘前大学で品種登録し青森県に一步先んじられた「紅いリンゴ(中身)」(28・10)が品種改良を重ねた中野市の篤農家「吉家一雄さん」が1994年から育種を始められた写真。

本来野生のリンゴの半分は赤肉、渋味・酸味が強く、弘前大学の研究を含め、赤肉リンゴが次世代リンゴとして世界的にも注目されて来た(吉家氏談)。現在品種登録されているのは、甘みがあり生食に向く「なかの



真紅(しんく)」「ムーンルージュ(ふじより美味)」「炎舞(えんぶ)」と酸味があり加工にも向く「いろどり」と「なかのきらめき」の5品種。加熱で赤味が増し、料理に彩りを添え、目に鮮やか・食べて美味」のスイーツ。

やって呉れましたネ。10月中旬銀座NAGANO販売予定。(30・10)

辺野古移設NYタイムズ社説

13・10・2-1

10月1日、ニューヨークタイムズ(NY)電子版で「沖縄米軍縮小」の見出しの社説で、米軍普天間飛行場沖縄市宜野湾市)の名護市辺野古移転計画に反対する「玉城デニー」氏の沖縄県知事当選を受け、安倍晋三首相と米軍司令官らは県民と共に「公正な解決策を探るべき」と指摘した。12日、新知事は安倍首相に反対を直接伝達した。

米主要紙が沖縄基地問題で「再考を促す」のは極めて異例な出来事だ。社説は、沖縄県民にとって、この知事選挙は「米軍基地に対する住民投票」と位置付けた上で、安倍首相は辺野古移転に反対する動きにどう対応するか。「反対への法的手段」と「県民

負担の軽減代替案」の選択を迫られている。東シナ海での中国の軍事活動と日本や周辺地域の為の安全保障体制が、沖縄県民の犠牲の上での実現化されるべきではないと主張した。まさに、正論である。故翁長雄志前知事も喜ぶ事だろう。(30・10)

解体決定 中野サンプラザ

13・10・2-2

1973年(昭和40年)、国の特殊法人が建設した「全国勤労青少年会館」が中野区の所有になり、コンサートホールが少なかった当時、人気アーティストの公演会場として、著名度が高まった建物…JR中野駅前の複合施設で独特な外観と多彩な機能を持ち、中野のシンボルでもある「中野サンプラザ」が5年後をメドに解体されることになった。

今年の区長選挙では、解体を訴えた現職(当時)が、地元商店街や多数

の有権者の反対で落選したのに、半年も経たずのこの決定は半ば公約違反ではないか。『勝てば官軍』2024年度頃に取り壊し建てて替えられる。酒井新区長は、名前や三角形の意匠などを『新しい施設に引き継いで行きたい』としている。

中野区の委託で担当した「中野まつりカラオケ大会」が平成元年に第1回をサンプラザ前広場でゲスト「小田純平さん」を迎えて実施し、今年30回記念大会を実施する。中野区の「中野まつり」は平成23年廃止されたが、思い出は尽きない。(30・10)

医学部不正入試疑念 13・10・2-3

10月12日、柴山昌彦文部科学大臣は東京医科大学の男女比不正入試問題を受け、9月中に過去6年間の全国81の国公私立大医学部医学科の入試状況調査の結果、複数の大学

が、女性・浪人受験生に不利な扱いがあると報じた。背景には、医療現場が女性医師を敬遠し不採用などの差別が公然化し、しかも問題視されていなかった経緯がある。医学部では大学入試が企業の入社試験の役割を果たし、大学側が病院の求める人材を入学させようとする意図が働くとも言われている(反論はあったが)。書面調査の結果では、全体の78%の63校で過去6年間の入試で女子の合格率が男子を下回っていた。他の学部の入試では男女合格率は同じか女子の方が多い。医学部は『女性差別』の疑念を自ら払拭すべきで、文科省は10月中に纏める中間報告で、不正の疑念が持たれる大学名については公表せずとしているが、12月出願開始の前に受験生は迷っている。一刻も早く大学名を公表すべきだ。(30・10)

都知事感謝状 13・10・3-1

10月17日、小池百合子東京都知事より「平成30年多年にわたり薬物乱用防止啓発活動に多大な貢献をされたのでその功績に対し都民を代表して深く感謝します」(ママ)の感謝状を、はからずも拝受した。その上、薬物乱用防止関係功労者・知事感謝状受賞者13名を代表して「謝辞」を述べる光栄に浴した。

顧みると、昭和58年第二次寛せい剤乱用時代に、地元中野区薬剤師会副会長として、東京都薬物(当時は寛せい剤)乱用防止推進中野地区協議会を結成し(各界の選出者14名が推進員として参画)、東京都より設立認可され、今日も尚啓発防止活動に活躍の評価が認められ、会長職が長かった(通算三代目)私が代表として受賞の運びとなったのだ。

当日、事務局長の介添えを載き、恒例の11月8日開催の「第32回薬

物乱用防止中野区民大会」に於いて、現職の指導員の皆さんに、この榮譽をご披露することになった。今後も「ダメゼッタイ・薬物乱用根絶」への努力を惜しまない積もりだ。

(30・10)

カナダの大麻合法化 13・10・3-2

違法使用を止めさせる方策として、10月17日カナダ・トルドー首相が合法化の公約を実施した。犯罪組織の財源を奪い、子供達を守る、とその意義を強調したのだ。

一体、何が・どうして・なぜ「ダメ、ぜったい撲滅」を目標に活動する他の6ヶ国の人達を、啞然とさせる行動に出たのか！それは嗜好目的の「大麻」に関する合法化である。ゲートウェイのタバコどころではない。大麻は明らかに耽溺性の強い麻薬である。入手し易くなれば「大麻」がコカインなどより深刻な薬物依存に誘

導するゲートウェイ・ドラッグになり、酒などと一緒に使用した場合の依存による健康被害は計り知れない。

カナダ政府は合法化を機に、管理体制を強化し、「大麻」を課税対象とする新財源を確保し、国民の健康対策や啓蒙活動に当てるといふ。そんなことで秩序や健康が保てるのか、犯罪や交通事故の増加に対応出来るのか疑問だらけの現状で、開いた口が塞がらないとはこのことだ。当然の事ながら、我が国では絶対反対である。

(30・10)

首相所信表明 13・10・3-3

10月24日、第197回臨時国会が招集され、安倍晋三首相は衆参両院本会議で「所信表明演説」がTV報道された。「改憲」については具体的案を示すことで国民の理解を深める努力を重ねると強調された。

以下「強靱な故郷づくり」、復旧復

興の加速。「地方創生」、一億総活躍社会を作る。「外交・安全保障」、戦後日本外交の総決算、強固な日米同盟、新時代のルール作り。「平成。その先の新たな国創り」、皇位継承全力で準備その上で、これからの二年間私は、その先頭に立って激動する世界のド真ん中でリードする日本を創り上げる。そのためには国民一致の力でなければ、到底国家の進運を図る事はできない。長き故の慢心、懸念に、しっかりと向き合い、長さと継続は力である。少子高齢化と激動する国際情勢に真正面から立ち向かい、希望に溢れ、誇りある日本を造り上げると述べられた。

心強い信念は頼もしい極みであるが、改憲がどうも気になる。

(30・10)

補聴器使用率 13・11・1-1

耳の間こえない状態が長い人ほど

音に違和感を覚えて、補聴器を外してしまうケースが多いという。音の刺激が少ない状態に慣れた脳に取っては、補聴器を通した音は「うるさく、不快」に感ずるのだ。使いこなすには「慣れ」の努力が必要なのだ。個人差はあるが、聴力は加齢によって徐々に低下する。難聴の放置は、2017年の国際アルツハイマー病会議の研究発表によると「認知症」のリスクが高いと言う。その対応として、「補聴器」の使用を勧められるのだが、実態は日本補聴器工業会の調査発表(2015年)では、難聴者の割合は11%うち補聴器使用者は14%、欧米での使用率は、英国42%・ドイツ35%・米国30%と言う。

補聴器は医薬品医療機法に定められた医療機器だが、医師の診断が無くとも購入出来る。欧米には公的な資格制度があり、日本では耳鼻咽喉科は業者任せ、高価なものもあり、

使用満足度は低い。

難聴は長生きの証しと言われても「認知症」はイヤ、対応に苦慮する。

(30・11)

国民健康栄養調査 13・11・1-2

厚生労働省は9月11日、2017年の「国民健康栄養調査」の結果を発表した。今回初めて調査した60歳以上の「骨格筋指数」(サルコペニア指標(26・09)・SMI)が男女共高齢化に従い減少し、外出の無い場合「低栄養」の割合が跳ね上がる事が示された。

調査は昨年11月に実施、栄養摂取状況の所帯数は約3000件、加えて「高齢者の健康・生活・習慣」を重点項目とした。それによると、カルシウム・VC・食物繊維などの不足が顕著で、65歳以上の「低栄養傾向」(BMI・体脂肪率20以下)は改善されていない実態が浮き彫りになり、特

に80歳以上は男女共約2割に、この傾向が強い。

高齢男性は外出しないと食事量が減少している。高齢者の低栄養改善を目指す厚生労働省では(BMI)以外のデータ(SMI)筋肉量調査が必要という。(SMI)の平均値は、男女共タンパク質摂取量が多いほど高い。高齢者は運動量を考慮し、よく食べ、繁栄の中の栄養失調を避け健康で長生きしよう！
(30・11)

法の支配 13・11・1-3

法政大学山口二郎氏が判り易く、法の支配と裁判所の在り方を説明している(本音のコラム)。そもそも裁判とは、憲法や法律を無視した決定を下す可能性を前提として、多数者の誤りを正す為にある。

「法の支配」の原理は、我々人民がおとなしく法を遵守するのではなく権力者が法に基づいて統治を行うこ

とを意味するものである。例えば「森友・加計」問題に見られるような最高権力者に拠る権力の私物化である。特に沖縄県知事による名護市辺野古周辺の埋め立て許可の撤回に対しては、防衛省が私人の立場に成り代わって、行政不服審査という「人権救済」の仕組みを悪用して、撤回の効力を停止し、埋め立て実施を実現した。原発・辺野古埋め立てなど政府が拘わる案件では、裁判所は「政府」を勝たせ続けて居る。最高裁判事の人事権が内閣に握られて居るための付度なのだ。

裁判所が多数意志をチェックする本来の役割を果たすよう望む。
(30・11)

知覚過敏 13・11・2-1

一寸時期外れだが、6月4日はムシ歯予防デーで少し「歯」に関心を持ち、夏アイス等で震えるほどの冷た

さを口中で感じ、知覚過敏を体験すると、否応無く歯科医院を訪れる可きだ。歯の大切さは日頃の手入れ次第で、8020運動に関連して来る。

生活習慣の中でも、黒酢や炭酸飲料、柑橘類といった酸性の飲食物の摂取には、それらが「歯」のエナメル質を溶かすので注意をしたい。曾てコカコーラでの実験で抜歯した「歯」が溶けてしまう(リン酸分による)のを思い出した。そもそも「歯」は外側から硬いエナメル質・黄色い象牙質・神経や血管が通る「歯髄」の三層構造になっていて根元の部分にはエナメル質は無いが歯肉で保護されている。適切な歯磨きをしないと、細菌の塊の歯垢が「虫歯(う歯)」の要因となり、更に過剰な歯磨きも歯を傷つけてしまう。口中の清潔はもとより、酸性化を抑え、口を漱ぎ、専門的に歯垢を除去し、大事な歯を余後に多数(80歳20本)残して欲しい。表題は

警鐘のひとつである。(30・11)

スマホ老眼 13・11・2-2

前かがみになってスマホを操作、可成の明るさと小文字、目を酷使している状態が続くと、所謂スマホ老眼が進行する。8ch TVで、視力回復(改善)法を『今野清志』氏(日本リバーズ)が実演・説明していた。実際に視力0.06↓0.2と3倍の回復した例を、モデルさんの治療と併せてスプーンを使用して実演された。スプーンを60℃温水で暖め、45〜50℃を利用して顔面に裏面を当て、1)タッパ(軽く叩く)・2)さする(摩る)・3)シェイク(揺さぶる)の動作で、1)眉間10回叩打、2)目の上下を摩る、3)眉の上下を撫でる・・・を基本に実演。今野氏は血液の酸素不足を指摘し、先ず首のコリを取り、眼球の血流を豊富にする。更に呼吸法を加味し、ペットボトル底に3カ所穴

を開け、上部から大きく息を吹き込む動作を1日5〜10回実施すると指導された。その上で私は指圧のツボ療法と圧点を図示し、自己指圧で爪を立てず骨の上を押し、限球掌圧を薦める。(30・11)

青春と白秋 13・11・2-3

サムエル・ウルマン氏の「青春」を、我が敬愛する星桂三先生(作詞作曲家が、ご自作の旧制高校寮歌エッセンス「生涯青春歌」歌は三野昭一早稲田 大学名誉教授(当時85歳)の歌詞の中に、青春とは肉体の若さを言うものではない、心のありようである、心に夢の有る限り、その夢に向かって精進努力する、すなわち生涯青春である、この金言を間奏に挿入され、二年前輪禍で亡くなられた三野先生を偲ばれておられる。私も、ここ三年ステージで歌仲間と「バンカラブラザーズ(星先生命名)」としてこの

歌をご披露している。同年の誼みでご一緒したかった。

中国の五行説に、四季四色を配し、青春、朱夏、白秋、玄冬の内、「青春」に對し「白秋」は暗い厳しい冬を控えながら、世俗を離れ、ゆつたりと生きる時期と、この歳の時記」は書いている。現実の白秋時代は「継続雇用」「厚生年金受給延期」など社会保障制度の改革等ありで、余生の人生観は穏やかな季節にしたいものだ。(30・11)

オヤロ 13・11・3-1

日本生まれのゲームに、シエクスピアの「オセロ」と名付け、一見単純な「黒白」のハサミゲームが、大会を重ね10月9〜12日に亘りチエコ首都プラハで、第42回世界オセロ選手権大会が挙行され、何と小学五年生福地啓介君(11歳)(神奈川県)が初出場で初優勝したと報ぜられた。

“オセロ”は戦後娯楽の少ない焼け跡で、牛乳瓶の蓋を使って、長谷川さんという人が考え、任天堂とタイアップしゲーム化、1973年商品化され、世界に広まったのだ。

意外な逆転とルールの単純化から、瞬く間に世界中に広まり世界選手権になったのだ。日本オセロ連盟（東京）によると、選手権には大人？も参加していて、11歳での優勝は歴代最年少、36年振りに年少記録15歳（これも日本人）を更新した。「鳥鷲（ウロ）の争い」は囲碁だけではなく、子供？に負けても悔しがらず、大人のメンツに懸けて勝負するのも楽しい家庭の和になる。（30・11）

糖尿病デー 13・11・3-2

厚生労働省の調査では、全国で糖尿病が強く疑われる人は約1000万人・可能性を否定出来ない人が約1000万人に上ると推定した。糖

尿病への関心意識を高めるため、11月14日を「世界糖尿病デー」とし、インスリン発見者カナダ人医師の誕生日に因み、国連が2006年制定した。東京都庁舎が156室一斉に点灯され、夜空に啓発のシンボルカラー青色にライトアップされ、夜空に幻想的に浮かび上がった。血中のブドウ糖（血糖値）の濃度により身体組織の抵抗力に影響を生じ、合併症が多くなり、心筋梗塞や組織破壊（壊疽）等の原因となり、いわゆる“万病の基”であり、美食・豊富な栄養の摂取により古くから「帝王の病」といわれていた。糖尿病を「国民病」と考え、日常出来ることから改め、食事もバランスの良い内容に見直し、腹八分で血糖値を安定させ、インスリンコントロールを正常化し、運動法を加味し、肥満を抑制し、予備軍から脱退しようではないか。（30・11）

PD-1（細胞死遺伝子）

13・11・3-3

京都大学本庶佑特別教授らが偶然発見した一個の遺伝子がノーベル生理・医学賞に繋がった。この発端は1991年本庶研究室石田靖雅助手が、白血球の一種「T細胞」で未知の遺伝子を発見、T細胞が死ぬ時発見されたので、不要になった細胞が死ぬ意味の“PD-1”と名付けて論文発表された。本庶氏が「PD-1」とガンの関係を明らかにしたのは2000年以降の事である。仕組みは「PD-1」は「T細胞」の表面に免疫を抑えるブレーキ分子を作り、ガン細胞はブレーキを操作し、「T細胞」の働きを止めていたと考え、ブレーキを外せば「T細胞」はガンを攻撃出来る。この仕組みがノーベル賞の授賞理由である。この仕組みを利用して、小野薬品などが「オプシーボ」の開発に繋がったと言う。カギはゲノム（全遺伝

情報)でAIを利用した遺伝子検査のデータ解析にある。元々備わった免疫力を有効に働かせる機序がノーベル賞に結び付いたのだ。

(30・11)

御獄海速報(2) 13・11・3・4

東正関脇の御獄海が前日負け越しの九州場所千秋楽に大関高安を破り、男の意地と勝負の非情を最後に示した。三横綱一大関欠場の中で連敗を重ね、大関昇進どころでない不調の場所を何とか連続三役維持を確定(?)した大一番であり、大関高安の優勝決定戦進出を阻んだガチンコ相撲が光った。優勝した貴景勝を破ったのだから、平成生まれの意地を発揮し、来場所の横綱・大関、特に奮起して欲しい稀勢の里を迎えて、心機一転更なる挑戦に期待したい。

(30・11)

※タイトル「記備談語」について

「記事・備考・談話・語録」の頭文字から「きびだんご」として、健康関連情報や関係団体の新情報、世相のニュースから勝手連的に、日々アンテナを巡らせ、頭の老化防止に努めております。(笑)ご覧下さい。少しでもお役に立てば幸いです。

薬剤師・指圧師・剣道6段・NANK認定歌謡講師

佐藤 玄祥(博)(土砂)

【註】印刷関係の遅れで、本文記事内容が約1年半前の出来事になり、ニュース性が損なわれてしまいましたが、続編を考慮し、お詫びして掲載させて頂きまして。(佐藤)

私の旅

白矢 勝一

私の趣味、好きなことはと聞かれたら、先ずは旅行と答えるだろう。写真撮ったり、歴史上の人物の生家を訪ねたりして楽しんでいる。

佐伯祐三の旅やゴッホの旅、ギリシャ神話の旅などテーマを決めて旅を楽しんでいる。最近の冬と夏の旅について書いてみたい。旅先でスマホで写真を撮りフェイスブックにアップしている。フェイスブックは日記替わりで便利、昔からこれがあればどんなによかっただろう。

去年の年末から今年のお正月はパリ、南フランスを巡った。ミラボー橋イフ島 リュクサンブル公園の思い出の一部を書いてみたい。パリでは一度はミラボー橋を歩い

てみたいと思っていたのでセーヌ川に沿ってミラボー橋に歩いてみた。フランス革命やフランスの医学の歴史・芸術が好きで今まで何年も探索したがフランス革命初期の政治家ミラボーに由来する。彼は結構好かれていたようで通りの名前にもなっている。

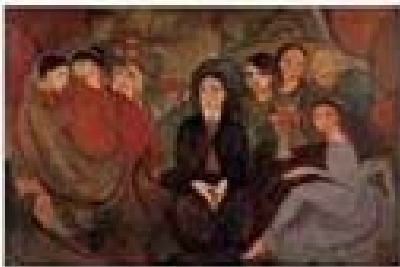


ミラボー橋

ミラボー橋を歩くと、そこからリバティ(自由の女神)とエッフェル塔が見えた。自由の女神はこちらを向いて立っているが、実はニューヨークのリバティの方向に向けて建てられたそう。エッフェル塔やリバティは1889年築、ミラボー橋は1897年に作られてたのでアポリネールやローランサンはこの橋から今と同じ光景を見たのだろう。ミラボー橋はアンリー・ルソーの絵、マリー・ローランサンの絵、アポリネールの詩で知られている。だから一度は渡ってみたいと思っていた。

アンリー・ルソーはアポリネールとマリー・ローランサンが恋人同士だった頃、「詩人に靈感を与えるミュージー」という絵タイトルで二人を描いている。しかし二人は結局別れることになる。アポリネールは恋の終わりにミラボー橋を詩に、ローラン

サンは愛のさなかにミラボー橋を描いた。彼女の「アポリネールとその友人たち」の絵の中にミラボー橋が小さく描かれている。



アポリネール

アポリネールは恋の終わりを思い
出の場所に託して詩をつくった。
これはシャンソンの語りの部分にな
っている。

ミラボー橋の下を
セーヌ河が流れ
われらの恋が流れる

イフ島

テレビのなかった子供の頃、「巖窟
王」、「二丁目一番地」、「少年探偵団」
「ああ無情」、「コロの物語」の連続ラ
ジオドラマを聞いていた。当時のラ
ジオはすごかった。声と音だけが
今でもジャン・バル・ジャンが馬車
を持ち上げるシーンが頭の中に思い浮
かぶ。

今回マルセイユは4回目、マルセ
イユはいい思い出がいっぱい。時間
の関係でコンドウに入れないので仕
方なく入った地元の人向けのカフェ。
安くておいしく毎日通った。英語も

通じないが、心は通じ合ったのだろ
う。マルセイユを去る時高価なお土
産をくれ、いつまでも夫婦二人で手
を振っていてくれた。マルセイユに
何度も来るのはイフ島に行くためだ。
アレクサンドル・デュマ作モンテ・ク
リリスト伯の主人公エドモン・ダン
テスが閉じ込められていたイフ島に
行くためだ。ダンテスが友人に陥れ
られ結婚式の当日逮捕され、この島
に14年間閉じ込められていた。イフ
島には小説がベストセラーになるや
いなや、エドモン・ダンテスの牢屋と



いうのが出来たようだ。今までイフ
島に何度か渡ろうとしたがクロウズ
ドと言われ船は出発しなかった。し
かし4回目にしてとうとう上陸する
ことができた。モンテ・クリスト伯、
エドモン・ダンテスの牢屋、ダンテス
が掘った穴など見学、そして、日本の
書籍も展示されていた。

アレクサンドル・デュマ黒人奴隷
の孫として生まれ波乱万丈の人生を
送る。お金が出来たとき、彼はモン
テ・クリスト城を作った。パリから列
車に乗ってポール・マルリーに降り



るとアレクサンドル・デュマの作ったモンテ・クリスト城をみる事ができる。放蕩癖のため金があつたりなかつたりの生活。彼の夢のあとのようだ。城の中に入ると書斎があり、彼の像や彼の作品(初版本らしい)演劇のポスターなどが貼られている。広い庭がありイフ島に見立てた周りを池で囲まれた塔、子供の喜びそう洞窟などがある。

メデイシスの泉

私は佐伯祐三の大ファンで彼を調べて本にしたことがあるくらいだ。佐伯祐三の描いたリュクサンブール公園は傑作のひとつだ。

リュクサンブール公園の泉に恋人とその二人を上から見下ろす男の彫刻がある。この泉は憩いの場で泉の周りに多くの人がベンチに集い、ハトが水を飲みにやってくる。

この大きな彫刻群はギリシャ神話

に由来する。恋仲のアーキスとガラテアを嫉妬した一つ目のポリペーモスが今まさに二人を襲おうとする場面。このメデイシスの泉はルイ13世の母メデイシスによって作られた。ルーベンスは「マリードメデイシスの生涯」という傑作を残している。ガラテアは「乳白色の肌を持つ者」という意味でガラテアという名前の女性には3人存在する。

1 海のニャンペ

2 ピグマリオンの妻

3 エウリテウスの娘

メデイシスの泉のものは海のニャンペでポリペーモスによって恋人アーキスを殺されてしまう。アーキスの血はシチリアの川になる。アーキスとガラテアの物語はヘンデルやハイドンなどによって音楽の世界でも表現され、絵画ではルドン、ラファエロなどによって描かれている。

ピグマリオンは理想の女性(ガラ



テア)の彫刻を作るが上ここでは飽きたらず本当の女性になつて欲しいと願ひ、その思ひはヴィーナスにより叶えられる。彫刻とキスするピグマリオンの絵はいくつかあり、絵の好きな人なら必ず目にしたことがあるはずだ。

アルルとオーヴェルシュルオウーズ

最近の旅行はゴッホ関連が多い。ずつと前にゴッホにてのいろいろな本を読んで彼の病氣や死について自分なりの結論を出していた。ゴッホの住んでいた土地にも訪れていた。ところが「テオもう一人のゴッホ」「ゴッホ契約の兄弟」「映画ゴッホ最後の手紙」など最近またゴッホに関する新しい説が出てきた。ゴッホはテオかゴーガンに殺された。もしくは近所の悪ガキに撃たれた。弾丸はわき腹の下から入っているから確かに自殺にはおかしい。自殺する

なら頭か胸を打つだろう。また兄弟の間で画商と画家という対等の契約がなされていたという説。そしてテオが神経梅毒で廃人となり亡くなったという説。

再び私はゴッホに興味を持ち始めた。この冬と夏のバカンスはアルルとオーヴェルシュルに宿泊した。

音を立てて吹く速い風、しかし昼間の太陽はまぶしくミストラルさえなければ暖かい。ゴッホはこのミストラルとまぶしい太陽が狂気をもたらずと感じるようになったとある。アルルで何人かの人と話してみたが皆日本に一度行ってみたいと、アルルの人は日本人が大好きみたいだ。

オーヴェルでは今回ガシュ博士の美しい庭家に入れた。また麦畑でカラスの群れをみる事ができた。昔ブルターニュで夕方カラスの群れが飛ぶのを見たことがある。フランスのカラスは小形で地面近く群れをな

し何度か方向を変えずすごいスピードで消えてゆく。感動する風景だ。きつとゴッホも麦畑でカラスの飛ぶ光景を見てきつと感動したにちがいない。ある解説書はゴッホが不吉な死を予感してカラスを描いたとあるがそんなことはないはず、感動したからあの絵を描いたのだ。朝、夕麦畑にカラスを見に行つた。確かにカラスは群れを成して飛んでいた。日本病跡学会で作品を見て作者の精神疾患を見るといふのがあるが私はこれは小説などには適応されるが絵画には当てはまらないと考えている。

ゴッホについて簡単にまとめてみる。アルルで共同生活の後ゴーガンをかミソリで襲いその夜自ら耳を切りその耳を娼婦に送る。売れた絵は生涯1枚だけだった。ガシュ博士を頼ってオーヴェルシュールオワーズに行くがその地で自殺する。弟テオも後を追うになくなり、二人の墓は共同墓地に並んでいる。この劇的な物語はゴッホをますます神がかりなものにしてしまう。ゴッホの絵は彼の死後世界的に有名になり、その生涯や絵について研究するものが続出した。

私のゴッホの病氣研究は耳切事件から始まる。今回は耳切事件について一部述べてみる。耳を切ったところから彼の精神異常は始まるのである。ゴッホが耳を切ったのはどの部分か？これは全部説と部分説にわかれる。

全部説

ゴッホの耳切り事件について128年越えの新発見。バンクロフト図書館で新たな証拠が見つかったとのこと。同図書館によると、「耳切り事件」の際に診療を担当した医師のフリックス・レー氏によるイラスト付きの手紙(図1)他に警部のロベール ゴーガンが全部説がある。

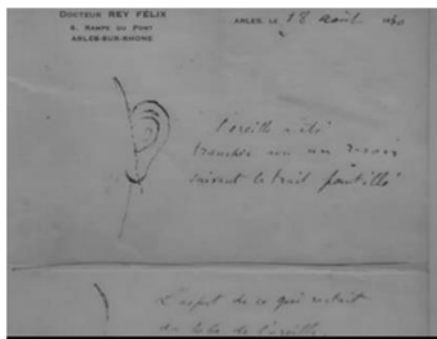


図1

部分説

記事は簡略だがゴッホの左耳の切断状況を最新技術の写真製版の図入りで紹介してセンセーショナルな扱いだった。「坊主としての自画像」(パリで描かれたものをゴーガンがアルルに持って来たもの)の写真を裏焼きにし耳の左右を逆にして切断部位に点線を入れて示すと言う疑ったものだった。(図2)

他に部分説を唱える者は以下である。

テオの妻であるヨハンナ・シヤニツク、ガシュの息子ポールが部分説がある。

ポールは父のエッチングの作品集のカタログの序文の中で死の床に横たわるヴァンセント・ヴァン・ゴッホについてこう書いている。「見えるのは左の耳であって耳たぶの欠けていることに注意されよ」(図3)



図3

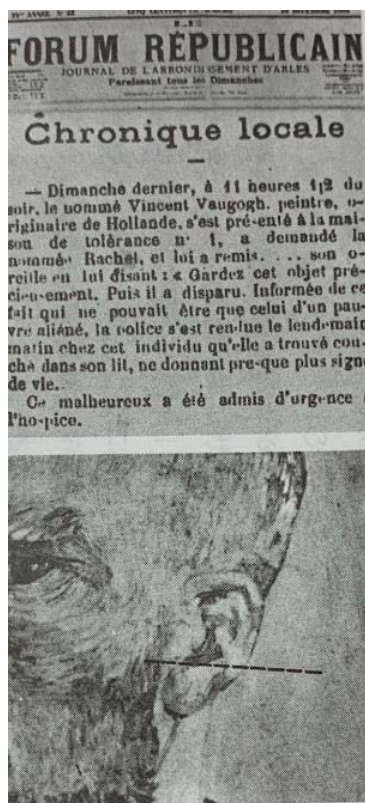


図2

ゴッホにとってゴーガンに去られるのはとても耐えられることではない。ゴーガンにカミノリを持つて近づくと、娼婦館に耳を届けるという行為は一騒動おこして自分に注意を惹くことである。左手で耳たぶを持つて髪の毛または髭を揃うとして転んで耳を切ってしまった。(包帯をした自画像は髭をそったように見える) アブサンを飲みながら暗いランプの下で小さな鏡を見ながらはずみで切

またルロア、ドアトール博士にあてた手紙にも「その切り取られた部分は耳の全部ではなくて耳たぶより少し大きな部分です。」と書いている。私はとどのつまりゴッホは神経症、ヒステリーではなかったかと考えている。ヒステリーとは「周りを巻き込む意図的でない利益誘導」とされる。

ってしまった。(アブサンとはニガヨモギで作られた強い酒である) 耳は簡単に切れてしまい驚いたのが本音である。また、その耳をラシエルという娼婦に送る、医師のところへ行くか、誰かに助けを求めれば大騒ぎにならなかつたはずである。ゴージャンを戻すため、テオに見てもらいたための行為である。

ゴッホは自ら直接圧迫止血法を試みた。その後娼家に耳を届け自分の部屋に戻る。

当然階段や床は血だらけであつた。耳の軟骨を切るとかなりの痛みがでる。

抗生物質も痛み止めもない時代、止血帯をしたままのゴッホの精神状態は異常でない方がおかしい。それも自分の家族のいない異郷の地での出来事である。

片方の耳がなかったとしたらそしてまたその傷が長期間痛いとしたら

精神面にかかなり大きなダメージを受けたであろう。

他に私の耳部分説を指示する理由

アルルの新聞記者は直接ゴッホの耳を見たと思う。その時はゴッホの耳を押さえた布を取つて見たと考える。警部は封筒に入つた耳を見たが、耳をバツサリ切つたといううわさは町中に広がり大騒ぎになつてしまつた。レイ博士がゴッホの耳をアルコール瓶に保存した耳がなくなつた話があるが、耳そのものの形をしたものであれば誰もそれを捨てなかつたと思う次第である。なおポールは父ガッシュ博士のコレクション、ゴッホ、ルノアール、セザンヌ、ピサロ、ギョーマンの作品29点をフランス政府に寄贈しそれらはルーブルに飾られている。

医芸俳壇



静岡 岩 本 漂 人

庭師指す松にキジバト抱卵す
剪定にキジバト抱卵続きおり
とある朝空巢となりしツバメの巢
田に水を引けばカルガモ湧き出ずる
ハクセキレイ暗渠の上を走り去る

東京 福 富 清 子

石榴の実葉陰に凜と自己主張
秋扇法会にわれが年頭
秋夕焼肴護師きつとペダル踏む
かなかなよ今生逢へぬもの呼ぶか
星飛ぶや今わたくしの在るはどこ

東京 福 神 規 子

笑まふとも違ふ猿の目涅槃西風
春愁や潜^{かず}きの長き鳩^{にお}を待ち
ニコライの鐘の間遠や花曇
リラ冷や洋館にある従者室
白拍子をりし世のこと花吹雪



医 芸 歌 壇



中華街

東京 小松 安彦

子の願ひ何でありしか熱心に祈りてをりき関帝廟に

横浜より帰れば「わたし中国に行つた」と汝れは真顔で語る

山道に「あんな降り方してゐたらいつか怪我するゆつくり行かう」

「山登りではなくあれは山下り」低き声にて汝れは笑ひぬ

天龍の乙女と川を眺めたり記念日となるべき日の夕べ

シヤウカステン

東京 林 宏 匡

シヤウカステン所見明るく照らしつつ四十六年わがパートナ―

シヤウカステンの光^{かけ}信じつつ診断を下せる医師になりそめし頃

四十六年前は新進気鋭なるシヤウカステンぞ労ひて拭く

シヤウカステン眺めゐたれば過ぎ去りしX線像交々に顕つ

画像診断全盛なれど胸張りてシヤウカステンは診察室に



機関誌『医家芸術』 大幅な発行の遅れのお詫び

このところずっと発行が滞り、大幅に遅れてしまったこと、深くお詫び申し上げます。ご投稿いただいている先生方を始め、多くの会員の方にご迷惑ご心配をおかけいたしました。『機関誌』そのものの見直しなど検討していた結果、なかなか発行できず、この時期となつてしまいました。詳しくは同封いたしました別紙をご一読ください。



令和2年度の会費納入のお願い

令和2年4月から令和3年3月までの年会費の振込用紙を同封しております。会員継続ご希望の方は、郵便局にてお振り込みをお願いいたします。日頃より会員の皆様のご支援ご協力を賜り誠にありがとうございます。今後ともどうぞよろしく願っています。



事務局について

事務局へのご連絡についてですが、いつも連絡がつきにくく申し訳ありません。在席している時間がほとんどないので、電話は解約いたしました。ご連絡はメール又はFAX、郵送でお願いします。お急ぎの際は、白矢眼科医院・スタッフ鈴木悦子までお願いいたします。042-341-0219

次号 原稿募集のお知らせ

次号(二〇二〇前期号)締め切り

令和2年6月30日(火)

発行予定…令和2年8月1日

次々号(二〇二〇後期号)締め切り

令和2年10月31日(土)

発行予定…令和2年12月1日

次号・次々号の原稿の締め切りを右記の通りいたします。

次号より色々と形態が変わります。同封のお手紙をよくお読み頂き、ご投稿をお願いいたします。

締め切りから発行までの時間を短縮するため、データ原稿でのご投稿をご協力よろしく願っています。